

なジャズの音に伴れて、桃紅色のうすものを纏つた十人ばかりの踊り子達がさつと舞臺の上に流れ出した。が、美代子は、その色と光との旋律的な渦巻を、たゞぼんやりとうつろな眼にうつしながら、心ではまるでほかの事を考へてゐた。

美代子は猪之助の事を考へてゐた。

「美イちゃん！ お前はそれでいゝのか？ それでいゝのか？」

「さういふ猪之助の聲が聞えた。裏切者！」

「さういつて睨みつける猪之助の悲憤の眼が浮んだ。」

「お前は瞞されてゐるんだ——お前は誰が本當にお前を愛してゐるかを知らないんだ。あの男がお前を愛してなんかゐるものか？ 本當にあの男から愛されてゐると思ふんなら、それはお前の考へ違ひだよ。」

「さういつた時、猪之助は、憤よりも、より以上の悲しみに打ちかたれてゐた。その悲が歎が、今強く美代子の胸を撃つのであつた。」

美代子は、そつと辰夫の横顔を見上げるやうにした。青々とした揉みあげのそりあと、つんと高い鼻、きりりと引しめられた唇——それ等のものがひどく素氣なげにむしろ冷酷な表情を見せてゐた。この人は自分の事なんかもうちつとも考へてはゐないのだ。この人は自分の外の何人かの事を考へてゐるのだ——美代子はさう心に繰返した。幕が降りた。坐つてばかりもゐられないので、二人は廊下の方へ出たが、互に一言も口を利かなかつた。美代子はなるべく遠く離れるやうにしてゐた。

ふと美代子は立止まつた。美代子の眸は躍つた。青色のドアの中から出て来た一人の婦人——黒つばいぢみな服装をしてゐたが、くつきりとした眼鼻立の、どんな

に多くの中へ交つてゐても、目立たずにはゐないその氣品の高い美貌！ 最初の一瞥では何處かで見たとやうな思つた。が、次の瞬間には美代子はそれが何人であるかをはつきりと思ひ出した。

美代子の眼とびたりと合つた時、むかうの顔にも一種の混亂が起つた。そして、その婦人の眼は、美代子ばかりでなく、美代子から五六歩の距離のところに、半ば柱にかくれて立つてゐる辰夫をも、それと認めたらしかつた。その唇が小さく開いて、聲のない叫が洩れたのでそれが分つた。

が、その時婦人の連と見える、まるくと肥つた和服の紳士が、何か婦人へ話しかけた。そして促すやうにして喫茶店の方へ歩いて行つた。

歩いて行きながら、婦人は一寸こちらを振り返つた。その燃えるやうな視線は、美代子の片頬をかすめて、辰夫の方へ走つた。美代子も辰夫の方へ振り返つた。が、腕を組んでうなだれてゐる辰夫は、それには氣がつかないらしかつた。

美代子は、ほつとした。そして、自分の身體で辰夫をかくすやうにしながら、婦人の後姿を見やつた。喫茶店へ入らとする時、婦人はもう一度振り返つた。が、辰夫は矢張氣がつかかなかつた。

「どうしたの？」

辰夫が、さう美代子に呼びかけたのは、婦人の後姿が、喫茶店のドアの中に吸ひこまれてからであつた。

「あの、もうこゝ出たいの。」

「面白くないかね？」

「いゝえ。さうぢやありませんけれど、何だかすこし頭痛がして來ましたから——。」

辰夫は、すこし躊躇したが、
 「ぢや、出よう。僕も實はあまり面白くないんだ。」
 辰夫は苦笑しながらいった。
 「折角連れて来ていたよいて？ 本當にすまないですけど——。」
 美代子は詫るやうにいった。

四

そこを出ると、美代子は大きく一つ溜息を吐いた。息づまる空氣の中から出て、漸く胸が開けたやうな気がした。が、そのためばかりではなかつた。あの令嬢と、辰夫とを逢はせずに済んだといふ事で、それで美代子はほっとしたのであつた。

あの女はこの人を愛してゐるのだ。この人もあの女を愛してゐるのだ。怖ろしい戀敵！ 折りも折りの今夜、こゝにあの女が來合はせてゐるよとは——。

もし、あの女がこの人と逢つたら？ と思ふと美代子の心臓にひやりと冷たいものを當てられたやうな気がした。だが、逢つたつて逢はなくなつて、この人があの女を愛してゐる事に變りはないではないか？ この人が本當に愛してゐるのが自分ではなくて、あの美しいお嬢さんである事にちつとも變りはないではないか？

美代子は深い絶望のうちにさう思返さざるを得なかつた。

「銀座の方へも行つて見ようか？」

濠洲の街路樹のかけに肩を並べて、何か考へ込みながら歩いてゐた辰夫は、美代子の方を見返つて斯ういつた。
 「えゝ。——どつちでもいゝわ。」

「ぢや、止めるか。」

ぶつりといつて、辰夫はひどく不機嫌さうだつた。

「ねえ、御免なさいね。石田さん。」

「何がです？」

「私、我儘いつて——中途から出て來てしまつたりして——。」

「いや、僕もあまり面白くなかつたんだ。」

「でも、入つたばかりで——。」

「入つたばかりでも何でも、厭になつたら出て來るのが本當さ。思ひ切りよくね。」

「石田さん！」

「なんだね？」

「あんたはもう厭になつたのね？ ね？——私のやうな何も知らない馬鹿な女、もう厭におなりになつたのね？」

「なあんだ。そんな事をいつてるのか？ は、は！」

「いゝえ。きつとさうだわ！ 隠しても、私知つてるわ。あんたは矢張り、あのお嬢さんの事思つてゐらつしやるの

ね？」

「又、そんな事をいひ出したのかい？」

辰夫は苦ツぽく笑ひながら、じり／＼と燃え迫る美代子の眼をうるささうに見返した。

「あのお嬢さん、今夜來てゐたわ。」

「なに？」

「あんたはお氣がつかなかつて——あの、いつかあんたを訪ねていらしたお嬢さんよ。槇村さんて人。」

「萬千子さんが、今夜来てた？」
辰夫は立ち止まり、激しい詰問の調子で美代子にいった。
「え、来てゐたわ。私見た——」

「本當か？ それは——」
辰夫はせきこんでいった。

「御免なさいね。私、それをあんたにはなかつたこと——」

美代子の聲はやゝ嘲を帯びてゐたが、その眼はいひ難い恨と悲とに濡れてゐた。辰夫のその驚、その動搖——それが、いかに深くあの女を愛してゐるかの明かな證據でなくて何だ？

「もう一度入つて、お會ひになるといふわ。私、こゝから一人で歸りますから。」

「別に會ふ必要もないけれど、本當にあの人來てゐたのか？」

「嘘なんか吐きやしません。」

辰夫は、すさまじく緊張した表情でちつと美代子の顔を見てゐた。

「ね、會つていらつしやい。きつと向うでも會ひたがつてゐるわ。——あんたの方を、ちつと見てゐたわ。」

「本當か？ 美伊ちゃん。」

「御免なさいね。私いへばよかつたんだけど——」

美代子の言葉は、冷たい皮肉でふるへてゐた。

その時、一臺の自動車、夜目にもしるく輕塵をあげて走り過ぎた。思はず見やつた辰夫の眼が、その走り過ぐる自動車の明るく切りぬかれた窓に、一枚の繪のやうな美しい半身像を認めた時、辰夫は我を忘れて、二三歩その方へ走り出した。

五

その刹那の視線をさらつて過ぎた車上の姿——それは萬千子の姿に違ひなかつた。

車上の萬千子は、勿論そんなことには氣がつかなかつた。——があの劇場の廊下での一瞥で彼女の心はずつかり混亂してしまつてゐた。彼女が、その同伴者を促して、中途から劇場を出てしまつたのも、そのためであつた。美代子は辰夫を萬千子に會はせまいとしたのだが、萬千子も辰夫と會ひたくなかつた。いや、會ひたくないことはなかつた。その横顔をちらと見ただけで、彼女は全身に燃えあがる炎を感じた。それだけに彼女は、會ひたくなかつた。會ひただけ、それだけ會ひたくない。その矛盾のうちに、彼女の苦があつた。

「何もさうびく／＼なさることはないと思ふがな。」

同伴者は——近々と肩をすり寄せて坐つた塙原幸藏氏は、萬千子の顔を覗き込むやうにしていった。塙原氏は、萬千子の見たものが、何人であるかを知らなかつた。——單なる知人だと思つてゐた。

「こんなところへ來れば、當然、一人や二人の知り人にも逢はにやならん。逢つても構ふことはないぢやないかね？ そんなにいち／＼びく／＼してをつちや、これからの世の中は渡つて行かれんと思ふがね。」

「それはさうでございますわ。でも、何だかきまりが悪うございましたから——」

萬千子は、わざとさりげなく笑つて見せた。

「は、は！ きまりが悪い？——きまりが悪いといへばわしも少々きまりが悪かつた。あの芹澤の奴、妙な顔をしてわしの顔を見て居つた。第二號——すばらしい第二號を携帯しとるとでも思つたんだらうな。は、は！」

「まあ、厭ですわねえ。」

萬千子は苦ツぼく笑つた。萬千子は先刻劇場の廊下で塙原氏と挨拶した禿頭の老紳士が自分に向けた淫らがましい

しよぼく眼を思ひ出し、許し難い憤を感じた。

「いや、失敬な奴だ。榎村氏の令嬢をつかまへてな。は、は！」

「いゝえ、私、もう令嬢なんかぢやございませんわ。」

「令嬢でなければ何だらうな？」

「塙原家の家庭教師でございますわ。」

萬千子はまじろぎもせずといった。塙原家の家庭教師——彼女は一日も早くこんな曖昧な地位から脱け出したいと思つてゐた。塙原氏は非常に親切ではあつたが、何かしら屈辱的な、そして妙に不安なものがそこに感ぜられた。いつまでもこんなことをしてはゐられない！ と、萬千子は思ふのだつた。

「は、は！ 家庭教師か。」

と、塙原氏は笑つて、

「わたしはもう少し斯う親身のつもりであるのだがな。どうもあなたは遠慮ッぽくていかんよ。もう少し打解けて貰つてもいゝと思ふがな。」

この頃際立つてぞんざいになつた言葉付で、塙原氏はいつた。

「いゝえ、私、ちつとも遠慮などしてはをりませんわ。」

「いゝや、あなたはどうも遠慮ッぽくていかん。世話になるとか厄介になるとかいふ考へはぬきにして、一つうんと我儘に振舞つて貰ふとわしは嬉しいのだがな。は、は！」

と、塙原氏はとつてつけたやうに笑つたが、

「ところで、わしは少し空腹なのだが、どうだね、夕飯を一つつきあつて下さらんか？」

「私、おなか空いてをりませんけど——。」

「まあ、よから。つきあつて下さい。飯でも食べながら、わしはあなたにお話したいことがある。」

「どんなお話なんですか？」

「まあ、それはあとでゆつくり話さう。飯を食ひながらゆつくりね。」

萬千子は不安な氣がした。しかし、運轉手はもう萬事心得てゐると見えて、自動車は、市ヶ谷の邸とはまるで別の方向に向つて走りつゝあつた。

「一寸飯を食ふだけだ。お手間はとらせんよ。」

塙原氏は不安さうな萬千子の横顔をずるい眼付で一吋見やりながらいつた。ずるい眼付、狐のやうな狡猾な眼付——同時に、それが狼のやうな貪婪な眼付であることにはしかし萬千子は氣がつかかなかつた。

水 際 の 家

一

自動車は明るい街暗い街を縫うて走つた。どこをどの方向に走つてゐるのか、萬千子にはまるで見當がつかなくつた。

「あの、どちらへいらつしやるんでございますの？」

「なに、もう直ぐだ。一寸、その、知つた家があるんでね。」

塙原氏は曖昧な調子でいつたが、

「御迷惑かも知れませんが、まあつきあつて下さい。お手間は取らせん。」

さう繰返すのだった。

やがて自動車がとめられた。「さあ！」と促されて、その木の門を入ると、浅い植込の間に濡れた石畳が續いて、

格子戸の内には吊燈籠の灯がぼんやりと照らしてゐた。

これがお料理屋なのか知らず、とふと疑念が頭をかすめたが、愛想よく迎へ出た中年の女中は、萬千子に躊躇の餘

裕を與へなかつた。

「さあ、どうぞこちらへ——。」

塙原氏の幅廣な背の蔭にもちく／＼してゐた萬千子の手を取らんばかりにして、滑るかと思ふほどよく拭き込んだ廊

下を、奥の方へと案内するのであつた。廊下は、小さい池などのある洒落た中庭を廻廊風に横断つたりして、やがて

六疊ばかりの部屋へと導いた。

塙原氏は紫檀の卓の前、八端の座蒲團の上にとどりと胡坐をかくと、

「まあ、そんな處に愚圖々々してゐないでお入りなさい。」

と、入り口で二の足を踏んでゐる萬千子にいつた。

「さあ、どうぞ——。」

女中も卓にふきんをかけながら萬千子の方を振返つた。女中の眼には、冷たい笑があつた。そして、このいかにも

物慣れた様子の女中は、そのまゝの眼で額越しにちらと塙原氏の顔を見た。塙原氏は、にや／＼笑の浮んだ顔を、指

に毛の生えた大きな手でつるりと撫でた。

いつまでもさうして立つてゐるわけにも行かなかつた。萬千子は座蒲團の端に膝をのせて、落着き悪く坐つた。

「お開けしませうか？」

女中がいふと、

「あゝ、開けてくれ！ 今夜はいやにむしくする。」

女中が障子を開けると、廣々とした大川の夜景が、水ッぽい匂を含んだ川風と一緒に座に流れ込んだ。對岸の屋根

屋根や、すこし上手に横たはつてゐる鐵橋やが、一面の淡い藍鼠に黒く影繪を浮かべて、遠近の灯影が、濃くうるみ

淡くかすんでゐた。鐵橋を渡る電車の音も、柔かにまる味を帯びて、さう耳ざはりにはならなかつた。——どこかで

三味線の音がしてゐた。

「まあ、こゝでございますの？」

思ひがけない眺めたつたので、萬千子はかう訊いた。

「かういふ處は初めてだらうね？ 一寸いゝ氣分の處ぢやないかね？——こゝで一つ、ゆつくり萬千子さんと話さう

と思つてね。」

「でも、早く歸りませんと——。」
 「なに、そんなにせつかちにする事はない。こんないゝ晩だ。わしは久振りで一ぱいやらうと思ふんでね。——だから、あんたも少し寛いでくれんな。」
 塙原氏はやゝ／＼笑ひながらいつた。その眼には何となく無氣味な、たとへば蛇の舌かなどのやうなものが仄めいてゐた。萬千子の胸には次第に不安が昂じて來た。
 「こゝ、お料理屋なんぞございますか？」
 「さうですよ。わしがいつも飯を食ふ處です。」
 女中はせはしく働いた。煙草盆が出て、しぼつた手拭が出て、お茶が出た時、五十ばかりの、反齒の、ひどく瘦せた女が、黒縮緬の羽織の肩を落して、ぞろりとした様子で入つて來た。
 「まあ、本當にお久しぶりでございますこと。この頃ちつともお見えにならないのでどうなすつたのかと思つてゐましたよ。いつも、相變らずお元氣で——。」
 騒々しい調子でいふと、この主婦らしい女は、
 「さあ、あなた、ずつと——。」
 と、萬千子の方へ、愛想笑を投げかけた。

二

そこへも一人の若い女中が顔を出して、風呂の加減が宜いと告げる。
 「ぢや、一寸一風呂浴びて來るかな。その間に飯の支度を頼むよ。」
 塙原氏が暢氣さうにいつて立ちあがると、

「あなた。いかゞです？ 御一緒に——。」
 主婦が眞顔でいつた。萬千子は眞赤になつた。
 「は、は！ この人はお嬢さまだからね。まさか一緒にといふわけにも行くまいで。」
 塙原氏が風呂に立つて行くと、主婦は後から追ひ廻るやうにして、二言三言何か囁いた。ぽんと肩でも打つやうな音がした。塙原氏の磊落な笑に、主婦の忍びやかな笑がからまつて聞えた。
 主婦は、口許に笑を残したまゝ座に戻つたが、
 「まあ、本當にお綺麗。どうして素人の方のお美しさは違ひますわねえ。お品が好くて——本當に！」
 まともにもまじ／＼と萬千子の顔を眺めていふのであつた。こんな露骨な賞讃を浴びせかけられたのは初めてだつたので、萬千子はひどく狼狽した。そして益々赧くなつた。
 塙原氏は湯氣の立つやうな身體を丹前に包んで戻つて來た。萬千子にも一風呂浴びて來るやうにとすゝめたが、萬千子は勿論斷つた。萬千子はもう氣が氣では無く、一刻も早く辭して歸りたかつたが、酒が出て食物が出て、塙原氏は愈々落着き込んでしまふのだつた。
 「いや、あんたは却々お酌がうまいで。あんたのお父様は飲ける方だつたので、それでつまりあんたも銚子の持ち方がうまいのだね。いや、榎村さんのお嬢様に斯うしてお酌をしてもらふとは、わしもこれで果報者です。」
 そんな事をしゃべり立てながら、塙原氏は上機嫌だつた。「おあがり」「おあがり」と萬千子にすゝめながら、塙原氏は箸はとらずに杯をのみ重ねた。さう強い方ではないらしく、塙原氏は直ぐに赤くなつた。そして酔が廻るに従つて塙原氏の言葉は次第にぞんざいになり無遠慮になつて行つた。
 「なあ、萬千子さん。本當にあんたはなんにもなかつたのか。——情夫があつた、それであゝいふ事をしたのだといふ専ら評判だつたがな。情夫があつたといふのはありや嘘だつたのかな？」

細い眼でにや／＼と笑ひながらいふのであつた。

「まあ、そんなこと——」

と、萬千子は、酒の上とは思ひながら、許し難い氣持で、キツと相手を見据ゑるやうにしてから、仄白んだ面を膝に伏せた。そのうすい紫の半襟から、臺を抽んじた白い花びらのやうに見える襟脚のあたりを、塙原氏は淫らがましい眼付で、眺めまはすやうにしながら、心の中で思ふのだつた。——いや、すばらしいもんだ。結婚して新婚旅行に出たといふのだから處女ではあるまいが、處女も同然のこの初々しさはどうだ？ かういふ純な美しさといふものは、玄人女などちやとても味はへるものぢやアない。といつて職業婦人のやうな、物欲しげなとは違ふし、矢張お嬢さんだ、お嬢さんに違ひない。だが、このお嬢さん、なかく／＼氣象者らしいから少々手剛いかも知れんて！——なかに手剛いといつたところで、たかゞ女一匹の、それも世間知らずのお嬢さまだけに案外仕事はしやすいだらう？ 何しろ最初の一度だ！ 最初の一度だけ、力づくでなりと従はせてしまへばあとはもうこつちのものだ。親もなけりや家もない——自分の力でよう生きて行けぬ女一人だ。泣かうが喚かうが所詮必要の前へ屈服するより外ないわけだからな。

「は、は！ 怒つたのかな？ こりや、わしのいひ方は少し無遠慮過ぎたかも知れん。が、まあ、そんなに怒らんで宜から、どうだね？ あんたも一つ、その杯をお乾しなさい。」

塙原氏は、銚子をとりあげた手を、萬千子の前の杯へ延ばした。

「あの、私もう歸らなければ——お先へ失禮させていただきます。」

「歸る？ 歸るなら一緒に歸るて、まあ、そんなせつかちな事をいはんで——まだ早いのだよ。まだ八時をちよつと廻つたところだ。T劇場のはねは十一時過ぎの筈だ。その時分に歸らんと、却つて變だからね。」

塙原氏は手酌で無暗にぐい／＼とやりながら、舌もつれのしはじめた言葉でいひ續ける。

「何故變だつて？ さうぢやないかね？ T劇場へ行くといつて出て来たのに、はね前の時間に歸つたら、あのヒステリーの婆アさん、こりやア劇場へといふ口實でほかのどこかへ行つたのだと邪推するかも知れん。そんな邪推でもされると一層事が面倒になる。ね。」

「まあ！」

「は、は！ 實際あの婆アさんにやわしも弱つとるんだ。あんたは氣がつかんかも知れないが、あのヒステリーめ！ あんたとわしの仲を妙に勘ぐつとるのでな。は、は！ 困つた婆アさんだ。」

「まあ、そんな事が——」

と、萬千子はあきれて眼を睜つた。「婆アさん」といふのは、病身な塙原夫人の事だつた。

「いや、本當ですよ。あの婆アさん、わしがあんたをわしの家へつれて来た最初から、もう變な眼でわし達を見とつたのです。は、は！ ところでわしは白狀するがね、この點ぢやどうも婆アさんを咎められん氣がするのだて。といふのは、正直の話、わしはあんたとおちかつきになつてから、何か斯う氣持に張が出来たやうな氣がしてな。どうも、その、妙なのだよ。」

塙原氏は、もう露骨にそのアムーラスな眼付をあびせかけるのだつた。

「まあ、何を仰有るのでございます？」

「いや、本當だ。なあ、萬千子さん、わしはこれで淋しい人間なのだ。人間といふものは、どんなに物質的に恵まれてもそれで幸福とはいへんといふ事を、わしはしみ／＼と感じるのだよ。わしはこの年になるまで富を積むためにあ

くせくと働き續けた。そしてどうやらその初一念は貫きおほせた。自分の口からこんな事をいふのも可笑しいが、わしも今では相當の金持だ。は、は！」

「だが、わしは淋しいのだ。わしは愛といふものを知らなかつた。それでわしは淋しいのだ。わしはこれッばかりの愛のためにでもわしの全財産をなげうつて悔いしないだらう。ところで、わしはあんたと逢つた。かうしてあんたとおちかづきに逢つた。わしのやうな老人がこんな言葉を使つては可笑しいかも知れんが、わしは初めて愛といふ奴にめぐり逢つた氣がするのだよ。」

塙原氏は、相變らずにや／＼と笑ひながらいひ續けるのであつた。

「私、そんな事伺ひたくございません。——私、お先に歸らせていただきます。」

萬千子はわな／＼と聲で、面を正していつた。そして半座蒲團からすべつて居すまひを直した。

「は、は！ まあさう逃げんでも宜い！ 何もさうかといつて、わしがあんたをどうといふそんな野心はないのだよ。は、は！ 何もさう怖がる事はありませんよ。」

「でも、もう遅くなるし致しますから——。」

「どうも困るな。わしはたゞわしの心持をいつただけなのだ。は、は！ あんたは怒つたのかな！」

塙原氏はするさうな眼で萬千子の顔を覗き込んだ。

「いえ、私——。」

「まあいゝ。歸るにしてもまあ飯を食つて——ね。どうもさうつまらん事に怒つちや困るな。」

そこへ、主婦が、新しい銚子を持つて入つて來た。

「大分お話が持てますね。」

主婦は微笑しながら二人の顔を見較べるやうにした。

「いや、わしはこのお嬢さんにすつかり怒られてしまつたのだよ。は、は！」

「まあ、どうしてせうね？ どうも困りますね、喧嘩なぞなすつちや——。」

主婦は、わざとむづかしげな顔をして見せて、

「私、またしんねこですつかりお話が持てゝゐるとばかり思つてをりましたのね。」

「いや、失敗、失敗！ は、は！」

塙原氏は笑ひながら立ちあがつた。膝前をはだけて、大きな身體を山車のやうに揺りながら部屋の外へ出て行かうとする。

「おしもでございますか？ おあぶなうございますよ。」

主婦はさういひながらついて出て行つたが、どうしたのか塙原氏はなかくそこへは戻つて來なかつた。

この間に歸つてしまはう！ と萬千子が思ひ定めて立ちあがらうとした時、主婦がそこへ入つて來た。

四

主婦はさり氣ない笑顔でいつた。

「あちら、ひどくお酔ひになつて苦しがつてゐらつしやいますのよ。あなた、行つて介抱してあげて下さいました。」

「まあ、そんなにお酔ひになつて——私、もう歸らなげやならないのでございますが——。」

萬千子はびり／＼と眉を動かした。

「あちらも、お歸りになるといつてゐらつしやいますんですが、何分ひどくお苦しうなんですの。本當にどうなすつたのでせうね。さう澤山も召上らないのにねえ。一寸行つて見て上げて下さいました。」

さういはれると、厭だとはいひ切れなかつた。萬千子は、主婦について、闇い廊下を幾曲りかした。「こちらでございます。私、あとからお冷をもつてまゐりますから——。」

主婦はさういひながらすつと唐紙を引開けると、萬千子の肩に手をかけて突き入れるやうにした。萬千子の後で、ばたりと唐紙がたてられた。

よろめくやうにその小座敷に足を踏み入れた萬千子は、思はず、「あッ！」と聲を立てた。薄桃色の蓋で漉された淡い電燈、華美な色彩をほめかしてゐる寢床の蒲團、その上にあぐらを掻いてゐる植原氏のにや〜笑ひながら見迎へた眼！——その眼！ 慾情のために燃えふすぼつて、暗く輝く獸的な眼！

今こそ、萬千子は正體を見た。戦慄が彼女の全身を走つた。彼女はくるりと踵を返すと、そのまゝ外へ逃げ出さうと唐紙の引手に手をかけた。

「は、は！ お待ち。逃げる事はない。」

とつかは飛びかゝつた植原氏の双腕が後から彼女の肩をおさへた。

「まあ、こつちへお出で。話があるのだ——。騒いだりしちや見ツともない。」

淫りがましく引ゆがめられた顔——近々としよせられた醜い大きな顔が怖ろしい怪物かのやうに彼女の眼の前にひろがった。酒臭い息が、喘ぐやうな嘎れ聲と一緒に彼女の頬に亂れかゝつた。

「失禮な！ 何をなさるのです？」

——恐怖を乗り越えて、激しい憤りが彼女の全身に燃え上つた。

……………

それからどうしたか？——彼女は一眠夢中だつた。そのあさましい格闘が凡そ何分ぐらゐ續いたか？ どうしてそ

の危機を脱したか？ 彼女はまるで無我夢中だつた。彼女が漸く我に返つた時、彼女は暗い横町から、明るい大通への出口の處の、電柱の蔭でよろめく足を辛うじて踏みこらへてゐた。

跣足だつた。羽織の紐の乳がもげて、肩からずり落ちさうになつてゐた。束髪の鬢が頬に亂れてゐた。——ふと気がつくくと、片手にしつかりとセルロイドの髪針を握つてゐるのであつた。

その髪針が、あつと聲を立て、頬を押へながらのけぞつた植原氏の顔を思ひ出させた。つゞいて、驚いて何か叫んでゐる主婦の顔や、出口の格子戸の處で袂を押へて離すまいとした女中の顔やが浮んだ。すべてが悪夢の中の光景だつた。

危ないところだつた！ それにしても何て事だらう？

萬千子はあさましい自分の姿をかへりみた。

彼女は手早く襟を掻き合せたり、崩れた膝前を直したりした。

後の方で足音がした。何人か走つて来るやうだつた。

かうしてはゐられない！

恐怖が再び彼女を捉へた。彼女は思はず走り出した。爪先に石が當つた。彼女は跣足である事に気がついた。彼女は途方にくれた。

と、そこへ一臺の自動車が一市内一圓の札をさげた自動車が、走つて来た。彼女は手を振つた。自動車はとめられた。が、運転手は彼女の様子を見ると、けとんさうに眼を睜つた。

「早く、早く——早く乗せて下さい！」

「どうしたんですか？」

「早く——」。

彼女は自分で扉を開かうとあせつた。
事情は分らないながら危急の場合と察したのだらう？
自動車は萬千子に乗せると、高く警笛の音を立て、走り出した。

城西ホテル

一

自動車が走り出すと萬千子はほつと息をついた。安心して氣が弛むと共に、また新しい戦慄が彼女の全身をわなな

かした。
あの男が？——あの何人の眼にも温良恭謙の紳士としか見えないであらうところの假面の下に、あの毒悪無慚の淫魔の正體を潜めてゐるようとは？——萬千子は今にして漸く知つた！彼のこれまでの親切も好意も、皆今夜のための準備であつたことを。今まで、老人らしい冗談として、一寸顔を赧める程度で聞きのがし見のがしてゐた、折々の言葉やしぐさが、すべてさうした底意のあらはれであつた事を。塙原邸の一月あまりは、思へば、いつか喚はるべき餌食として飼はれてゐた一月あまりだつたのだ。さう思ふと、何も知らずに多分の感謝を以てさへそんな處に起居してゐた自分の迂闊さが、萬千子は無暗に腹立たしくなつて來た。

「どちらへまゐりますか？」

運轉手は、少し走り出したところで一寸振り返るやうにして訊いた。訊かれると萬千子は當惑した。

何處へ行く？

勿論塙原邸へは歸れない。と、すれば一體どこへ行くのだ？——萬千子の當惑は、あの柳子のアパートを追はれた時のそれよりも、もう一層切迫したものであつた。

「あの、こゝはどこなの？」

われながら妙な問ひだつた。

「中洲を出はづれて濱町へかゝつた處です。」
 運轉手は速力をゆるめながらかう答へたが、
 「どの方面へいらつしやいますか？」
 「さうね。」
 と、萬千子は沈吟して、
 「まあ兎に角走らせてゐて頂戴。そのうちに考へるから。」
 「この自動車は新宿に歸るんですが、あの方面ぢやいかうですか？」
 「ええ。いゝわ。」
 萬千子はわざと快活に答へた。
 運轉手——ハンテングに毛絲のスウェーター、廿五六とも見える小ざつぱりした男で、蒼白く頬骨がとがり、三白眼が鋭く輝いてゐた——は、ハンドルを握りながら、ちよいくとその鋭く輝く眼をあげて、前にさがつた鏡を見た。鏡には、その不思議な乗客の、蒼ざめた頬が、をのゝく眸がうつゝゐた。
 自動車は走り續けた。
 やがて、四谷見附近くまで来た時、萬千子は前に下宿してゐた家の事を——あの親切な小母さんの事を思ひ出したが、その家は埴原に知られてゐる。當りをつけて追ひかけて來まいものでもないと思ふと安心出來なかつた。
 「今夜、どこかへお泊りになるんですか？」
 と、その時運轉手が訊いた。
 「ええ、今夜だけでいゝんですけれど——。」
 運轉手はそのまゝしばらく黙つてゐたが、

「ぢや、どうですか？ 城西ホテルへ御案内申しませうか？」
 「——ホテル？」
 「ホテルツたつてあまり上等のぢやありませんがね。女の方が一人ぢや、普通の宿屋ぢや泊めないかも知れませんが、お泊りになつても不用心です。城西ホテルでよろしかつたら、御案内申しあげませう。あすこの番頭を私は知つてますから。——新宿の驛のすぐそばです。」
 「さうね？」
 「あすこなら安心してお泊りになれます。」
 「ぢや、さうしていただきませうか知ら？」
 「ぢや、兎に角城西ホテルへやりませう。」
 自動車は四谷の通をまつしぐらに走つた。
 「あの、運轉手さん。」
 と、自動車が新宿の驛近く來た時萬千子は呼びかけた。
 「濟みませんがね、この邊で履物を賣る店があつたらとめて下さいな。」
 「履物？」
 いぶかしむやうにして振返つたが、すぐにうなづいて、
 「承知いたしました——何だか飛んだ目にお遭ひなつたやうですね。」
 運轉手は氣の毒さうに微笑した。

運轉手は大變親切だつた。——彼は今夜萬千子の上に起つた出来事が何であるかを略察してゐるらしかつた。そして、この美しい受難者のために、出来るだけ忠實な庇護者であらうとするかのやうに見えた。

新宿の停車場近く走つて来た自動車はその邊の雑沓をくより抜けて、とある横町を左へ曲つた。——あの大地震以後、この方面の郊外の目ざましい發展に伴うて、この邊一體は、市中でも屈指の繁華區域になつてゐた。最近までは荷馬車が埃を揚げて通つたりして、ごみくした家並に宿場らしい貧しげな風情を残してゐたのが、今では大きな百貨店が層樓の高さを競ひ、ハイカラなカッフェなどが軒を並べて豊饒な夜の灯影に、うづまき返す人波は、正に「山の手の銀座」であつた。いや、今工事中の大規模な劇場や、映畫館が落成してもしたら、銀座に更に淺草を加へたやうな一大歡樂境が現出されるであらうと想像される。そこではすべてはまだ、整はなかつた。混亂してゐた。都會そのものゝ意慾が最も尖鋭化されて、相撃ち相亂れるその情景は、寧ろ荒々しいものであつたが、それだけに生々として活氣がみなぎつてゐた。

銀座裏の夜更にストリート・ガールが現れるといふ噂は半年程前から聞いたが、近頃ではこの邊にもそれが出るといふ。新宿驛の待合所に密會の男女の影が絶えぬといふ事をおつて新聞紙は報じてゐたが、さういへば、不良少年の跋扈の甚だしいのも、淺草と銀座とに次いではこの邊だといふ事だつた。灯影が増すにつれて暗は却つて濃くなる。あまりに明る過ぎる街を、一步裏に入ると、あまりに暗い街がそこに續いてゐた。

自動車は、その暗い横町をはひつて行つた。そしてもう一つ、より狭い横町へちよつと曲つたところで停められた。「こゝでございませう。」

運轉手はそこで自動車を停めた。

それは、粗末な古びた漆喰の三階建であつた。硝子戸の中からわづかばかりの灯影と人聲とが漏れるレストランの入口と並んで、二階ほどの狭い間口がすぐに二階への階段を見せてゐた。

運轉手はドアを開けた。が、萬千子は降りようとして躊躇した。

「あの、私、お願があるのよ。」

萬千子は、のぞき込んだ運轉手の顔を見迎へながら、思ひきつたやうにかういつた。

「何ですか？」

「私、お金がないのよ。——紙入を落してしまつたものですから。」

——先刻廢物を買はうとした時に萬千子はそれに氣がついたのである。たしか、帯の間へ入れておいたつもの紙入がなくなつてゐるのであつた。運轉手が見つけて来て呉れた粗末なフェルト草履、その立替へて貰つた金も拂へないのだつた。

「それでね、本當に濟みませんけどね、この指環——これ、どうかしてお金にならないでせうか？」

「さうですか。なあに、車賃なら、あとでも宜しいのですがね。」

「でも、今晚泊るお金がないのよ。」

「さうですか？」

運轉手は一寸考へるやうにしたが、

「そんなになさらないでもどうにかなると思ひますが、ぢや、兎に角お預りませう。」

運轉手は、萬千子の手から、今萬千子の左手の無名指から脱かれたばかりの指環を——金の蒲鉾型の結婚指環を受

取つて、ちよいと灯に透かすやうにしてから、

「こんなものお預りしちや何ですが——ぢや、これで何とかして見ませう。すぐにあとからお届けしますから、兎に角、まあ部屋をおとりなさい。こゝの支配人でも給仕でも私はみんなよく知つてゐるんです。私からよく話してあげませう。」

萬千子は助かつた気がした。萬千子が自動車から降りた時は、運轉手は、その受付の處にゐる男に何か小聲で話してゐた。

「どうぞこちらへ！」

給仕だか支配人だか分らないが、垢染みた、洋服を着たすくけたやうな男が、萬千子を招いて先に階段をのぼつて行つた。

その階段をのぼつて行く萬千子の姿を、入口の處で、ちつと目送してゐる一人の男があつた事に、萬千子は勿論運轉手も気がつかなかつた。

三

ホテル——といふと立派さうだが、思ひきつて安價な粗雑な建物だつた。部屋數もさう澤山はないらしく、部屋部のドアは何となく秘密深げに鎖されてゐた。白粉の濃い、しどけない姿の若い女が、半開のドアの蔭から臆病さうに覗いてゐたりした。

萬千子の案内されたのは二階の二十六號だつた。六疊ばかりの箱のやうな狭い部屋、一方に兩開の硝子窓がついて、あとは鼠色の壁、その壁際に粗末な眞鍮の寢床が据ゑられ、窓際の方には、安物の椅子と卓、卓の上には瀬戸物の灰皿が一つ置かれてゐた。全體がひどくみすぼらしく、天井からぶらさがつた電燈の光さへ、何となくよこれた感だつた。

が、どんなにきたない部屋にしろ、これで今夜一夜の眠が保障されたと思ふと、萬千子は安心した。萬千子は寢床に腰をかけて、心の底からはツと深い溜息をついた。今夜一夜はどうやらこれで過せる。だが、明日は一體どうすればいゝのだらう？

明日を思ふと、萬千子の心は眞暗になつた。曠野の暗に道を失ひ、しかも望むべき一點の灯さへない氣持だつた。「明日！」

かつては戀と希望とが彼女に明日を待たせた。

その明日が失はれた時、彼女は自由と一戦とに新しい明日を望んだ。あくまでも自分自身の自由のために生きよう！ 待つことなく待たるゝことなき一個獨立の女性として、自分の力で勇敢に生き、且つ戦つて行かう！ これが彼女の覺悟だつた。

だが、どこに自由があつた？ 何を生き何を戦つたといふのだ？——たゞ、狩場の小兎のやうに驅り立てられ、追ひつめられ、安らぎもなく逃げ廻りながら、辛うじて一刻の身を全うしてゐるに過ぎないではないか？

彼女は今更のやうに世の中の怖ろしさを思ふのだつた。同時に自分自身の案外の無力さ、臍甲斐なさに腹を立てずにはゐられないのであつた。

「何といふ意氣地なし！」
彼女は自分で自分を罵つて見た。

（だつて仕方がない！ どうにもならないのだもの——）

その罵の下から、悲しげに訴へる聲がした。

彼女はふと眼をあげた。向うの壁に鏡がかゝつてゐる。その鏡の中から悲しげな眼がちつとこちらを見てゐた。——その鏡に映つた顔を見てゐるうち、そこにもう一人の自分があるて、悲しい眼で訴へてゐるやうな氣がして來た。（可哀さうな萬千子！）（氣の毒な萬千子！）彼女は鏡に向つてかういつた。

彼女は鏡から眼を離して、自分の手を見た。自分の足を見た。手も足もそれ／＼嘆いてゐるやうに思はれた。手——彼女は、先刻までそこに輝いてゐた指環がなくなつてゐることに氣がついた。

あの柳子のアパートを出た時はそれでもまだ紙入の中にはいくらかの金が残つてゐた。それもなくなつてからは、かなり激しい物質的缺乏に苦しめられなければならないかつた。左手の無名指を飾つてゐた二つの指環のうち婚約指環の方はもうとうに金に換へられてゐた。結婚指環だけは、不思議な愛着が感じられて、どんなことがあつてもこれだけは手離すまいと思つてゐた。

——が、それもたうとう失はれてしまつた。

萬千子はその失はれた指環のことを思つた。と、同時に、あの啓三郎のことがしきりに思はれて來た。あらゆる男性が、不純でなければ無恥であつた。——あの辰夫は自分をこゝまで誘ひ出して置きながら、外の女を愛してゐる。彼女は、今夜あのT劇場でちらと見た、新しい愛人をつれた辰夫の姿をくわつとする氣持の中にもう一度思ひ浮べた。あの人も結局自分を裏切つた。そしてその外の男は——皆貪慾な執拗な獵師でしか若しくは野獸でしかなかつた。——本當に自分を愛してくれた人は、あの啓三郎の外になかつたのだ！

萬千子はさう思はずにはゐられなかつた。

四

あんなにまで、厭はしく呪はしく、それゆゑにこそあゝして思ひ斷つた手段で振棄て、逃げて來たあの啓三郎が、今は何となく懐しく、むしろ戀しいものとして新しくその胸に魅、りつゝある。これは實に、自分ながら思掛けない變化であつた。この不思議な心の變化はいつの間にか起り、いつの間にかたちづくられてゐたのか？

あの人はどうしてゐるか知ら？ あの人はどんなに私を怒つてゐるだらう？

いや、もう私の事なんか忘れてしまつたかも知れない。そして、ほかの誰かと結婚してゐるのかも知れない？

宮子——さう、さう、宮子さん。あの人の隣にはあの宮子さんといふ人がゐた筈だ。

萬千子は、たつた一つ残されてゐたところの、その最後の裝飾を失つた指を眺め、同時に淋しい自分の心を眺めた。だが、彼女はやがて、より現實的な問題に引戻された。あの運轉手——親切さうではあつたが、素性も知れない辻タクシーの運轉手などに、指環の處分を頼んだ事が、彼女は次第に不安になつて來た。

大事な指環——それは、思へば恥かしい事だが、啓三郎の記念だからといふ意味以上に、この場合大事なものでなければならなかつた。勿論、さうした性質の品物を糧に換へねばならぬ事の、心苦しさ、淺間しさは、この前、約指環の方を處分する時にも強く感じた事だつた。せめて残された一つの方は、どんな事があつても、糧のために手離すやうな事はしまいと思つてゐた。が、今は、どんな恥を忍んでも、あの指環を役立てる事が絶対に必要だつた。あの指環の外には、金目のものは何一つ身につけてはゐなかつたのだ。若しあの運轉手に、あのまゝ、あれを持逃げされてしまつたら、今夜の部屋代さへ拂へなくなるわけだ——。

咄嗟の場合だつた。思慮をめぐらす餘裕がなかつた。轉倒してもゐ、慌てゝもゐた。だが、それにしてもあまりに輕卒過ぎた。

萬千子は降りて行つて、あの運轉手と見知り越らしい支配人に、あの運轉手がたしかな男かどうかを問ひたとして見ようかと思つた。

しかし、あんなに親切さうな男だつた。

——それにまだ、あれからいくらか経つてゐるはしない。疑ふにはまだ早過ぎる。

彼女はさう思返した。

兎に角ひどく疲れてゐた。彼女は羽織だけぬいで寢床の上に身を横たへて眼を閉ぢた。

が、何か落着かなかつた。まだ何かに追はれてゐるやうな、つけ狙はれてゐるやうな氣がした。彼女は寢床の上に取りあがつた。そして、時々廊下の方で聞える登音や人の氣配に、聽耳を立てた。

——萬千子は、彼女がこのホテルへはひつて来た時、彼女の姿を、入口のドアの蔭のうすくらがりからちつと打ちまもつてゐた一双の眼があつた事に気がつかなかつた。そしてそれが、あの執拗な求愛者——といふよりもむしろ理不盡な愛の強請者であるところの吉浦助の眼であつた事に気がつかなかつた。

勿論、少し経つてから吉浦が、このホテルにはひつて来て、同じ二階の一室に部屋をとつたといふ事も知らなかつた。

吉浦が、萬千子の姿を認めたのは、萬千子の乗つた自動車、荒木町あたりで、一寸停滞してゐた時だつた。吉浦は、すぐにタクシを呼び留めて、そこから追跡して来たのであつた。

吉浦の部屋は、萬千子の部屋と同じ廊下に面して並んだ二十一號室であつた。

吉浦は、普通の宿泊者のやうにして部屋をとつた。そして、萬千子の部屋がどこであるかを、給仕の口裏を引いた

りして、それとなく物色しつゝあるのであつた。

——しかも見よ、萬千子に對して牙をときつゝあるもう一人の男がそこにゐた。

そのホテルの階下の一部は、宿泊者のための食堂を兼ねたレストランになつてゐた。

先刻の運轉手はそのレストランの片隅のテーブルに坐つて、ブランドイの杯をなめながら、その三白眼をきら／＼ときらめかしてゐた。まるで、洞の中の獸のやうに——。

五

辛うじてあの老いたる猥々から逃げおほせたと思つた萬千子は、知らぬ間に第二のワナに落ちてゐた。そこには一匹の蛇が、鱗首をもたげて狙ひすましてゐた。

そして、更に一匹の狐がゐた。さうだ。彼は狐だつた。勿論、大した悪黨といふのではないが、一臺のぼろ自動車で

東京の町中を乗り廻し、客の足許につけ込んで不當の貨錢をむさぼつたり、秘密の岡場所へ案内して口錢を儲けたり、場合によつては誘拐の手先をもつとめたり——といふやうな、要するに運轉手の鑑札をもつた不良青年だつた。一臺の自動車をもつてにして街の暗黒の隅々にけちくさい悪事を漁り歩く朦朧運轉手の一人だつた。

——兎に角素暗らしい代物だ！

自動車を近所のガレージに預けて来て、さつきからそこに坐つてゐる運轉手は——朦朧運轉手の山田菊次は、にやりと笑ひながら、もう一度かう心に吐いた。そして、洋服の内隠から金指環をとり出すと、その燦然たる輝に眼を

細めながら、指の先でひねくり廻した。

この指環一つだけだつて、一寸近頃ない拾物だ。つぶしにしたつて、かなりの價値物だらう！

だが、こんな指環は兎に角として、あの女だ！ あれは一體どういふ女だらう？ いゝところのお嬢さんのやうでも

あるし、それにしちや割に服装も粗末だし、第一、歸るところがないといふのが變だし——。

何にもしろ、歸る處がない——といふのがこつちのつけ目だ。あゝして階上の部屋をとつて、しかも部屋代さへ持

つちやゐないんだから、逃げ出さうたつて逃げ出せるわけはない。それに帳場の小山にも、預かり物だから氣をつけ

てくれるやうにと十分耳打ちはしてあるんだし——。

兎に角、もう完全にこつちのものだ——と、運轉手の山田はほくそ笑むのであつた。だが、その「すばらしい代物」

であるところの、思ひがけない獲物を、一體どう處分すればいゝのか？ 悪黨としてまださう劫を経てゐない山田は

ちよつと手の出しやうがない氣がするのだつた。たしかに素晴らしい獲物には違ひないが、少し大き過ぎて手に餘る

といふ感じだつた。

そこで彼は、彼の相棒の一人を電話で呼び寄せる事にした。——それは、淺草の方のある小歌劇の樂屋にころ／＼

してゐる雑誌記者あがりの男で、彼などよりも十倍も、凄腕のそれこそ本式の悪黨であつた。——あいつならどんな

事でもやツつけるだらう？ まあ、あいつに會つて、あいつに片棒をかついで貰ふ事だ！

そこへ電話で呼び出を頼んだ女給仕が戻つて来た。

「平井さんて方、あませんて。」

「ゐない？」

「ええ。今日はいらッしやいませんて。」

「ちえッ、仕方がないなあ。今日は来ないつて？」

「ええ。来ないんですッて。」

白粉をべたく塗つた鼻の低い女給仕は、ふと、山田の手の中の指環に眼をとめると、

「あら！ それどうしたの？」

と眼を瞠つた。

「何でもないよ。」

「ちよつと、見せて頂戴。」

馴染らしい女給仕は無遠慮に手をのばした。

「いや、見なくてもいい。」

「あら、見せて頂戴ッたら！」

「眼がくらむよ。金だぜ。」

「さうねえ。あら、この光るのダイヤね。」

女給仕は、山田の手からそれを奪ひとるやうにすると、

「まあ、山田さん。どうしてこんなもの手に入れたの？」

「貰つたのさ。大したもんだらう？」

「まあ、誰から？」

「むろん、女からさ。」

「あら、これ結婚指環ね？」

女らしい興味と好奇心とでその指環をひねくり廻してみた女給仕は、かう驚いたやうにいつた。

「結婚指環？ へえ！ そりや一體どういふんだい？」

「あら、結婚指環を知らないの？」

六

女給仕は指環をひねくり廻しながらいつた。

「結婚指環を知らないなんて、あんたも話せないのね。これはね、結婚した時に、お互に記念として取交す指環なのよ。ね、これ蒲鉾型でせう？ 蒲鉾型は、結婚指環よ。」

「へえ？ そんな指環なのかい？」

「さうよ。生涯お互に變るまいといふ誓の印なんだわ。だけど、一體どうしてこんなもの手に入れたの？」

「なるほどね、ぢやア却々大したものなんだな。」

「そらね、こゝに字が彫つてあるでせう。(1928・10・25)一九二八年なら去年でせう？ 去年の十月二十五

日に結婚式を挙げたんだわね。(K・O)これが頭文字だわ。」

女給仕は得意さうに説明した。

「ほう、そんな字がいてあるんかい？ ちよつと、お見せ。」

運轉手の山田は、女給仕の手から指環を受取ると、

「なる程ね。10・25の十月二十五日か。去年の十月二十五日てえとまだほやくだね。」

さも感心したやうに眺めるのであった。

——その時、彼のテーブルとは一間ばかり離れた樹立の蔭で、先刻から聴耳を立てゝゐた一人の紳士が、つと立ち上ると、二三歩つかく歩寄つて來た。その紳士——色の白い金縁眼鏡をかけた紳士の顔には、極度の驚が示されてゐた。

運轉手と女給仕とは、話に夢中になつてゐて、それには氣がつかかなかつた。

「だけど、本當にどうしてそんなものを手に入れたのさ？」

「だから、いつてるぢやアないか？ 貰つたんだよ。——えへん！ 大したものだらう？ 何しろ大事の結婚指環をくれたんだからな。これ潰しにしたつて、安かアないぜ。」

「も一度見せて御覽。」

「厭だよ。」

「ま、見せて御覽ツたら！」

女給仕は運轉手の手にしがみついて無理矢理に奪ひ取らうとした。奪はれまいとして争ふ拍子に、指環はかつ然としてテーブルに音を立て、灯影をとらへてかどやきながらころろと床の上に轉がり落ちた。

「あら！」

あわてゝ拾はうとした女給仕の手より早く、もう一つの手が——雪白のカフスから抜け出した手がそれを拾つた。

「あら、済みません。」

女給仕は、あわてゝお辭宜をして、その指環を受取らうとした。が、紳士は、我を忘れたやうにして、指先につま

みあげた指環を熱ばんだ眼でちつと見入つてゐた。

「どうぞ、それを——。」

女給仕は手をさしのばして促した。

「これは——これはどうしたのです？」

紳士は、女給仕には眼もくれずに、運轉手の方を見た。せき込んで、なじるやうな問ひ方だつた。

運轉手は、はつとした。が、それが刑事とか、何とか、さういふ種類の人間でないと分ると、腹立たしげにいつた。

「何でもない。返して下さい。」

「ま、待つて下さい。これは一體どうしたのです？」

紳士は繰返して訊いた。

「何故、そんな事を訊くんです？ どうしようが斯うしようが、そりやアこつちのものだ。」

運轉手は怒氣を含んでいつた。

「いや、失禮しました。」

と紳士は詫びたが、しかし指環は返さうとはしなかつた。

「こ、この指環には、僕、覺えがあるのです。どうして、こ、これがあなたの手にはひつたのか？ それを話して、

れませんか？」

「それは預かり物なんだ！」

「預かり物？」

「さうです。預かり物だから返して下さい。」

「誰から——誰から君はこれを預かつたのです？」

紳士は、もう一步運轉手の方へ歩寄り、一生懸命な調子で斯う訊いた。

七

その紳士は、いふまでもなく小野寺啓三郎だつた。

啓三郎は、日と共に、夜と共に、その一つの面影を戀ひ求めてゐた。一つの面影を戀ひ求めて當もなくさまよひ歩くところの、彼は悲しき彷徨者であつた。

啓三郎にとつて、萬千子は單なる一個の女性ではなかつた。單なる一個の女性以上のものを、彼は彼女に見てゐた。彼女は彼の偶像であつた。彼女は彼の戀であり同時に信仰であつた。彼の望の全部、生甲斐の全部であつた。彼女を失つた事は、彼にとつてその全生活を失つた事を意味してゐた。彼女無くしては一刻もそこに生活の意義をも、生きて行く力をも見出し得ない彼であつた。「戀の美酒」などと世にはいふ。まことに戀は人を酔はすのに芳醇であらう。しかも、彼にとつては——啓三郎にとつては、それは酒ではなく、水であつた。まさに渴き死なんとする者が、その生命のために喘ぎ求むる一杯の水であつた。

啓三郎は今日も夕方から家を出た。例のやうに銀座。銀座では、カツフェドオトノヌといふのへ、一杯の飲料のために立寄るのが、この頃の習慣だつた。そこで三十分ばかりぼんやりと過ごして、不自由な足をこつくと鋪道の上へ曳きずつて、日比谷の方まで歩いて来ると、公園の傍で、ぱたり逢つたのが、あの千尋であつた。千尋は、この前の時と同じやうにひどく素氣なく、いろ／＼問ひ掛けても碌に返事もしてくれなかつた。どこにあるかといふ問に對して、「この頃は西大久保にゐます」といふのがその簡単な返事だつた。「西大久保のどこに？」と訊かうすると、うるささうにして、丁度その時来てとまつた電車に飛び乗つて行つてしまつた。——そして、啓三郎は電車のあとを見送つて、ぼんやりとそこに立つてゐたのだが、せめて千尋の居場所だけでもつきとめたいと思ひ立つと、その

次の電車で新宿の終點まで運ばれて来た。だが、たゞ西大久保とだけで、尋ね當てられる筈がなかつた。しばらくその邊を歩廻つて、歩きつかれた足を休めようと、偶然、はひつたのがこのレストランであつた。

——そして、一碗の紅茶を前にして、ぼんやりと考へ込んでゐる時に、聴くともなしに耳にはひつたのが、その樹立の蔭のテーブルでの、女給仕と客との會話であつた。

その指環！ 彫りつけた文字が明かに證據立てゝゐる如く、それは自分から彼女に贈つた結婚指環である。この指環が、どうしてこの男の手に渡つたのか？ 預かり物だといふが、一體何人から預かつたのか？——啓三郎は、前後を分たず興奮してゐた。彼は遮二無二、その疑問に向つて突き進んだ。

「女から？ さう今、仰有つてたやうですね。どんな女です？ どんな女です？」

「どんな女だらうが——」

と、朦朧運轉手の山田は、口許に嘲るやうな笑を浮べて、

「まあ、落着いて下さい。いきなり、そんな事をきかれたつて、その返事をしなけりやならないつて義務が、私にありませんかね、まあその代物を、こつちへ返して下さい。」

「いや、失禮しました。」

啓三郎は、指環を運轉手に返したが、

「ですが、どうぞ——どうぞ教へて下さい。君に、その指環を預けた女の人は、どんな女です。どこにゐるんです。僕は、その女の人を探してゐるのです。」

「へえ？ あんたがね——」

と、運轉手は、じろ／＼とこの奇妙な紳士の様子を眺めたが、こんなけちな店の客らしくもなく立派な服装をしてゐたので、ちよつと瞬をしながら、改めて見直すやうにした。

「僕はその指環の持主に用があるのです。どこにゐるか教へて下さい。」
「教へてくれればならぬ。教へてあげない事もないですがね。」
「お禮はします——いくらでも、お禮はしますから——。」
こりやア、手取早くこゝで取引をしてしまつた方がよさうだと、運轉手の山田は心の中で思案した。

八

「いくらでもお禮はします。——兎に角その女の人に會はせて下さい。若しかしたら違つてるかも知れない。その人ぢやないかも知れません。しかし、兎に角、僕は會ひたいのです。」

啓三郎は繰返した。

「まあ、そこへ一つかけて下さい。」
「まあ、そこへ一つかけて下さい。」
「まあ、そこへ一つかけて下さい。」

啓三郎は運轉手と向ひ合つて腰をかけた。運轉手は、育ちの好さを思はせるいかにも坊ちゃんらしい啓三郎の様子を、じろくくと眺めて、

「そりやアね、あんたがそれ程にいふなら、まあヨミとウタつてえもんだ。」

「え？ 何ですつて——。」

「物は相談だといふ事ですよ。ぢやア、私の方でもさつくばらんにいひますがね。いくらお禮をくれるんです？」

「いくら——いくら上げればいゝのです？」
「いくらといやアきりはないがね、なあに至つて慾の少なえ方なんだ、今夜の手間賃にちよつと色をつけて貰へりやそ

れでいゝんです。」

悪がる割には、大した度胸もない運轉手は、たとひいくらでも安全に手に入れた方が、危ない橋を渡るよりはましだと考へたのであつた。

啓三郎はポケットから財布を出した。その中から手當りに引き出して、
「持合せがこれきりないのですが——。」

いひながらテーブルに置いたのは、百圓札一枚に十圓札が三四枚だつたが、けちな小悪者の悲しさには、それだけでも思ひがけない大金だつた。

「あとは、邸へ来てくれれば上げます。——僕はいふ者です。」

啓三郎は尋で一枚の名刺を出した。

「これぢや少し足りないやうだがね、後はぢやお邸へ出かけていたゞくとしよう。兎に角これは貰つときですよ。」

運轉手はテーブルの上の紙幣を名刺と一緒に鷲づかみにして、ポケットへ突つ込んで、
「この指環もそつちへお返しだ。ぢや、何もかもすつかり話してあげませう。」

運轉手の山田は、今夜の次第を啓三郎に話してきかせた。どんなに勇敢に自分がその美しい受難者の救ひ手として働いたかといふ點を勿論大いに誇張して。

啓三郎は激しい驚と傷とを以て運轉手の言葉を聞いた。運轉手の言葉がそこに描いて見せる顔容なり姿恰好なりも、萬千子のそれに違ひなかつた。

「そして、ど、どこにゐるんです？」

相手の言葉の終るのを待ちかねて啓三郎は性急に問うた。啓三郎はあても起つてもゐられなかつた。

「は、は！ 慌てなくても大丈夫ですよ。私が安全に保護してゐるんです。」

「どこに——どこにゐるんです？」

「まあ、そんなに慌てなくてもいいです。今、私が案内してあげますよ。」

相手の焦燥を弄ぶやうに、運轉手はかういひながら、更に一本のバットをくはへた。そして、ゆつくりと二口三口吸つたところで、

「こつちへお出でなさい。」

さういひながら先に立つて、ドアですぐに續いてゐるホテルの受付の處へはひつて行つた。運轉手はさつき、萬千子を案内した男を呼んで耳うちをした。そして、

「この二階にゐられるんですよ。」と啓三郎にいつた。

「あ、さうですか？」

啓三郎は勇躍してゐた。啓三郎は單に萬千子に逢ひ得るといふばかりでなく、そんな危急の場合、困厄の場合に、萬千子にめぐり逢つて、自分の力をいくらかでも萬千子のために役に立たせる事が出来るといふ事が、嬉しかった。あ

の人は自分を嫌つてゐる。だが、今晚だけは、自分のやうな者の存在もあの人にとつて絶対に必要なのだ！

半年の間の當もない彷徨——その甲斐があつてもう一度あの人に逢へるのだ。が、今彼の胸を躍らせてゐるのはその再會の喜ばかりではなかつた。王女の難に赴く騎士のやうな興奮が彼の全身に燃えてゐた。

九

啓三郎は、その不自由な片足を曳き摺るやうにしながら、ズツクを張つた階段を一步々々のぼつてゐた。さすがに堪難い疲労だつた。萬千子は、ベッドに横になつてゐるうち、思はずとくんとした。その眠ともない浅い眠の中で、夢ともしもない幻が、彼女の意識をかすめて過ぎた。

父の顔が見えた。親不孝者！ と、齒がみをして罵る父の顔だつた。

辰夫の顔が見えた。あの新しい戀人と何か睦まじげに話してゐる横顔だつた。

それが消えると、今度は啓三郎の顔がそこに現はれた。

（萬千子さん！）

遠慮つぽく呼びかけながら、あこがれ渡るやうな眼付でちつと凝視してゐる顔だつた。

（僕はこんな人間です。しかし、僕は一生懸命にあなたを愛してゐるのです。）

さう啓三郎がいつてゐる。

（あなたは金で買はれたのだと思つてゐらつしやるのか知れませんが、僕はさうぢやアないんです。僕はそんなつもりぢやアないんです。——僕は心からあなたを愛してゐるんです。心からあなたを——あなたを愛してゐるんです。）

啓三郎のちつと凝視めた眼には涙がたまつてゐる。

（分りましたわ。分りましたわ！）

さう叫びながら、両手を啓三郎の肩にかけて引き寄せようとした——そこではつとして萬千子は、やうやく深み入らうとする眼から引き戻された。

ガタ／＼とガラス窓が鳴つた。重いしめつぽい風が、かなり強く吹いてゐた。窓をかすめて二筋三筋、暗の中を銀の線が斜に走つた。雨が降り出したのだつた。

——あの運轉手、本當にたしかかな男なのか知ら？

再び、不安が萬千子の心を捉へた。萬千子はベッドの上に取り上り、ぼんやりとした視線を空に置き忘れたまゝ、落着かぬ不安の中に坐つてゐた。ふと、どこかで忍びやかな笑聲がしたやうな氣がした。壁を隔てた隣室かららしかつた。笑聲のやうでもあれば、墜泣の聲のやうでもある。

次第に夜が更けて行くにつれて、街の響とは切りはなされたこの建物の内の物音が、耳立つて聞えて来た。ドアのしまる音、廊下を何人か歩く音、その他何とも分らない物音が、妙に秘密深げな不安な感をもつて萬千子の耳に響いて来た。

——萬千子は、しかし、このホテルが、どんなに醜い怖ろしい悪魔の巢であるかを知らなかつた。彼女の隣の七號室では不倫の戀にうき身をやつしてゐる男女が、はげしい憎惡にまで變質した愛の果の、呪の言葉投げ合つてゐた。左隣の二十五號室では、あざれた肉體を紅粉に装うた賣笑婦が、欠伸をかみながら約束の男の來るのを待つてゐた。ある部屋には、お互のポケットを血ばしつた眼で狙ひながら、びたり／＼と花札を合せてゐる男共がゐた。ある部屋には、いつドアの前に忍び寄るかも知れない逮捕者の足音におびえながら毛布をかぶつて手足を縮めてゐる一人の男がゐた。更に、ある部屋には——。

しかし、萬千子は何にも知らなかつた。そんな醜い怖ろしい惡徳の巢に身を置いてゐる自分であるといふ事には、ちつとも氣がつかなかつた。

たゞ、彼女はあの親切な運轉手が、本當に親切な運轉手であつてくれるやうに——と、それだけを祈つてゐた。

もし、さうでなかつたら？

明日の朝支拂ふべき部屋代にさへ差支る事になつたら？

萬千子は不安に胸を塞がれながら、運轉手からの返事を待つてゐた。

足音は幾度も部屋の前を通り過ぎた。

が、やがて一つの足音が、彼女の部屋の前にとまつた。

コツ／＼とノックの音がした。

萬千子は、急いでドアの前に走り寄り、鍵を鍵孔に突き入れた。

第二のジャンプ

—

ドアが開かれた。——そして、そこにはひつて来た男の顔を見た時、萬千子は、

「あ——」

と聲を立て、彈かれたやうに飛びしやつた。

「は、は！ 驚いたですか？ 僕ですよ。」

「まあ、あなた、どうしてこんなところへ？」

萬千子は身體を固くして立ちすくみ、わな／＼と眼で相手を睨み据ゑながらいつた。

「それよりも、あなたは一體どうしてこんな處にゐるんです？ 誰かを待つてゐるのですか？」

「はひつて来た男は、にやりと笑つて、

「待つてゐた男が僕でなくてお氣の毒です。しかし、僕としちや、これで漸く思が叶つたツてわけですよ。は、は！ たうとうあなたを掴まへてしまひましたね。」

入口のドアを背にして突つ立つたまゝ、吉浦助は薄氣味悪く笑つた。

思ひがけない闖入者！ それは、吉浦助だつた。

柳子のアパートではじめて萬千子が會つた頃の吉浦は、どちらかといへば内氣な、臆病な、いふ事もまともにはいへぬやうな男に見えた。それが、何時の間にもこのやうな執ねく意地強い、蛇のやうな人間にまで變貌したのか？ 彼自身にいはせれば、これもみんな萬千子のためなのだ。あの柳子との長い間の諧調的な戀を一朝にして棄て去つたの

も萬千子といふものがあればこそだつた。萬千子のために自分がいかに多くの犠牲を拂つたか？ 拂つただけのものは受取らねばならぬ。萬千子にはそれをつぐなふべき義務があり、自分にはそれを要求すべき権利があるのだ。

「は、は！ たうとうあなたを掴まへてしまひましたよ。」

彼は、かう繰返しながら一步進み寄つた。

「どうぞ、出て行つて下さい。私あなたには用はないのです！」

「あなたになくても、僕にあるのです。僕が、どんなにあなたを探したか？ 僕の苦心は今やうやく酬いられたのです。」

「どうぞ——どうぞ出て行つて下さい。」

「いゝえ、出て行きませんよ。ねえ、萬千子さん！ あなたは實に冷酷な人ですねえ。いゝ加減にしてもう僕の氣持を分つて下さつてもいゝぢやないですか？」

吉浦の唇邊から微笑が消えた。そして、その眼がきら／＼と燃えた——。

「何度仰つても——私、困るばかりです。私は柳子さんのお友達です。そんな事柳子さんに對してだつて——。」

「あなたはあの女の友達のおつもりでも、あの女はあなたの友達だなんて思つちやあません。あの女はあなたを怖ろしい妖婦だと思つて呪つてゐますよ。」

「まあ！」

「仇敵の様に憎んでゐるのです。」

「私達をそんな風にさせたのは、みんなあなたです。」

萬千子は唇を噛んだ。

「僕を、そんな風にさせたのはみんなあなたですよ。」

「私の知つた事ぢやございません。そんな無理な事仰有つて——。」

と、萬千子は哀願的な眼付になつて、

「どうぞ、吉浦さん、そんな事仰有つて私をいぢめないで下さい。」

「嫌はれゝば嫌はれるほど意地になる——後に退けなくなるのです。それが男の心なんだ！ 一度でもいゝ、あなたを自分のものになければ、僕の意地が許さなひんです。あの柳子に對してだつて——。」

と、吉浦は、じり／＼と押詰めるやうに更に一步を進み寄つて、

「柳子は、もう僕があなたを自分のものにしてゐると思つてゐるのです。」

「勝手な事ばかり仰有つて——どうぞ、出て行つて下さい。こゝは私の——私の部屋なのです。」

萬千子は椅子を小楯に取つて自らを護りながら、激しく相手を睨むやうにした。

「ですが、どうしてこんなところにゐらつしやるのです。こんな處で、一體誰を待つてゐらつしやるのです？」

と、吉浦は嘲に似た妙な表情で口許を引きゆがめた。

「あなたはこゝがどういふ家であるかを知つてゐますか？ こんな所へ、どういふわけで、泊つてゐらつしやるのです？」

二

吉浦はいひ續けた。

「こんな處、少なくとも淑女の來る處ぢやありませんね。こんな處へ出入りする位のあなたなら、何もさう堅苦しい事ばかり仰有らないでも宜いと思ひますがね。」

「何を——何を仰有るんです？」

「は、は！ 薄々噂を聞かないぢやなかつたですよ。あなたのやうな人が身一つで世の中へ出て、何事もなくやつて行けたらそれこそ奇蹟だ。——僕はあなたの墮落を——敢ていひますが、こんな處へ出入りするものが墮落でなくて何ですか？ 僕は心からあなたのために悲しむですよ。どうせこんな事になるんだつたら——」

吉浦は醜くその顔を引きゆがめた。

「は、は！ 僕は今まであまり遠慮し過ぎてゐたのだ。僕はもう少し端的に男性の力を用ゐればよかつたのだ。(折れば宜かつた、遠慮が過ぎた——) ツて歌がありますね。」

「何て失禮なことを！」

萬千子は憤りのために蒼褪めた。

「勿論、失禮ですよ。しかし、あなたは、まだ男性に對して敬意を要求する資格をお持ちだと思ひますか？ は、は！ こんな處であなたを發見するなんて實際皮肉ですよ。ねえ、萬千子さん、今夜あなたがこゝで待つてゐる男が、僕であつたつて、僕でなくつたつて、大した變はないでせう。いや僕はこんなにもあなたを愛してゐるのだ——」

吉浦は、必ずしもそのやうに墮落してゐる萬千子だと思つてゐるわけではなかつた。彼の身内にすさぶ血が、さうした思ひきつた悪たれ口をきかせずにはゐなかつたのであつた。吉浦はいつの間にか椅子を引き寄せて腰をかけてゐた。そしてゆつくりと紙巻を吸ひはじめた——

「どうぞ、出て行つて下さい。」

萬千子は窓際に身をそばめながら、わななく聲で繰返した。——窓は風雨にひしめいてゐる。

先刻あの水際の家で遭遇したと同じ危機に——否、より切迫した危機に再び直面した萬千子だつた。一つのワナをぬけ出したと思ふともう一つのワナ！ どうしたらこの恐ろしいワナをぬけ出せるか？

彼女はそつとドアの方を見た、あのドアから外へ飛び出しさへすればいいのだ！

と、その時廊下の方に足音がした。吉浦は、はつとしたやうにその方に振り向いたが、ふと、その寢臺の下の處に落ちてゐる鍵に眼をとめると飛びつくやうにして拾ひあげた。そしてドアに突きすゝむと、手早くそれを鍵孔につき込んだ。

が、彼が鍵をかけるべく、彼女に背を向けた瞬間、驚くべき出来事がそこに起つた。

——窓の硝子戸がぼつと左右に開かれ、テーブルの倒れる音がけたましく響いた。物音に驚いて吉浦が振り返へつた瞬間その視線の端をぼつとひるがへる袂の端がかすめたと思ふと、萬千子の姿はもうそこには見られなかつた。

ホテルの二階の窓から、二丈に近い高さを、萬千子は物も見事に飛び下りたのであつた。彼女の弱り衰へた四肢にも軽捷な筋肉の躍動が蘇つた。無意識にとつた立派なフォーム！ 横しぶきの風雨をその頬に感じながら彼女の身體はひらりと中空に躍つた——

「や！」

吉浦は呆氣にとられて、愕然と眼を睜つた。

ドアにノックの音がした。

が、吉浦は勿論そんな事には氣がつかなかつた。彼は一寸の間放心したやうにそこにつつ立つてゐたが、やうやく我に歸つたやうにして窓際に走り寄つた。

開け放された窓からは、さつと雨が降り込んでゐた。

吉浦は、窓から下を見下した。そこは普請中の建物との間の狭い通になつてゐた。蒼白い外燈の餘照に照らし出された路面が、錫色に濡れかゞやいてゐるばかり、物影一つ見えなかつた。

——ドアにはノックの音がつゞいてゐた。

不幸な戀人

二人は黙々として歩いてゐた。どちらからも、口をきく出さなかつた。胸の上に重い石でも載せられたやうな互の氣持だつた。

「どこへいらつしやるの？」

その重い石をはねかへさうとする一生懸命の努力の後、美代子がいつた。「銀座の方へ出て見よう。」

と、辰夫が答へた。――あの劇場の空氣は、捨てゝ來た昔の世界への、遺瀦ない思慕をそゝつた。そこへもつて來てあの車上の人の姿！もし、美代子が一緒でなかつたら、彼はすぐにタクシを呼びとめて、その自動車を追つかけた筈だつた。――事實、辰夫は、この時ほど、その同伴者を呪つた事はなかつた。呪ふべき同伴者！彼は美代子の横顔を忌々しく打ち眺めながら、今更のやうに自分の過誤を痛感せざるを得なかつた。

だが、同じやうな悔は、美代子の胸にもあつた。――この人は自分を愛してはゐない！最初のうちの漠然たる不安は、今はつきりと絶望にまで形づくられたことを彼女は感じた。

自分は間違つてゐた！さう考へるにつけてもあの猪之助がたまらなく懐しかつた。

「ね、銀座へ行かう。そしてお茶でも飲まう。」

さういつた辰夫の言葉には、しかし、力がなかつた。

「いゝえ。私、先に歸らして頂きますわ。」

「さう？ まあ、いゝぢやないか？」

併し、ありやうは、辰夫も一人になりたかつた。その呪はしい同伴者を振棄てたかつた。

「いゝえ。私――あの丁度電車が來ましたから――。」

「さう？ ぢやア、歸るの？」

「え。ぢやア、お先に。」

美代子は、思ひきつてくりと背を向けると、電車を目がけて小走りに走つた。

電車はかなりこんでゐた。美代子は入口の近くの吊革に手を掛け、ちつと心の中を、みつめる眼付でうなだれてゐた。

「中島さん！」

「あら、木下さん！」

ふと、呼びかけられて、振り返つて見ると、そこに二つの眼が笑つてゐた。

美代子は鸚鵡返しにいつた。それは、半年ばかり前まで、同じ印刷局の女工として同じ部屋で仕事をしてゐた仲好の友達であつた。

「久振りねえ。――あれツきりよ。」

友達は懐しさうに顔をすりよせるやうにした。その顔には濃く白粉が塗られてゐた。臙脂色の上衣、下は銘仙だが半襟の色も華やかに、あの頃とは見違へるほど美しくなつてゐる友達の姿を、美代子も懐しく眺めかへした。

「あなた、矢張りあそこ？」

「えゝ。相變らずよ。――あなたは？」

「私？」

と、友達は、はにかんだやうな笑ひ方をして、
「何だかいはない方がよさうだわね。」

「あら、いつたつていぢやアないの？」

「あのね、私妙な處へ出てゐるのよ。今日は公休なんだけどね、カツフェよ。」

「カツフェ？ どの？」

「今は新宿の方なんだけど、そのうち、下町の方へかはらうと思ふの。」

「カツフェは面白いでせう？」

「面白いことなんかないけど、暢氣よ。」

「いゝわね。」

「でも、矢張りあゝいふ處私見たいなおかめは駄目よ。あんたくらゐ美しいんだといゝけど——。ねえ、あんたもカツフェへ出て見る氣ない？」

「私なんか駄目よ。」

「あの、まだおひとりなんでせう？」

友達は笑ひながら訊いた。

「えゝ、勿論よ。」

と答へたが、友達の間の底には、あの猪之助のことがひそめられてゐるのだと思ふと、美代子は胸が苦しかった。

猪之助との間柄は、あの頃仲間うちでも、もうおほツびらに認められてゐたのだつた。

二

友達は神保町で降りた。美代子は、さつきから、このまゝずつと早稲田の方の猪之助の許を訪ねようと思つてゐた。あの人はどうしてゐるか？——もう幾月となく會はないが、どんな風にして暮してゐるのか？

ひとり苦しみ、ひとり悶えてゐる猪之助の姿がはつきりと美代子の眼に見えた。

(許して下さい。私が悪かつたのです。)

さういつて謝りたかつた。

だが、恥が彼女を遮つた。今更、どの面さげて——といふ氣がした。それに、彼の激しい怒の前に立つ事が怖ろしくもあつた。あれから、一度も訪ねて來ない猪之助の死のやうな沈黙。その沈黙の底にどんなに激しい怒が蓄積されてゐるかと思ふと美代子は怖ろしかつた。

美代子は思返して飯田橋で降りた。が、そのまゝ家に歸る氣にはなれなかつた。

兄さんとこへ行かう！

兄さん——庄作もどうしたのかこの一週間は顔を見せない。これから訪ねて行き、思ひきつてこの苦しい氣持

を打明けてみよう。

美代子はそこで新宿行きの電車に乗つた。

庄作は、谷町の、士官學校の近所の或る素人下宿——といつても、その邊は一帶に細民窟で、毎晩燒鳥の屋臺を四

谷の通に引張り出す老夫婦の家の、その薄暗い二階に下宿してゐるのであつた。

少し眼の悪い老婆に取次がれて急な階段をみしくと踏んで行くと、

「おゝ、美イ公！」

と元氣のいゝ聲が上から響いて來た。

「やあ、よく來たね。」

美代子があがつて行くと、庄作はもうかなり赤くなつた顔で機嫌よく迎へた。庄作は、ちやぶ臺を前に、一人の仲間と飲んでゐた。

「久振りだな。美イちゃん！」

振返つた顔を見ると、庄作と同僚の見知り越しの若い男だつた。

「丁度いゝところへ来てくれた。まあ、こつちへ寄つてひとつお酌をして貰はうか？」

庄作は、にこ／＼笑ひながら眼で招いた。

又、お酒なんか飲んで——と思ふと、美代子は腹立たしかつた。

「は、は！ 厭な顔をしたね。」

職工服のまゝどつかりと胡坐をかいて、袖だけの左手をぶらりと垂れ、右の肩を高くつきあげるやうに突肘をした庄作は、杯と美代子の顔とをとりとした眼で見較べるやうにして、

「は、は！ 美イ公は酒飲みが嫌だつたな。酒飲みツてえとまるで親の敵見てえに思つてるんだからやりきれねえ。

は、は！」

「いや、田代が酒飲みになつたのに俺も驚くよ。」

「何いつてやがる！ お前までが——。」

と庄作は笑つて、

「左利きツていふがね。俺は左が利かなくなつてから、こいつをやり初めたんだ。つまり、左利かずツてわけさ。」

「は、は！ まづい酒落だな。」

顔も身體も、小ぢんまりとした精悍らしい相手の男がいつた。

「酒落はまづくツても、こいつアうまいて。」

と、庄作は杯を唇にもつて行きながら、

「だがね、人間、酒がうまくなるやうになつちやアおしめえだ。誰だつて、こんなもの初めツから好きで飲む奴があるものか？ 仕方なしに飲んでゐるうちにだん／＼うまくなれば好きにもなるツてもよ。俺だつて、何も初めツ

からの酒好きぢやアねえ。初めは仕方なしに飲んだのよ。酒でも飲まなきややりきれねえ。飲んで酔ひでもしなきや

どうにもならねえ——森田！ お前なんかまださういふ氣持を経験した事はなからう？」

「なくてどうする。酒でも飲まなきや腹が立つてたまらねえ事だらけぢやねえか。」

「ふん！ 腹が立つ？」

「おい、田代！ 俺達の生活で一日だつて腹が立たずにゐられる日があると思ふか？ え？ 朝から晩まで腹ア立ち

通しだ。」

「腹の立ち通しで腹の減り通しか。は、は！ 朝から晩まで腹の減り通しか。」

「さうよ。すきツ腹の酒は餘計こたへらア。」

三

若い職工の森田は、すぐに眞面目になつていひ直した。

「だが、僕等は僕等のこの腹立を——怒を酒なんかで、ごまかしちやならないんだ。僕等の怒こそ、僕等の運動の原

動力なんだからな。僕等は、僕等の怒を愛さなければならぬよ。酒ツて奴は僕等の怒を煽る場合よりもむしろ痺

させる場合が多いのだ。君なんかのは確かにそれだね。君は酒をやり出してから、すつかり運動に對する熱心さをな

くしちまつたぢやないか？」

「そんな事アないぞ！ 森田！」

庄作は大きく睨んだ。

「いや、君はこの頃ひどく、ニヒリステイックになつてゐる。駄目だぜ。」

「馬鹿をいへ。そんな事があるものか？」

「いつたが、その言葉には力がなかつた。」

「いや、確かにさうだよ。さういや、石田さんはこの頃どうかしてるね？ この頃、あの人も駄目だな。僕等の集會にもさつぱり顔を出さなくなつたぜ。」

と、若い職工は、率直に性急にその感想を表白した。

「矢張駄目だな。ロシアへ行つたつてどうしたつて、ブルジョア出の人間は矢張駄目だ。どうも骨ツぱい所がなくツていけねえ。」

「おい、おい、あの先生の事を悪口をいふとこの娘に怒られるぜ。」

庄作は笑ひながら、さつきから手持無沙汰にそこに坐つてゐる美代子の方へ眼をやつた。

「は、は、さうか。——だが、美代子さん、あなたは一つうんと石田さんをどやしつけてくれなさいいけねえ。石田さんにさういつとくれ！ この頃少しだらけ過ぎてゐる！ みんな不平をいつてゐますとね。」

森田はさういふと、急に居すまひを直して、

「さあ、僕は失敬しよう！ これから麻原の處へ寄つて相談しなけりやならねえ。」

「まあ、いぢやアねえか？」

「いや、酒飲みのおつきあひはしてゐられねえ。」

いふが早く立ちあがると、森田は會釋もせず階下に降りて行つた。

「は、は！ 相變らずせつかちな男だ。」

と、庄作は苦ツぱく笑ひながら、その後姿を目送したが、
「どうしたね。美伊公！」
やさしい眼になつて、

「まあ、こつちへおいでよ。は、は！ もう止める。これツきりでもう止めるよ。」

二三分ばかりの厚さに残つてゐる正宗の襷をぼちや／＼と振つて見せながら辯解するやうにいつた。

美代子は庄作の前へにじり寄るやうにした。

「いやねえ。この頃毎晩飲むの？」

「毎晩ツてわけでもねえがね、俺もこれで酒でも飲まなけりややりきれねえ事があるからな。」

「どうしてなの？」

「どうしてつて——酒でも飲まなきや、淋しくてやりきれねえぢやねえか？ やりきれねえ——實際、苦しくてやりきれねえ時にや、酒でも飲まずにや居られねえからな。」

酔つてはゐながらも、何かしみ／＼としたものがその言葉の中に聞かれた。

「苦しい？ 兄さんにも何か苦しいことがあるの？」

「美伊公、お前は暢氣だな。」

庄作は笑つた。

「兄さんこそ、暢氣だわ。」

「俺がそんなに暢氣な男に見えるかな？ は！ お前の眼には、本當に俺がそんな暢氣な男に見えるかい？」

「だつて——さうぢやないの？」
「美伊公！」

と、庄作は、美代子の顔をちつと眺めるやうにしたが、
 「お前は——お前は馬鹿だな。」
 「どうせ、私は馬鹿よ。」
 「うん、馬鹿だ、——美代子は馬鹿だ。」
 「どうせ、私、馬鹿よ。」
 と、美代子は笑つたが、その笑顔が、そのまゝ、痙攣的に引きゆがめられると、袂を顔にあてゝ、急に美代子は泣き出した。

四

「どうしたんだ？ 美代子！」
 庄作は、呆氣にとられたやうな顔をして、
 「吃驚させるぜ。急に泣き出したりして。」
 だが、美代子は黙つて泣くばかりであつた。
 「一體どうしたといふんだ？ お前この頃ひどく泣蟲になつたな。は、は！ また石田さんと喧嘩でもしたのか？」
 「兄さん！」
 と、少し間を隔いて美代子は、その袂の端から泣き濡れた眼をあらはして、庄作の顔を見上げた。
 「兄さんは、あの人のこと、どう思つて？」
 「あの人？ 石田さんのことかい？」
 「ええ。石田さんよ。——私、あの人に欺されてゐるんぢやないか知ら？」

「欺されてゐる？」
 「ええ。」
 美代子は物感しげな眼で空を探るやうにしたが、
 「さうよ。私、欺されてゐるんだわ！」
 きつぱりと斷定的にいつた。
 「石田さんが——どうかしたのかい？」
 「別にどうもしやしなないけれど——でも、あの人の氣持私には分るわ。あの人は、矢張り私みたいな貧乏なうちの何も知らない娘は嫌ひなんだわ。」
 美代子は涙に濡れた眼を空の一點に据ゑて、心の底から滲み出したやうな聲でいつた。
 「そりやア邪推だよ。石田さんは、お前がそんな無邪氣な貧しい娘だから、それで餘計にお前を愛してゐるんだ。」
 「私が何も知らないから、馬鹿だから、それで欺しよかつたんでせう。でも、私のやうな貧乏娘——。」
 貧しい娘だから餘計に愛する——さういふ奇妙な理窟は、美代子にはどうしてもうなづけなかつた。貧乏——育の悪さ。これは戀する者にとつて、いかなる場合においても引目で、そして恥でなければならなかつた。
 「いゝや！ 石田さんはそんな人ぢやねえ！」
 「兄さんはそんな事いふけれど——私なんだか猪之さんにすまない氣がして仕方がないの。」
 「美代子は、ぢやまだ猪之斯の事を何とか思つてゐるのか？ お前も浮氣者だな。」
 庄作は苦笑つた。
 「さうぢやないのよ。」
 美代子は苦しげにほつと息をついて、

「ねえ、私、猪之さんの事が気になるのよ。私今夜猪之さんとこ訪ねて見ようかと思つたの。」

「猪之を訪ねてどうするんだい？」

「あやまらうかと思ふの。」

「猪之のそこへなんか行つて見ろ！ ひどい眼に遭ふぞ。あいつア狂人だからな。」

「猪之さんこの頃どうしてゐて？」

「俺は知らねえ。」

庄作はひどく不機嫌な顔付になつて、ぐつと茶碗の酒を乾して、

「うっかり猪之のそこへなんか行つて見ろ。殺されるかも知れねえぜ。」

「殺されたつていゝのよ！」

「何をいふんだ？」

「いゝえ。本當よ。」

と、美代子は黒眼を据ゑて、

「私、殺されたつて構はないわ。——殺された方がいゝわ。」

思ひつめた眞剣な調子でいつた。

「何をいふんだ？ 猪之に殺されていゝくらゐなら、とつくに俺が殺してやつてゐる！」

庄作は、ぐつと美代子の顔を睨むやうにしながら、罎の酒を茶碗に一杯ついだ。そして、一息に飲みほして、ふつと熱い息を吐いて、

「美代子！ お前は、お前のために苦しんでゐる者は猪之だけだと思つてゐるのか？」

激しい調子でいつた。

美代子は驚いて、爛々と輝く庄作の顔を見返した。

「美代子、お前は馬鹿だよ。お前にやア分らねえんだ。お前はな、口に出していはなきやア何も分らねえ女だ。長い間の、長い間の、この俺の苦しみなんか、お前にやちつとも分らねえんだ。」

「何をいつてるの？ 兄さん。」

「馬鹿、さういふ挨拶のしやうがあるか？」

その時庄作の顔には、名状する事の出来ない不思議な表情が現れた。笑つてゐるのか、怒つてゐるのか、泣いてゐるのか？——いや、泣いて——慥かに庄作は泣いてゐた。その眼からはばらばらと大粒の涙がころがり落ちてゐた。

燃ゆるもの

美代子が歸つたあと、庄作は片肘を卓に突き、片手で顎をさへへて、ちつと眼をつむつてゐた。

「馬鹿！ 泣いてゐやがる！」

それに氣がつくと彼はかう心の中で自ら嘲つた。

彼は、美代子に不覺の涙を見せた事を恥ぢてゐた。少しばかりの酔に自制を失つて、つい、美代子に向つて本心を語りかけたことを悔いてゐた。

いや、美代子はたゞ酔つたまぎれの出鱈目だと思つたに違ひない。この俺から愛されてゐる——男女の愛で愛されてゐる。そんな事は夢にも知らない無邪氣な美伊公なのだ。俺をたゞ、親切な兄さんより外考へたことのない暢氣な美伊公なのだ。無邪氣な暢氣な、馬鹿な美伊公なのだ。

「は、は、は！」

庄作は笑はうとした。が、笑へなかつた。たゞ、顔面筋肉が異様に痙攣したゞけであつた。咽喉をひっこするやうな腹れた聲が、少しばかり苦しい息の喘ぎにまじつたばかりであつた。

庄作は再び眼を閉ぢた。閉ぢた眼の前に、遠い思ひ出が浮んで来た。

埃ッぽい黄昏の街にはちら／＼と灯がともりはじめてゐた。目まぐるしい人通の中をほつとした氣持でさまよひ歩いた學句、やうやく見つけ出した叔父の家——それは、神田の神保町の裏通のさゝやかな荒物屋だつた。

「うん、もう十六になつたか？」

叔父もまだその時分は元氣だつた。晩酌で赧めた顔にこゝと人の好い笑を浮べて、

「よく出て来た。出世するなら東京だ。しつかりやるんだな。」

想像したより店も小さかつたが、店裏の座敷の狭さには、こんな處にどうして人が住めるかと驚いた。だが、彼はその狭い部屋の、うすくらしい電氣の下での最初の晩餐を忘れる事が出来ない。その時分は叔母もまだ丈夫だつた。色の白い、やさしい叔母さんだつた。

そして、美代子はその時八つだつた。

「田舎から来たのね？ 何んて名なの？」

美代子は、庄作の顔を見上げながら、ませた物のいひ振りをした。そのくる／＼と圓い黒い眸が、庄作の心を不思議に強く吸ひ寄せた。今思へば、その最初の一瞥にすでに宿命的な何ものかを感じたのだつた。

「庄作——ぢやア、庄ちゃんていふの？」

と、美代子は笑つた。

「どうだ？ 美伊公！ 美伊公にもいゝ兄さんが出来ていゝだらう？」

叔父がいつた。

「兄さん？ 私の兄さんなの？」

「さうだよ。兄さんだ。」

「ぢや、兄さんツていふの？」

その時から庄作は、美代子の「兄さん」だつた。庄作も、兄のやうに慕ひなづく美代子を、妹のやうに愛し、いとほしんだ。美代子の「兄のやうに」には、變りはなかつた。だが、庄作はいつの間にか「妹のやうに」ばかりは思

へない心の動に惱まされ初めてゐた。

庄作に、その愛の告白を躊躇させたものは、要するに、あまりに接近し過ぎた二人の關係だつた。美代子のあまりの無邪氣さ無心さ、兄に對する妹としての信頼のあまりに他意無さ——それが、いつも、彼の勇氣をくじいた。

そのうちに、あの猪之助があらはれた。——彼自身は、片腕をとられて、生れもつかぬ不具になつた。

「片腕ちやア女は抱けねえ！」

これが彼の悲痛な諦念だつた。彼は、あらゆる女性と共に、美代子をも思ひきつた。——いや、思ひきつたつもりだつた。

思ひきつたつもりだつた。——だが、果して思ひきる事が出来たか？

「卑怯者！」

といふ聲がした。あの猪之助の、憎惡にきらめく眼が、彼の眼の前にちらついてゐた。

二

思ひ断つてゐる、諦めてゐる——しかも、當の相手の猪之助には、矢張美代子を渡したくなかつたのだ。猪之助がいつた通り、美代子を辰夫に與へたのも——美代子の心を辰夫に驅り立て、辰夫の愛を勇氣づけて、二人を結び合はせたのも、みんな、この氣持から出た事だつた。この氣持——猪之助にだけは、美代子をやりたくないといふ氣持だ。

だが、それで自分は満足だつたか？——辰夫と美代子との戀の、好意ある庇護者として、それで自分は少しでも幸福であり得たか？

否、ちつとも満足でも幸福でもなかつた。

猪之助はあゝも苦しんでゐる。そして、自分も同じやうに苦しんでゐる。猪之助の咽喉をしめる自分の手で、自身を咽喉をもしめつけてゐるのだ。

せめて美代子だけでも幸せになれたといふのか？ 否、美代子もあのやうに苦しんでゐる。三人がみんな同じ地獄に落ちてゐる。

こんな事にしてしまつたのは何人だ？

——はげしい自責が庄作の胸を噛みはじめた。

庄作は、冷えた酒をもう一杯ぐつとあふると、ちやぶ臺の上に額を押しあてゝツツふした。右手で後頭部をしつかり抱へ込むやうにして。

しばらくして庄作が面を起した時、ふと、ある不安が胸にわいた。

美伊公は、猪之助のどこへ行つたのぢやなからうか？

美伊公が猪之助に會つたら、本當に猪之助に殺されるかも知れない。猪之助の奴！ この頃音も沙汰もないが、あいつ、半分もう狂氣になつてゐるんだからな。

庄作は、ふと、壁際の、本箱の上に乗せられた一振りりの匕首に眼をやつた。それは、且ての夜、猪之助がそれで美代子をおどかした匕首であつた。その時猪之助からもぎつたのを、持つて歸つて、そのまま置き忘れてゐたのだが、庄作は何氣なく取り上げて鞘を拂つて見た。燈影にきらめく光鈍が、冷たく彼の眼を射つた。——あの夜の光景がそこに、蘇つた。

あいつ、本當に殺し兼ねないやつだ！

庄作の不安は、次第に昂じて來た。

——だが、美伊公、まさか行きやしなからう？

「いや、行つたかも知れない。」

とにかく、これから猪之助の處へ行つてみなければ——庄作が立ち上らうとした時だつた。階段に足音がして、何人かあがつて来た。

「やあ。」

あがつて来た男の顔を、光線のとどかぬ薄暗がりの中に先づみとめると、庄作は思はず驚きの聲を立てた。それは猪之助だつた。

「やあ、猪之助か？ 俺は今お前の處へ行かうと思つてゐたところだ。」

猪之助は、それには答へずに、きら／＼ときらめく眼で、ちつと庄作の顔を凝視めるやうにしてゐたが、

「どうして、そんな處に立つてゐるんだ。まあ、こつちへ来いよ。」

庄作にさういはれると、黙つてはひつて来て、庄作の前にむづりと坐り込んだ。彼は、げつそりと瘦せて蒼褪めてゐた。その大きな眼ばかりが、きら／＼と少しおでこの額の下に燃えてゐた。

「どうしたんだ？ ちつとも顔を見せねえぢやアねえか？」

庄作は打ちとけた調子でいつた。

「うむ。」

猪之助は返事もなく短く呻めいた。

「どうしてゐるんだ。」

「大阪へ行つて二三日前に歸つたところだ。」

「大阪へ？」

「うむ。」

「何しに行つたんだ？」

「仕事を見つけに行つたんだ。大阪の方が暮しよささうだからな。」

猪之助は呟くやうにいつたが、

「だが、俺は矢張り大阪に行けねえんだ。」

さういつて、斬りつけるやうな眼で庄作の顔を見た。

三

「大阪へ——ぢやア、お前は本當に大阪へ行くつもりだつたのか？」

「俺は東京が厭になつたんだ。——だが、矢張り俺は歸つて来たんだ。」

猪之助は喘ぐやうにいつた。

「大阪なんかへ行つちやアいけねえ。東京にゐろよ！ お前がゐなくなると俺が淋しいからな。」

「何だつて？」

きらりと猪之助の眼がきらめいた。

「君はそんな事を本氣でいふのか？」

「嘘にいつてるんだと思ふのか？ 猪之助、お前と俺とは友達ぢやアねえのか？」

「お前は俺をからかつてゐるのか？」

「からかつてゐるツて？——どうしてそんな事をいふのだ？」

「田代！ 君は俺がどんなに苦しんでゐるか知つてるか？」

猪之助の眼は涙に濡れてゐる。一本氣な猪之助が、どんなに苦しんでゐるか？ 大阪へ行つたといふのも、どうに

もならぬ苦から逃げるためだつたのだらう？ だが、より強い苦が又かうして彼を東京に引き戻したのだ。その間の猪之助の心の消息は、庄作には分りすぎるほど分つてゐた。猪之助！ 俺が悪かつたんだ、ゆるしてくれ——さういつてわびたい氣持。だが、俺も苦しいのだ、俺の苦もお前一つ察して見てくれ——さういつて手を取り合つて泣きたい氣持だ。さうした氣持が、庄作の堅い胸板をつき上げて來た。

「は、は！」
と、庄作は冷たく笑つた。

「お前、矢張り思ひきれねえのか？」

「俺はもう一度あの女の氣持を訊いてみたいのだ。それで今夜あの女のうちへ行つたのだ。」

「ゐたか？」

「ゐなかつた。こゝへ來たのぢやねえのか？」

「猪之助は、ちよつとあたりを見廻すやうにした。」

「もう一度、訊いて見るつて、ぢやア、また七首でも振廻すつもりだつたのか？ は、は！ 駄目だよ。男らしく思ひきれよ。」

と、庄作は、ちやぶ臺の上の茶碗を猪之助の方へおしやつて、

「まあ、酒でも飲め！ 酒を飲んでちよつと酔つて見ろ。さうお前のやうに狭苦しく思ひつめるもんぢやアねえ。」

「厭だ！ 俺の苦は、酒なんかで濟ませるほど埒もねえものぢやアねえんだ！」

猪之助はいま／＼しげにいつた。

「おツそろしく思ひつめたもんだな。」

「俺は眞劍なのだ。」

「だがね、猪之助！」

庄作は、自分で注いで、そのなみ／＼と満たされた茶碗を唇にもつて行きながら、

「俺達、お互に戀なんてものに憂身をやつしてゐられる人間ぢやアねえんだ。なあ、憚りながら、お互にこれでプロレタリアの戦士なんだ！ 惚れたはれたで泣いたり笑つたりしてゐられる人間ぢやアねえ管ぢやアねえか？ 戀なんてものは——。」

と、庄作は、べろりと唇をなめて、

「要するにブルジョアの遊戯なんだ。個人意識の産物なんだ！ ね、俺達には、別に大事な仕事があるんだ。」

「そりア、誰の口眞似なんだ！ よく君に、圖々しくそんな出鱈目がいへたもんだな。」

猪之助は、にく／＼しげにいつたが、すこし膝をにじり寄せるやうにして、

「田代！ お互にもつと正直にならうぢやアねえか？」

きつとした調子で、きめつけるやうにいつた。

「正直に——だつて？」

庄作は、やゝたぢ／＼となりながら、その激しい眼を見返した。

「さうだ。もつとお互に正直にならうぢやアねえか？ 出鱈目をいふのは——心にもねえ事をいつて自分を胡麻化した

り相手を胡麻化したりする事はい／＼かげんにして止めて貰はうぢやアねえか？ え、田代！ 俺は今夜、君ともこれが最後のつもりで來たんだ。正直にいつてくれ。え、正直に——。」

「は、は！ 何をいつてるんだ。まあ、さうのぼせるなよ。お前はどうものぼせ性でいけねえ。」

「田代！ 君はどこまでとぼけるつもりなんだ？ 卑怯者！」
——卑怯者！ その言葉はさうんと庄作の魂の底まで沁み通つた。庄作にとつて、一番やりきれない言葉であつた。

「何をいつてるんだ！」

庄作の口許の薄笑は、そのまゝ凍りついて、顔色は、酔を忘れて灰白んだ。

「君が、あの女を愛してゐるッて事は俺だつて知つてゐる。何故君はさう自分で自分を胡麻化すんだ？」

庄作は燃え迫る猪之助の眼の前に、ぢつと自分の眼を閉ぢた。

「なぜ君はもつと正直にならないんだ。何故そんな卑怯な胡麻化しの態度を取るんだ。君は俺と友達だつていふが俺は、そんな卑怯な人間を友達に持ちたかアねえんだ。」

「赤城！」

と、庄作は眼を開くと、改まつた調子で猪之助に呼び掛けた。

「ぢやア、いはう！ 俺はまだお前が俺達二人の仲へはひつて来ねえ時分からあの美イ公を愛してゐたんだ。十年も昔から俺はあいつを愛してゐたんだ。そこへ横の方から手を出して、俺の氣がつかねえうちに、あいつを——あいつの心をお前がさらつて行ッちまつたんだ。その時俺がどんなに苦しんだか、お前は知つてゐるか？」

庄作の、わんと見ひらいた眼は、水の底の松明のやうに、涙の下に燃え揺れた。
「俺はその時ちつとも知らなかつたんだ。——だが、その時の苦しみを俺に思ひ知らせるために、あの石田の手をかり

て、君は俺に復讐したといふのか？」

「復讐なんて、そんなあくどい料理ぢやアちつともねえんだ。誤解しちやア困る。——なあ、猪之助！ 俺とお前は友達だ。お前の知つてゐる通り、俺はひとりぼつちの人間だ！ 俺の友達といやア男ぢや猪之助！ お前きりだ。女ぢやア美イ公きりだ。その美イ公をお前にとられたら、俺はお前とも美イ公とも友達ぢやアゐられなくなる。そりやア、俺だつて、きれいさつぱりと美イ公をお前に譲つて、お前達を夫婦にして、お前の（兄さん）になつて、それで満足してゐるやうな人間にならなさいけねえと、どんなに自分で自分にいひきかせたか知れねえ。だがな、勘辨してくれ、俺にやアどうしてもそんな聖人にやなれなかつたんだ。」

「ぢやア何故、君が美イちゃんを自分のものにしなかつたんだ？」

「俺は、この通りの片羽だ。片羽の女房にしちやア美イ公が可哀さうだよ。」

庄作は淋しい笑を浮べて、

「それに、俺が美イ公を女房にするにしたつて、お前と喧嘩をしなさいやならねえ。喧嘩をすりやア俺が負けるにきまつてゐるが、負けても勝つても、お前とはもう友達ぢやゐられなくなる。友達ぢやゐられなくなるどころか、一生憎み合はなさいやならねえ。」

庄作は次第にしみじみとした説得的な調子になつて、

「なあ、猪之助！ 美イ公は、お前のものになつてもいけねえ。おれのものになつてもいけねえ。矢張り——。」

「矢張り石田にやつた方がいゝといふのか？」

猪之助の言葉は激しく庄作の言葉をたゞき伏せた。

「田代！ だから、君は卑怯だといふのだ。——そんな生温い事を考へてゐられるのは、君が本當にあの女を愛してゐない證據なのだ。止してくれ！ そんなもつともらしい事をいつて胡麻化さうたつて、その手はくはないんだ。」

「胡麻化しだつて？ これほどいつても、お前にや、俺の氣持が分らねえのか？ 分つちやくれねえのか？」
「尤もらしいが、そりやア後からつけた理窟だ。——分らねえ！ 俺にやそんな事ア、分らねえ！」

五

四つの眼が火花を散らして空間に相搏つた。無言の睨み合ひが、やゝしばらくの間續いた。底氣味悪く沈んだ空氣の中に、二つの心臓の荒々しい鼓動が、互の耳に聞かれるかと思はれた。

雨戸がひしめいた。——更けて行く夜を、騒々しく風が吹き出した。

——と、その時、亂暴な足音が階段を駆けあがつて來た。

「田代君！」

さう呼びかけながら顔を突き出したのは、先刻までこゝにゐた森田といふ若い職工だつた。いきなり呼びかけてから、そこに猪之助がゐたので、一寸まごついたが、

「直ぐ來てくれ。問題が起つたんだ。」

と、一直線に庄作を見やりながら、立つたまゝの森田はせつかちらにいつた。

「問題が起つた？」

「うむ。是非顔を出してくれ、これから宮本のとこへ集まることになつたんだ。」

若い森田はひどく興奮してゐた。

「何だ問題ツてのは？」

「いゝのか？」

森田は猪之助の方へ一寸憚るやうな目をやつた。

「構はねえ。問題ツて何だ？」

「川邊と横井とが今日突然やられたんだ——。」

と、森田は首へ手をやつて見せて、

「あれほど堅い條件にして置いたのを、たうとうやりやアがつたんだ。どこまで踏みつけにしゃがるのか？ こゝで一腰突ツ張らねえと、この上何をしゃがるか分らねえ。兎に角、俺達集まつて對策を講じようツてんだ。直ぐ來てくれ。」

「さうか？ たうとう川邊と横井を——さうか？」

と、庄作は呻めくやうにいつて、

「直ぐ行く。直ぐ行くから一足先に行つてゐてくれ。」

「直ぐ來るな。頼んだぜ。」

森田はせつかちに、そのまゝ戻しかけた足を又一步踏み返して、

「間違えなく來てくれねえと困るぜ。いゝかい。」

と念を押した。

「直ぐ行くよ。」

「頼んだぜ。」

森田は降りて行つた。その森田の足音が階段の下に消えるのを聴き澄ますやうにしてから、庄作は、

「猪之ス！」

と呼びかけた。

「俺は出かけなきやならねえ。」

「逃げるのか？」

「馬鹿をいへ！ ストライキをおツばじめようてえんだ。猪之助！ 惚れたはれたの外に俺達にや俺達の仕事がある事を忘れるな。は、は！ そんな面倒臭い話は又、後の事だ。」

庄作は立ちあがりかけた。

「待て！ しかけた話だ。こゝでかたをつけてもらはう！」

猪之助は腕を突き出して、庄作をそこに引き据ゑるやうな手つきをした。及腰の上半身が、上から庄作にのしかかるやうな恰好だった。

「かたをつけるッて、どうかたをつけりやアいゝんだ。」

「……………」

猪之助は、唯、ちつと庄作の顔を睨みつけるだけだった。どうかたをつける？ さういはれると、猪之助もぐツとつまつた。

「猪之助！ この上はお前がおれを殺すか、俺がお前を殺すか二つに一つだ。二人のうちどつちか一人死ぬ外にかたのつけようはねえんだ。——俺はお前を殺す氣にやなれねえ。」

庄作は、ちやぶ臺の上に置いてあつた匕首をとりあげると、猪之助の膝の前に放り出した。

「こゝにお前の匕首がある。——貴様、これで俺が殺せるか？」

猪之助はその匕首を拾ひあげると思はず柄を握りしめた。

「俺と貴様とは友達でなきや敵同志だ。俺が貴様の友達でねえッていふんなら、俺は貴様の敵だ。貴様が本當に美伊公を愛してゐるなら、その匕首で俺を殺してしまへ！」

「……………」

「は、は！」

と猪之助の苦惱に引き至められた顔を見ると、庄作は毒々しい嘲笑を眞向から浴びせかけた。

「俺を殺すだけの勇氣もねえくせに、美伊公を愛してゐるなんて——愛してゐるなんて、口幅ッてえ事をいふな。」

「何を！」

猪之助はかツとした。狂暴な血が彼の全身に一時に燃えあがつた。瞬間、きらりと匕首が鞘を拂つてきらめいた。

死 床

——庄作の傷は、深かつた。左胸部の第三肋骨と第四肋骨との間の肺臓に達するまでの突き傷は、飲酒中だつたので出血量も夥しく、附近の病院に運ばれて應急の手當を受けたが、十中八九はとりとめられぬ命と醫師も宣告した。しかし、氣は飽くまでも確かだつた。臨床の檢事の訊問に對しても、はつきりと返事をした。「なあに、酒の上の一寸したはずみです。赤城は、兄弟といつてもねえくらゐのわしの親友です。わしが酒癖が悪いんで、酔つたまぎれに喧嘩を賣つたんです。」

庄作は、そんな風に答へた。

「——わしの方から向つて行つたんです。匕首もわしの手から赤城がもぎとつたものです。勿論、赤城だつてわしに怪我をさせようとは思はなかつたんでせうが、あの男は、カツとする性分なんで、夢中になつて刃物を振り廻したんです。わしが逃げれば宜かつたんですがね——。」

しかし、次第に衰弱と發熱とが加はつて來た。その夜の夜更になると、熱は四十度に近く、昏々たる眼が襲ひ寄せて來た。

變を聞いて駆けつけて來た二三人の友人達は——その中には、若い職工の森田も交つてゐたが、暗鬱な顔並べて枕許に坐つてゐた。どうしてこんな事になつたのか？ 彼等にはまるきり分らなかつた。森田などは、最初、その急報に接した時は、てつきり會社側に雇はれてゐる反動團體の廻し者に襲はれたのだと思つたが、事實はさうでもなさうだつた。何が何だか、さつぱり分らなかつた。

そこには、おど／＼とわな／＼きなながら、美代子も小さく肩をすぼめてゐた。勿論、猪之助はその場から警察の方へ押れて行かれてしまつたが、猪之助が、どうして庄作を殺さうとしたか？ 美代子にもよくその理由が呑み込めなかつた。

猪之助が、彼女の事のために、あの辰夫に恨を含んでゐることは、乃至、彼女自身に對して、憤を抱いてゐることは美代子も知つてゐる。だが、庄作に對してどうしてそんな亂暴な振舞に出たのか？ あんなにまで仲好の、本當に兄と弟のやうな二人だつたではないか？

このあまりに思ひがけない恐ろしい出來事の前に、美代子はたゞ惘然として思ひ惑ふより外ないのであつた。

美代子は、ひとと枕許に寄り添ふやうにして、白い繻帯に胸部を包まれて、血の氣のない蒼ざめた顔をして、急にげつそりと肉の落ちてしまつた小鼻を、時々、苦しい喘ぎにふるはせてゐる庄作の顔をまじろぎもせずうちまもるのであつた。

警察へ引かれて行つた猪之助のことも勿論氣になつた。が、かうして生死の一線を進退してゐる庄作の命を眼の前にして、美代子はもう氣が氣ではなかつた。

——死ぬのか知ら？ 兄さんはこのまゝ死んでしまふのか知ら？

こんな場合に泣いちゃいけない！ 泣くものぢやない——と思ひながらも、美代子の胸は苦しくしめつけられて、われ知らず涙が溢れて來るのであつた。

(——兄さん！)

さういつていきなり縋りついて泣きたいやうな激しい衝動が、幾度も彼女を捉へようとした。

もし、兄さんが死んでしまつたら？

それを思ふと、美代子は世の中が眞暗になつてしまつたやうな氣がする。美代子は、庄作の死を前にして、その「兄

さん」の——庄作の存在がどんなに自分にとって必要なものであつたかを、今更はつきりと思ひ知るのであつた。この場合、あの辰夫などはその眞暗な世界を照らす遠い一つの燈火ほどの頼にもならない氣がした。

兄さんは死んでしまふ。そして、あの猪之さんも——。

庄作と猪之助と、二人ながら失はれたあとの美代子の生活が、どんなに頼ないものであるか？ この二人が、彼女にとつてどんなに必要な存在であつたか？ 美代子はそれを、今更のやうにはつきりと思ひ知るのであつた。

二

風は益々吹きつり、雨もまた刻々に勢を強めて行つた。春の夜の嵐は、眞ッ暗な夜をあれ狂うてゐた。——その窓外の騒がしさに引きかへ、病室の中は、壁やシーツの色を白々と灯影に浮べて、しんとしづまりかへつてゐた。

今は、死を待つばかりの庄作だつた。が、長い間労働で鍛へた彼の身體は、根強く生命をまもり續けた。こゝ三四時間持ちこたへたら、或ひはとりとめるかも知れない——醫師は首を傾げてかう囁いて見せた。

「この男を殺しちやアならねえ。この男は、俺達全體のために、大事な男なんだからな。」

若い職工の森田は、腹の底から押し出したやうな聲でいつた。

「美代子さん！ あんたにも大事な兄さんだが、田代はおれたちにも大事の兄貴なんだ！ しつかり看病を頼みますぜ。」

森田が、さういふ言葉を殘してまたすぐ来るからといつて、一先づ、仲間の會議の方へ戻つて行つたのは、もう十時を過ぎてからであつた。遅ればせに駆けつけて來た美代子の父は、

「何てえ事だ。何てえ事だ。」

と呟きつゞけながら、これも、まるでわけの分らない、思ひがけない事態の前に狼狽しながらおろ／＼としてゐた

が、美代子は、老いた父をあまりに刺戟的な光景の中に置くに忍びない氣がしたので、強ひて家に歸らせる事にした。

「お父さんは歸つてね。大丈夫ですから——私がついてゐますから。それよりか、歸つて石田さんに直ぐ來て呉れるやうにいつて下さいましな。」

父は承知して歸つたが、どうしたのか、辰夫はなか／＼やつて來なかつた。多分、まだ辰夫は、家に歸つてゐないのであらうと美代子は思つた。

枕許には、看護婦と、美代子だけが殘された。美代子は、まじろぎもせずに庄作の顔を凝視しながら、自分の念力でだけでも、決してこの人を死なしはしなれないと思つた。刻々に迫り近づいて來る死の手から、庄作の命を守るべく、美代子も一生懸命だつた。

庄作は、紫色になつた唇を力なく開いて、苦しく喘ぎつゞけてゐた。

ふと、庄作は身悶をした。——傷の痛がこたへたのか、額に深い立皺が寄せられた、と思ふと、その眼を半みひらいて、あたりを見廻すやうにした。

「兄さん！」

美代子は、思はずかう叫びながら、寢臺の縁に手をかけて、その顔を覗き込むやうにした。

「兄さん！ 兄さん！ しつかりして——。」

その聲は庄作の耳にも聞きとられたらしかつた。そして、庄作の眼は、そこに美代子の顔を認めることが出來たらしかつた。

短い、呻に似た聲が、庄作の唇を漏れた。つゞいて、

「美イ公。」

さういふ聲が漏れた。

「兄さん。私よ。——私よ、分つて？ 私が分つて？」

美代子の聲は涙の中からほどばしつた。

「美伊公。」

力ない眼付で美代子の顔をみかへすやうにして、もう一度かういつた時、庄作の口許は、べそをかくやうな痙攣を見せた。——微笑みかけたのであつた。

「苦しいの？ 兄さん。——でも、大丈夫なのよ。しつかりしてね。しつかりしてね。」

美代子はいつた。

「猪之ス——猪之スは——猪之スはどうした？」

さう庄作の聲ははつきりと聞えた。

「何にも気にしないで、——ね、ね、しつかりして。」

庄作は眼を閉じた。

そしてまたこん／＼と眠り入るのであつた。

三

庄作が、もう一度眼を覺ましたのは、それから三十分ばかり経つてからであつた。

「どう？ 兄さん！」

美代子は、その顔を覗き込んだ。

「美伊公。」

割合にはつきりした言葉で庄作はいつた。熱も少しさがつたらしく、意識もいくらか甦になつた様子だつた。

「どう？ お苦しいの？」

「——そこにゐたんだな。俺は今夢を見てゐた。」

「まあ、どんな夢？」

「猪之スはどうした？」

「そんな事——心配しなくてもいゝのよ。」

「俺が悪かつたよ。悪いのは俺だ。みんな俺が悪いのだ。」

言葉は苦しい喘の中に斷續した。

「そんな事ないわ。猪之さんが悪いんだわ。」

「いや、さうぢやねえ。——俺が悪かつたんだ。——猪之スにさういつてくれ。——俺が悪かつたと、さう——猪之スにいつてくれ。」

「いゝえ。猪之さんが悪いのよ。だけど、兄さん！」

と、美代子は思はず自制を失つて訊いた。

「どうして、猪之さん、こんな亂暴な眞似をしたんでせう？」

「俺が悪かつたんだ。」

庄作は眼を閉ちてかう繰返したが、閉ちた眼を、もう一度みひらいて、ぢつと美代子を凝視めると、

「美伊公。」

と呼びかけて、

「お前は矢張り猪之スと一緒にならなきやいけねえ。猪之スはお前の事を思ひつめてゐる。矢張り——猪之スと夫婦になるのが本當だ。俺達は仲間だ。矢張り、仲間は仲間同志だ。お前は——猪之スと一緒にになるのが本當だ。」

美代子は、うなづいて見せずにはゐられなかつた。

「俺はもう駄目だ。——だからいつて置くのだ。矢張り猪之スだ、猪之スと仲好くやつてくれ。」

「兄さん、駄目だなんて、そんな事ありません。ね、しつかりして早くよくなつて——。」

美代子は泣聲になつていつた。

「いや、俺は死んだ方がいゝのだ。どつちみち——俺は死んだ方がいゝのだ。」

「まあ、なぜ、そんな事いふの？」

「美代公！」

庄作は、ぢつと美代子の顔を凝視めた。渾身の力を一點に集めたやうな、深い凝視だつた。そして、その眼には薄く涙がたまつてゐた。

「どうしたのよ？ 兄さん。」

「俺は、お前にいひてえ事がある。」

「何なの？ 何でもいつて頂戴！」

だが、庄作の唇はそれきり動かなかつた。たゞ眼だけが、涙の底から、その深い凝視をつゞけてゐた。何ともいへない悲の色がその眼の中に浮んでゐた。

「何なのよ？ 兄さん！」

「いや、止さう！」

かすれた聲でさういふと、庄作は又眼を閉ぢてしまつた。俺はお前を愛してゐたのだ。お前は、俺を（兄さん）とばかり思つてゐたのだらうが、俺は（兄さん）の外の心持で長い間お前を愛し續けてゐたのだ。庄作はさういひたかつたのであつた。——だが、庄作はたうとうそれをいへなかつた。彼の唇は、その一つの言葉を封じて錆ついたやうにそれきり動かなかつた。

うにそれきり動かなかつた。

「兄さん！」

美代子はほろ／＼と泣き出した。

「は、は！」

と、庄作は力なく笑つて、

「泣いちゃいけねえ。泣く奴があるか？」

庄作が息を引きとつたのはそれから間もなくであつた。死ぬ間際に、庄作は、その片方しかない右の手で、しきりに何か求めるやうにした。

美代子はその手その手を握つてやつた。

美代子の手は、荒れた大きな庄作の掌の中にあつたが、庄作は、もうそれを強く握りしめるだけの力を失つてゐた。

少年畫家

さまざまな人のさまざまな生活と運命と夢と嘆とを載せて時はあわたしく流れる。春が過ぎて花が散つた。上野公園の森の若葉は五月初めのあかるい日光に燃え立つてゐた。

メーデーの大群衆が、警官隊と衝突して多数の檢舉者を出したのはつい三四日前の事だつた。無産労働者の幾千萬人の怒濤のやうな叫聲を反響した五月の空は、さりげなく晴れ渡つて、若葉の蔭がしつとりと水のやうな静けさをたたへてゐる樹の下道を肩を並べてあるいて行く二人の青年があつた。

二人の青年——といつても、一人の方はまだ十七八の、むしろ少年といひ度い年恰好で、中學の制服らしい詰襟の、鈕も満足についてゐないのを着て、帽子も、徽章のとれた學生帽を、少し横ツちよにかぶつてゐた。履物も踵のつぶれたぼろ靴、思ひきつてみすぼらしい風體ながら、濃い眉、鼻梁の通つた鼻、きりりとひきしまつた唇の、氣品のある美少年であつた。一人の方は、三十五六ぐらゐの、血色のよくないしなびた顔つきの男で、古びたセルの單衣に小倉の袴の、しわくちゃになつたのを尻下に穿いてゐた。

「ちやア、君は繪を止める——藝術を捨てるツていふんだね、本氣でそんな事をいつてるのかい？」

「え、僕は本氣ですよ。本氣でいつてゐるのです。」

「馬鹿な！君なんぞがそんな事をいつてどうするんだ。君のやうな天才が——そんな事をいひ出して——。」

少年は口許だけで微笑した。

「天才ですよ。明かに君は天才です。みんなさういつてゐる。樺島先生——あの容易に人を許さない樺島先生でさへ君にや舌をまいてゐるんです。」

「僕が、かりにいくらか天才的なものをもつてゐたにしたらどうすね。そんなものが一體何になるんです？」

「何になるツて、君、樺島君——。」

と、年とつた方が性急な調子でいつた。

「僕ア、五年も續けて出してゐるんだが、まだ入選しないんだ。ねえ、僕ア、繪を初めてからもう十二年になる。勿論、生活にめぐまれてゐない悲に、専心に没頭するツてわけにや行かなかつたが——随分道草を喰つては來たが、それにしろ十二年ですよ。十二年もやつてゐて、まだ一度もあの會場に作品を陳列するの榮を得ないんだ。落選、また落選だ。それをどうだ！君は第一回でパスしたんだ。それもたゞパスしただけぢやない。あの素晴らしい評判だ！」

不遇な老畫學生は、羨望の色をかくさうとはしなかつた。彼は、そこで大きく一つ溜息をついて、

「天分の相違とはいひながら、君の事を考へると實際僕は情なくなる。ねえ、今度だつて寫生旅行に出るために女房を丸裸にしてみました。女房の着物をみんな質に入れて、旅行の費用をつくつたんだ！それがどうだ？その必死の苦心が、結果は矢張り落選だ！」

「一つは運不運ですからね。」

少年は——樺村千尋は氣の毒さうに呟いた。

「いや、さうぢやアない、矢張り僕の力が足りないのだ。天分が乏しいのだ。——僕もそれは分つてゐる。天分豊しくして藝術に志すものゝ悲と苦とは、僕はこれまでも嘗めつくしてゐる。だがね、それでゐて矢張り僕ア思

ひ断る事が出来ないんだ。おそろしいものは實に藝術の魅力だ！」
「ところが僕は、藝術ツてものがそれほどのものとは思はれなくなつたんですよ。外にもつと大切な事がある——それが分つて来たんです。」

「外にもつと大切なもの——それは何ですか？」

「何だといはれると困りますがね。とにかく、暢氣に繪なんか描いちゃられないツて氣がして来たんです。」
千尋は、力強い言葉つきでかういつた。

二

「暢氣に繪なんか描いてゐられないツて、ぢや、他にどういふ事があるね。藝術の外に一體何があるといふんだね？」
藝術至上主義者は興奮して叫んだ。

「僕はもつと實際の仕事をしたいんです。直接に、この世の中に働かせる仕事をしたいんです。——この世の中がどんなに間違ひだらけのものであるか？ この間違つた社會組織をぶツこはして、もつと合理的に新しい社會に建て直す仕事に働きたいんです。つまりプロレタリアの解放運動ですね、僕も今ちやプロレタリアです。プロレタリアの一人として、勇敢に戦つて見たいと思つてゐるんです。」

千尋は若々しい眸を輝かしていつた。彼の顔には美しい血の色かのぼつてゐた。
「君も矢張り——。」

と、相手はもう一度嘆息して、

「矢張りそんな事をいふやうになつたんだな。近頃流行のマルクス・ボーイといふ奴だ。——君までが、いつの間にか、ぢやア、マルクス・ボーイになつちまつたんだね。」

「しかし、瀬川さん、僕のはたゞの流行かぶれぢやないつもりですよ。——僕つい半年ばかり前までは、ブルジョアの家庭で随分暢氣に暮してゐたんです。暢氣に繪の事はかり考へてゐたんです。けれども、今僕の境遇はすつかり變つちまつたんです。境遇が變ると共に、僕には、今まで見えなかつたいろ／＼のものが見えて来たのです。今まで分らなかつたいろ／＼のことが分つて来たんです。それで——。」

「いや、君はかぶれたんだ！ ねえ、かぶれたんだよ。あんな労働者と一緒にあるのがいけないんだ。君は、すつかりあのがさつた連中にかぶれてしまつたんだ。」

「僕だつて今ちや労働者ですよ。」

千尋は微笑した。

「何ゆゑ君は、あの樺島先生の折角の好意を受けられないんです。樺島先生は、君を先生の家に置いて、生活を保證して存分に勉強させるといつてゐるんぢやアないか？ こんなうまい事ツてない筈なのに、どうして君は先生のいふ事を聽かないんだね。先生のいふ通りにしなへすりやア、何も労働なんかする必要はない筈ぢやアないか？」

「僕ア、自分だけの力で生きて行きたいんですよ。」

千尋は昂然としていつた。

「それに僕が繪をやるつもりなら、そりや先生の世話にもなるでせうが、僕もう繪なんか止めるつもりですから——。」

「繪をやめて、ぢやア、労働運動をやるといふんだね？」

「え、まあ、その方面で働いて見たいと思ふんです。」

千尋はきツぱりと答へた。

「飛んでもない事だなあ。君が繪をやめるなんて——。」

藝術至上主義者の老畫學生瀬川はかういつてもう一度嘆息した。

「僕がまだ父の家にある時分ですよ。父の關係してゐたあのK銀行が潰れた時です。預金者の中には随分可哀さうなのがりました。三十年の間食ふものも食はずに溜めた奴がふいになつて氣が狂つたある小賣商人の事は新聞にも出てゐた筈ですが、父のそこにも泥棒呼ばはりをした手紙などが随分舞ひ込んで來ました。直接に押しかけて來たものも二三人あつたんですが、その中で一人、赤ん坊を背負つたみすぼらしいお内儀さんが、死に別れた亭主が預けて置いてくれた、それだけが命の綱だつていふ三百圓か五百圓が取れなくなつて身體は弱いし外に力になる身頼はないしどうしていゝかわからないつて、玄關へ來ておいゝ泣いた事があります。姉さんが貰泣をして、僕と二人で持つてゐただけの小遣を、みんなその女にやつた事がありましたかね。僕はその時分から、父のやうな生活が何かひどく間違つてゐるツて事を感じはじめたんです。こんな風な生活は體によくない生活だ。どうかしなければいけないツて事を、臆けながら感じはじめたんです。」

千尋は、問はず語に語り出した。

三

「——僕ア斷じて父のやうな生活はしたくないと思つてゐたんです。だから、僕は今のやうな境遇になつた事をこの意味ではむしろ喜んでゐるのです。僕の境遇がもとのまゝだつたら、なか／＼ブルジョア生活からぬけ出す事が出来なかつたでせうからね。」

「うむ。君はそんな事を考へてゐるのかねえ。」

瀬川は、それでもまだ腑に落ちないといふ顔付をして、

「だが、今度の繪だつて、あんなに熱心に描いてゐたぢやアないか？ 繪を止めるの藝術を捨てるのといふ人間にあいふ仕事振は出來ないと思ふがなあ。」

「それは、一生懸命には描きましたよ。しかし僕があゝの繪に一生懸命になつたのは、繪そのものに對する情熱からぢやないんです。もつと他の情熱が、僕をあゝの繪に一生懸命にならせたのです。」

「他の情熱？」

「さうです。僕はどうにかしてあの繪を、この美術館の會場に——。」

と、丁度、その前まで歩いて來た美術館の、上り口の白い階段を眼で指しながら千尋はいつた。

「この展覽會の會場に陳列してもらひたかつたのです。」

「僕だつて、そのために——一度でもいゝから入選して、この會場に自分の作品を陳列したいと、そのためにばかり苦勞してゐるんぢやないか。」

落選畫家は忌々しげにいつた。

「あなたは自分の藝術のためにそれを希望してゐるんでせう？ しかし僕は他の或る目的のためにそれを望んだのですよ。」

「君の望は見事になつたのだ。——だが、他の或る目的といふのは何だね。」

「僕は姉に——姉さんに逢ひたいんですよ。僕の姉さんは、今何處にゐるか分らないんです。僕の方でも姉さんを探してゐるんですが、姉さんの方でもきつと僕を探してゐるでせう？ 姉さんは僕の繪を愛してゐてくれたんです。だから、どこにゐようと、僕がこの展覽會に入選した事を新聞で知つたら、きつとこゝへ見に來てくれるだらうと思ひます。さうすれば、こゝで姉さんに逢へるに違ひない！ 僕實はさう思つて、かうして毎日こゝへやつて來るんですよ。」

「ぢや、つまり繪を因にして姉さんに逢はうといふんだね？」

「因？ え、まあさうなんです。」

千尋は屈託なく微笑した。
「それで、つまり、姉さんをモデルにしたあの絵を描いたんだな。」
と、瀬川はうなづいて、

「だが、あれが姉さんをモデルにした繪だとすると、君の姉さん！ どうも非常なシャンだな。」
頓狂な調子でいつた。

瀬川はそこで地下室の下足口の方へ降りて行つた。入口の處で再び一緒になつた二人は、第一室、第二室は素通りにして、第三室の東側の壁上に掲げられた十號ばかりの人物畫の前に立つた。繪は『姉さん』といふ素朴な題をつけられてゐた。青葉の縁を背景とした、セルを着た若い女の半身像——あらいタッチながら力強く、その明眸の人の面影が、さながらに、活々とそこに描き出されてゐた。この場中の白眉ともいふべき傑作が、しかも十八歳の少年によつて描かれたといふ事は、一つの驚異として各新聞の美術批評家の筆に喧傳されてゐた。この繪の前には、いつも熱心な鑑賞者の一團が押しかたまつてゐた。千尋は、眼早く、その人達を見渡した。その中に、もしや、姉の姿が見られはしないかと、ひそかに胸を轟かしながら。——だが今日も矢張、そこに求むる人の姿はなかつた。

「や、君、赤札がついてゐるね。」

ふと、瀬川が驚の眼で振り返つた。

見ると、會からの授賞の金の札の下に、賣約済の赤札が貼られてゐた。

「あ。」

と、千尋も驚の聲を立てた。何人がこの繪を買つたのだらう？ 疑問が強く千尋の胸をうつつた。

四

千尋は早速事務所の方へ行つて、自分の繪の買手は何人であるかを尋ねた。丁度今通知を出さうとしてゐたところだといつて、事務員は、その買収者の住所と姓名とを千尋に示した。住所は麴町三番町の方だつた。姓名は本田信三——まるで記憶にない名であつた。

千尋は、その繪にいゝ加減の價格は附して置いたが、賣るつもりもなければ、買手があらうなどゝは夢にも期待しなかつた。だから、これは千尋にとつて一つの驚であつた。そして、自分の最初の作品が、思ひがけない物質的收穫をもたらしたといふことが、ある圖案所の助手に雇はれたりして、かつく自活の道を立てゝゐる千尋の現在にとつて單なる喜悅以上のものであることもいふまでもなかつた。

「若い紳士でしたよ。君の住所を訊いてゐたから教へときました。何でも、その紳士は君んところを訪ねて行くらしい様子でした。いや、立派な紳士でしたよ。きつと君のバトロンのにでもなるつもりですよ。」
事務員は、この少年畫家の幸運を祝福するやうにいつた。

「素晴らしいもんだなあ！」

と、瀬川は傍からうらやましさに叫んだ。

「入選する。繪は賣れる。おまけに、バトロンがつく——ねえ、君、君アこれでも繪を止めるといふのかい？」
千尋は、しかし答へなかつた。千尋は事務所から、もう一度自分の繪の前に戻つたが、なるほど繪の賣れた事はうれしくない事はないが、自分が、精神をうちこめて描いた姉の像を人手に渡す事は考へて見ると何だかいやな氣がした。玩弄的鑑賞の對象としてブルジョアの家の客間か何かに掲げられるであらうこの姉の像を想像することが彼に苦痛を感じさせた。千尋は賣るつもりでもないその繪に、賣値などをつけておいた事が後悔されて來た。

賣るつもりで描いた繪ではなかつた。たゞ藝術的情熱によつてのみ描いた繪でもなかつた。姉に逢ひたい！ どうかして姉に逢ふ機會をつくりたい！ その實際的目的と、それに伴ふ實際的情熱とを以て描いた繪だつた。——千尋

は姉が新聞で自分の入選を知つたら、すぐにもこの展覽會場へやつて来るであらうと想像した。そして、この繪が、自分の所在を姉に告げ、又、姉がどこにあるかを自分に教へてくれるであらうと想像した。この繪が仲立になつて姉と自分とが逢へる！ その機會のためにのみ描かれたこの繪なのだつた！

だが、今日で幾日、まだその機會はやつて來なかつた。

一體、姉さんはどうしてゐるのであらう？ どんな艱難をも、自分は男だ！ 立派に切りぬけて行つて見せる。だが、姉さんは女だ！ この荒々しい世の中に、身一つで生きて行くにはあまりに弱々しい女性だ。姉さんは、どこに、どんな日を送つてゐるのか？

さう思ふと、千尋は心許なかつた。一刻も早く姉に逢ひたかつた。姉に逢つて自分の見出した新しい道へ、片腕をのべてたすけ歩ませて行かなければならぬと思ふのだつた。

「傑作だなあ！」

と、千尋と並んで食るやうにその繪を眺めてゐた瀬川は、呻めくやうに叫んだ。

「生きてゐる——生きてゐる。眼でも唇でも——眼、何といふ美しい眼だ！ だが、よく見ると、底に深い悲を含んだ眼だねえ。」

外の五六人の人達が、思はず頓狂な聲をあげた瀬川の方へ一齊に振り返つた。

千尋は、自分の繪の前にさうして立つてゐる事が何となく後めたい氣がして來た。

千尋は瀬川を促して會場のそとへ出た。

その夜、千尋がその仕事のために少し遅くなつて家に歸ると、隣の小母さんが、留守中に一人の訪問者のあつた事を告げた。

「洋服を着た、眼鏡をかけた、立派な人でしたよ。」

その繪を買つた紳士だらうと思つたが、名刺も何も置いてはなかつた。

五

千尋は、その翌日も、展覽會場へ出かけて行つた。そして、一般觀覽者のやうな振をしてしばらくの間繪の前に立つてゐた。繪の前には相變らず人立ちがしてゐた。後からくと流れて來る人の流がそこに淀をつくつて、多くの眸がその畫面に向つて集注した。

千尋は、そこに作者がゐるとも知らずにしきりに繰返される賞讃の聲で、ほてつた耳朶をこそぐられながらも、しかし、その藝術的成功をばかり喜んでゐるはなれなかつた。いや、藝術的成功などはどうでもよかつた。——何故姉さんは來ないのだ？ 姉さんをこゝに呼び寄せるだけの力をこの繪は遂にもたなかつたのか？ 千尋は次第に激しい苛立を感じはじめた。

千尋は嘆息した。そして繪の前を離れた。

と、その時、千尋はすつと部屋にはひつて來た一人の女性の姿を見た。片手のプログラムへちよいと眼をやると、その眼をあげて素早く室中を見渡すやうにしてからすつと千尋の繪の方へわき目をふらずに歩み寄つて行く——その姿を、はつきりそれを見定めた時、千尋の全身の血が、わつと一齊にをどり立つた。姉さん！ 姉さん！ 彼は心の中で歡呼の聲をあげた。

千尋は、しかしそのをどり立つよろこびを自ら支へた。そして口許に微笑を浮べたまゝ、そつと姉の後へ忍び寄つた。

萬千子は、繪の前に立つた。そして、五六人の人達の肩越しに、ちつとその繪姿を打ちまもつた。——
「姉さん」と題されたその繪。鏡に映して見るやうに、いみじくも描き出された自分の繪姿。

それは千尋が、彼の心の中にしまつて置いた姉の面影を、さながらにカンパスに移した繪姿だつた。その天分と才能とに、姉に對する弟としての熱愛を裏づけて、一生懸命に描いた繪姿だつた。萬千子は、そこに、弟の驚くべき天分と才能とを見た。同時にそこに、弟の自分に對する熱切な愛情を感じた。萬千子は息を呑み、眸をこらして眺めつけ眺めつけた。

畫面には次第に、霞がかゝつて行つた。うすれて消えて、やがて幾重の雲の中に閉しこめられてしまつた時、萬千子の顔には涙が流れてゐた――。

萬千子は、自分の肩にそつと置かれた手を感じた。驚いて振返つた時、その眼の前には千尋の顔が笑つてゐた。

「千尋さん！」

萬千子の聲は迸つた。

「は、は！」

と千尋は笑つた。

「姉さん！ たうとう姉さんをつかまへてしまひましたよ。」

「まあ、千尋さん！」

萬千子はもう一度かう叫ぶと、思はず千尋の胸に取纏るやうにした。

繪の方にばかり注意を奪はれてゐた人達は、皆一齊に二人の方を振返つた。

「さあ、出ませうよ。」

千尋は、はにかみながらいつた。

二人は會場を出た。

半年振――いや、丁度八月振の姉弟の邂逅だつた。もう暮れかけてはゐるが、打ち晴れた五月の空に日は明るく輝

いてゐた。その明るい日の下に肩を並べて歩きながら、二人はしばらくは言葉もなかつた。二人の胸は、感動で一杯だつた。

「馬鹿だなア、姉さん、泣いたりして見つともないぢやアないか？」

先に口を切つた千尋は、かういつて笑つた。さういふ千尋も涙ぐんでゐた。

「でも、私、あんまり嬉しかつたもんだから。」

と、萬千子はハンケチで、拭いても拭いても流れ止まぬ涙をふいてから、

「私、逢ひたかつたのよ。私、どんなに千尋さんに逢ひたかつたか？――どんなに探したか分らないのよ。」

「僕だつて、どんなに探したか分りませんよ。――でもたうとう逢へましたね。」

千尋はさういつて屈託なく笑つた。

六

S――軒の庭前の藤棚の下の喫茶店。去年の秋、院展を觀ての歸りに寄つたその喫茶店の、隅の方の卓に腰をおろした時、二人は初めて八月振の顔をまともに見合はせた。萬千子は、僅の間にすつかり大人びて、頤のあたりには未だいくらか子供らしい無邪氣さを残してゐるが、眉宇の間、すでに一個世に立つ男性の毅然たる氣魄を示してゐる千尋の顔をそこに見た。千尋はまた、めつきりと瘦せて憂愁のかけに隈どられて、明眸いよ／＼さえ渡つた凄艶さを姉の顔に見た。

「お目出度う！ 千尋さん。大變な評判ぢやアないの？」

萬千子は、心臓の鼓動を押鎮めながら、氣を取直していつた。

「姉さん、今日初めて見に来て呉れたんですか？」

「御免なさいね。私、昨日の新聞に批評が出てゐるのを見て、初めて気が付いたんです。——でも本當にうれしいわ。あんな立派な繪が描けたんですもの、あれから、随分千尋さんも苦勞したでせうねえ。今どうしてゐるの？」

「それよか、姉さんどうしてゐます？」

「私？——私にも随分いろんな事があつたのよ。本當に何から先に話していゝか、何から先に訊いていゝか分らないわね。」

「まあ、それは——話したり訊いたりした後でゆつくりしませう？ 兎に角、僕姉さんに逢へてこんなうれしい事は無いんです。今日は本當にいゝ日です！——僕、姉さんに逢ひたいためばかりにあの繪を描いたのですよ。居所のわからない姉さんへあげる手紙のつもりであの繪を描いたのですよ。」

「ありがたう！ 千尋さん、本當にうれしいわ！」

と、萬千子は又しても涙ぐみながら、

「こんなうれしい事が二つも重なつて来るなんて！ 千尋さんに逢へただけでも嬉しいのに、千尋さんがあんなに立派な繪を描いて呉れたんですもの。」

「繪なんかどうでもいゝんですよ。僕姉さんに逢へさへすりやいゝと思つてゐた！ 僕本當に心配してゐたんですよ。」

千尋は、ひたむきな心持をその燃え輝く眼に見せていつた。

「私だつてどんなに心配してゐたか！——」

萬千子は、しかし、わが一身の安さをすら求め兼ねて、心配しながらもどうする事も出来なかつた自分を顧みずにはゐられなかつた。

「私、本當に千尋さんにも濟まない事だらけなのよ。お父様はあゝしてお亡くなりになるし——お父様に對してだつ

て私本當に申し譯ないと思つてゐるのよ。」

「濟まないなんて、そんな事アないんですよ。」

「私、あんな輕はずみな事をしてしまつて——。」

「輕はずみですつて？——ぢや姉さんは後悔してゐるんですか？」

「でも、私があんな事さへしなきゃ檳村の家はこんな事になりやアしなかつたわね。あなたにだつて——。」

と、萬千子は、思ひきつてみすばらしい、苦學生といつてもないやうな千尋の姿をもう一度見わたすやうにしていつた。

「駄目だなあ、姉さん！」

と、千尋は笑つた。

「今更そんな後悔なんかするやうぢや駄目ですよ。それはお父様はお氣の毒でした。でも、仕方がないぢやありませんか？」

「千尋さんは、ぢや、私を——私のした事を許してくれるの？」

「許すも許さないもありませんよ。僕は、最初ッから姉さんに賛成なんです。姉さん、ヤツたな！ と思つて痛快に

思つてゐたんです。フレエ、フレエ、姉さん！ ツて氣でゐたんです。」

千尋は晴々と笑つて見せた。

「まあ、千尋さんはそんな風に思つてゐてくれたの？」

「さうですとも！ 誰が何といはうとも姉さんのやつた事は、僕アみんな賛成なんです。僕ア、どこまでも姉さんの味方なんですよ。」

千尋は、きつぱりと斯ういつて、

「だから、姉さん、今更後悔なんかしちや駄目ですよ！」

七

「本當に千尋さんはさう思つてゐてくれたの？」

と萬千子は感激の眼をしばだきながら、

「私は又千尋さんがどんなに私を恨んでゐるだらうと思つてゐたのよ。」

「そんな事があるもんですか？ 僕はね、姉さん！ 僕の今の境遇をちつとも不幸だなどとは思つてゐないんです。

それは死んだお父様はお氣の毒だけど、しかし一ブルジョアの末路として、あゝなるのも、どうも仕方がない事なんです。今までの僕等の生活はみんな間違つてゐたんです。その間違つた生活から一と思ひに飛び出させてくれたのは、

姉さんなんだ。この意味で僕アむしろ姉さんに感謝してゐるんですよ。」

若々しく輝く眸をあげて千尋はいつた。それが自分に對する單なる氣休の言葉でないことは、その信念の籠つた強い語調でも知られた。新しい世紀の空に、羽搏ち鋭く飛び立たうとする若い白鷹の、颯爽たる姿を萬千子はそこに見た。

「だが、姉さん、あれから一體どうしてゐたんです？」

「随分いろんな事があつたのよ。」

萬千子は淋しく笑つた。

「姉さん、何だか瘦せたやうですねえ。」

「さういや千尋さんだつて——。千尋さんも随分苦勞したのね。」

「そりやア些とは苦しい事だつてありましたけど、僕ア平氣ですよ。——僕ア姉さんの事を心配してゐたんです。姉

さんは今どこにゐるんです？」

「私、西大久保の方にゐるのよ。」

「僕も西大久保にゐるんですよ。なあんだ？ おなじ處にゐたんですね。西大久保のどの邊なんですか？」

萬千子が前田圃の停留所から直ぐのところと答へると、千尋は、自分のゐる處も矢張さうだと答へた。番地も二十とは違つてゐず、距離も五六町しかない事が分つた。

「尤も、僕ア最近まで中野の方にゐたんですがね。——しかし、そんなに近くに姉さんがゐるなんて——。」

「私も、今の處に移つたのは最近なんだけど、それにしても、驚いたわねえ。」

「で、姉さんは——結婚してゐるんぢやないんですか？」

「あら、あんたもそんな風に思つてゐたの？」

「えゝ。でも、そんな噂をする者がありましたからね。」

「うそよ！ 私、結婚なんかしやしないのよ。」

萬千子はもう一度淋しく笑つて見せた。

では、どうしてゐたのか？ あれから後どんな風にして暮して来たのか？ そして今どうしてゐるのか？ それを訊かうとしたが、何となくさういふ問を避けたらしい姉の様子だつたので千尋は口を噤んだ。

いつの間にか日が暮れかけて、あたりに灯影がちらめき出した。こゝからもその一部が見おろされるこの巨大な都會は、よせては返す人間の海の潮騒のやうな夕轟が卓の上にも襲ひかゝつて来た。客の出入も繁くなつた。久振にめぐりあつた姉弟が、しんみりと語るにはふさはしからぬあたりの情景だつた。

二人はそこを出た。そして山下から電車に乗つた。前田圃の停留所で降りた時は、もうすつかり夜であつた。

「姉さん！ まあ、僕ソとこへ来て下さい。僕の自炊生活をひとつ見て下さい。あまり殺風景なんで姉さん眼をまは

すかも知れませんがね。」

「さうね。ぢやア、あんたのどこへ先に行きませうか？」

横町から横町、路地から路地といった工合に、曲りくねつてはひつて行つた處の、三軒建の長屋の一番はづれの一軒が千尋の住居だつた。千尋は、二月程前から、ふとした機會で知り合つた年上の友人と一緒にそこで共同の自炊生活を始めただが、その友人——王子の方の工場で働いてゐる職工であるところのその友人は、つい四五日前のメーデーで檢束され、千尋は一人でそこでくらしてゐるのであつた。

「きたないですよ。姉さん、びつくりしないやうにね。」

千尋はさういひながら鏡前もおろさずにおいた入口の兩戸をがたびしと引開けた。

姉と弟と

—

「職工？ まあ、そんな人と一緒にゐるの？」

萬千子は、千尋からその同居者について説明されると、驚の眼で問ひ返した。

「え、僕の新しい友達なんです。なか／＼面白い男なんです。」

千尋は平氣で答へたが、姉の顔色から或る心持を讀みとると、

「だつて、姉さん、僕だつて今ぢやまあ職工見たいなものなんです。これでも（額に汗して食ふ者）の仲間なんです。

働いて食ふのは愉快ですよ。は、は！」

と笑つて、

「芹澤君も——それが一緒にゐる男の名なんですがね。今度はちよつと出て來られさうもないから、僕この家をやめて間借でもしようと思つてたんですが、姉さん！ どうです。こゝで僕と一緒に暮しませんか？」

飽くまでもこだはりのない調子でいつた。

「さうね。——さうしてもいゝわ。兎に角これからは二人で一緒に暮すのよ。でも、随分亂暴ねえ。疊の上にお鍋を

置いたりして——それにまあ埃がーばい！」

「は、は！ 驚いたでせう！」

「一寸掃除してあげませう。箒どこにあるの？」

「その箒が無いんですよ。」

「まあ、箸が無いの？」
 「え、箸をまだ買はなかつたんです。」
 「まあ、驚いた！」
 萬千子は思はず笑ひ出した。千尋も聲を合はせて笑つた。その笑の中にも、久振でめぐり逢つた姉弟の心の底からの喜が響いてゐた。

四疊半と六疊、二間だけの家内の、足の踏み場もないまでの亂雑さも、萬千子の手でどうやら人の住居らしく取片付けられると、縁のとれたちやぶ臺の上には、千尋が一走りしてあつらへて来た食べ物の皿などが置かれた。

「おごちそうね、千尋さん。」

「今日は、僕割に金持なんです。——姉さんと食ふのも實に久振ですねえ。」

「本當にねえ。——久振で一緒に食べておいしいわ。このおすし、随分わさびが利いてゐるのねえ。」

しかし、萬千子の眼に浮んだのは、勿論わさびの辛さゆゑの涙ではなかつた。

食べながら千尋は話した。父の死、家の没落、繼母の逃亡——。假に身を寄せた小石川の叔母の家を出て、樽島畫塾での友人の瀬川といふ男の家にしばらく同居してゐたが、その貧乏ぐらしが氣の毒になつたので、新しい友人の芹澤とこの家をもつたこと。京橋の方の或る圖案所へ通つて、いくらかの月給を買つてゐるので、どうやら食べてだけは行けること。

「えらいわねえ、千尋さん。千尋さんに較べると私なんか駄目ねえ。」

聞き終ると、萬千子は思はず嘆息した。萬千子は、千尋の足踏のたしかな生き方に、自分のそれを思ひ合せて見ずにはゐられなかつた。

「姉さんは、一人で——ぢやア、今どうしてゐるの？」

いやでも應でも、萬千子が自分自身について語らねばならぬ順序になつた。が、萬千子は如何なる言葉を以てそれを語るべきかに苦しまずにはゐられなかつた。

「私も、矢張り働いてゐるのよ。」

萬千子は僅にかういつた。

「ぢやア、どこかに勤めてゐるんですか？」

「え、勤めてゐるのよ。」

しかし、萬千子はその新しい職業について千尋に語る事が辛氣がした。

「姉さん！ 何だかひどく疲れてゐるやうですね。病氣でもしたんぢやない？」

「い、え、別に病氣なんかしやしないけど——。」

「疲れたんですね。随分大變だつたでせう？」

何もかも察してゐるといふやうな限付で、千尋は姉の顔をながめるのであつた。

「女ツて矢張り意氣地がないわね。」

萬千子は、深く嘆くやうにした。

その時、格子戸の處に人の氣配がした。

「御免下さい。」

といふ聲が聞えた。

「誰だらうな？」

千尋は一寸首をかしげるやうにしたが、口の中に頬張つたまゝ、玄關——といつても、それが次の間の四疊半へと立つて行つた。

「あ！」
千尋は、格子戸をあけて、はひつて来た訪問者を見ると、思はず驚の聲をあげた。それは小野寺啓三郎だった。
「や、千尋君！」

と、啓三郎は、例のやうに度の強い眼鏡の底からおどろくと落着かぬ眸を動かしながらいふのであつた。
「僕、昨夜も一寸お訪ねしたんですが、生憎お留守でした。」

——昨夜訪ねて来た人がある事は、隣の小母さんから聞いてゐた。本多某といふ、自分の繪を買つてくれた紳士かも知れないと思つてゐたのだが、ぢやこの人だったのか？ 千尋の眉はおのづからひそんだ。内には姉がある。「おあがりなさい。」とは義理にもいへなかつた。

「さうでしたか？ それは——。」

といつたなり、千尋は工合わるくおし黙つた。

「僕は、君に逢ひたかつたのですよ。姉さんは——萬千子さんは、何處にゐるかまだ分らないんですか？」

「ええ、分らないんです！」

千尋の聲は硬ばつた。

「本當に——本當に分らないんですか？」

「ええ、分らないんです！」

千尋は繰返した。

「その後もまるきり消息が知れないんですか？」

「ええ。」

「僕實は非常に萬千子さんの事を心配してゐるんですがね。」

「そんなに心配なさる事はないでせう！」

「あの人はひどい迫害と危険との中にあるらしいんです。」

何をいつてゐるのだ？ と、千尋は思つた。千尋は、相手の言葉におしかぶせるやうにいつた。

「あなたは姉を、探してゐらつしやるんですか？」

「ええ。是非もう一度萬千子さんにお目にかゝりたいのです。」

「どうしてですか？ 逢つたつて仕方がないと思ひますがねえ。」

「それは仕方がないかも知れませんが、しかし、僕は、僕の氣持を、もう少し萬千子さんに分つて貰ひたいんです。」

「もう少し分つてつて、どういふ意味ですか？」

「あの人は僕の氣持を誤解してゐるんぢやないかと思ふんです。」

「そんな事はないと思ひますね。——兎に角、お逢ひになつても、無駄だと僕は思ふんですけれどね。」

啓三郎は答へなかつた。宵暗を背景に灰白く浮んだ顔に、思ひ詰めた眼付がちつと輝いてゐた。

「ねえ、小野寺さん。」

と千尋は説得的な調子になつて、

「姉の事はもう思ひきつて下すつた方がいゝと思ひますがね。そんなにいつまでも逃げた者を追ひかけてるのは、少し馬鹿けてゐるぢやありませんか？」

「いや、僕が——僕がどんなに馬鹿な人間であるかは、僕自身でもよく知つてゐるのです。しかし、僕は、萬千子さんの身の上も心配なのです。」

「そんな心配なんか、多分御無用だと思ひますがね。」
さういふ會話が、襖一重隔てた此方に筒拔に聞えて来た。思はず座を立つて、びたりと襖に寄り添ふやうにしてゐた萬千子の襖の縁に掛けた手はわな／＼と激しくふるへてゐた。
啓三郎の一語々々は強く萬千子の心を打つた。——おゝ、あの人はまだ自分を思ひきらずにゐたのか？ まだ自分を呼び、自分を求めてゐたのか？
萬千子は、幾度襖をひきあけてそこへ——啓三郎の前へ轉び出ようとしたか知れなかつた。襖にかけた彼女の手はその衝動と自制との間に、はげしく顫へわな／＼いた。

三

——やがて格子戸のしまる音がした。つゞいて、一歩々々歩み離れて行く重い力無い靴音がした。萬千子は、襖を引きあけた。そこに突立つてゐた千尋は、妙な笑顔で振返つて、

「いけませんよ。まだ——。」

「だつて、もう行つちまつたんでせう？」

「聴いてたの？ 姉さん。」

「え。」

萬千子は、格子戸の外をぢつと凝視するやうにしながらうなづいた。

「そこに姉さんの下駄があつたでせう？ 氣がつきやアしないか？ と、随分はらく／＼した。」

と、千尋は笑つて、

「だけど、どうしてこゝが分つたんだらうな。——今までにも二度ばかり逢ふ事は逢つたけれど。」

獨語のやうにいつた。

「うるさいのね。」

萬千子は心とは反對の事をいつた。

「本當に、随分思ひきりの悪い男もあつたものですねえ。」

「本當ね。」

千尋は、ちやぶ臺の前に戻りながら、

「でも、一生懸命らしいんですよ。僕少し氣の毒になりましたよ。」

「いやね。男らしくもない！」

萬千子は袈裟に肩をしかめて見せた。しかし、それはたゞ弟の前での虚勢でしかあり得なかつた。

「可笑しい男ですな。」

「ほんとに可笑しい人！」

萬千子は嘲るやうに笑つたが、急に臉が燒けるやうに熱くなつた。

「でも、あの人が、本當に姉さんを愛してゐるやうですな。」

「有難迷惑ね。」

「は、は！ だけど一寸氣の毒な氣もするなあ！ もつとも、あゝいふ階級の間人は戀愛でもする外に仕事がないんだらうけれどね。」

と、千尋は吐き出すやうにいつたが、

「だけど、戀愛も、あゝなると、これで随分難儀な仕事だなあ！ 何だか、すつかりやつれてゐましたよ。僕、かあ

いさうになつちやつた！」

「馬鹿に同情するのね？」

萬千子は一生懸命に笑つて見せた。

「それにしても思ひつめたもんだなあ！」

「馬鹿らしい！」

「姉さんが、あの男の結婚を忌避したのは當然だが、しかし、罪だなあ！ どうも——。」

「ひやかすのね。千尋さん！」

「ひやかすんぢやありませんよ。」

「ぢや、からかふの？——千尋さん、あんた、しばらく逢はない間にすつかり人が悪くなつてよ。」

「どうしてです？ 別に僕、人が悪くなんかなりやしないと思ふけどね。」

「だつて、そんな皮肉ばかり——。」

「皮肉だつて？」

「皮肉よ。千尋さんは私をからかつてゐるのよ。」

萬千子はちやぶ臺に突肘をした兩手で顔をおさへてしまった。千尋は冗談のつもりでゐた。だが、そのまゝぢつと黙り込んでしまつた萬千子の様子はどうも變だつた。

「姉さん！」

「……………」

「姉さん、どうかしたんですか？」

千尋は首をのびして覗き込むやうにした。顔を押しへた指の間から、涙の雫が光つてゐた。
「姉さん！ 泣いてゐるんですか？」

「……………」

「どうしたんです？ 怒つたんですか？」

「……………」

「妙だなあ、泣いたりして——。」

千尋は呆氣にとられたやうにして、姉の様子を凝視してゐたが、

「え、どうしたの？」

萬千子の手こそつと手をかけていつた。

「何でもないのよ。何でもないのよ。」

と萬千子は涙に濡れた顔を強ひて笑顔につくりながら、

「私、今日千尋さんに逢へたりして——何だか變に感情が興ぶつてゐるのよ。御免なさいね。ほ、ほ！ 泣いたりして、私も馬鹿ねえ。」

おもかけ

「伯母様。」

「何だね？」

「一寸、いらしつて御覽なさい。」

「何だね？ 何か用なのかい？」

啓三郎の母の照子夫人は、新聞から眼をあげて宮子の方を振り返つた。

「いゝものを見せてあげるからいらつしやいよ。」

「何だね？ いゝものつて？」

「来て御覽になれば分つてよ。——啓さんのお部屋よ。啓さんのお部屋に素敵なものがあるのよ。」

宮子は嘲るやうに笑つた。

「何だね？」

と、照子夫人は不機嫌さうに繰返しながらも多少好奇心を刺戟されて、宮子の後について啓三郎の部屋へはひつて行つた。

八畳ばかりの洋室は、緑色のカーテンに、仄暗く光線を洗めてゐた。宮子はその壁際のソファの上に裏返しにして立てかけられた一面の額を、とりあげると、それを卓の上にこちらむきに立てかけて、

「御覽なさい、この繪。」

「何だね？ それは——。」

照子夫人は、老眼鏡の底から臉をしばめた。

「よく御覽なさいな。これが誰を描いた繪だか、伯母さんにも分るでせう？」

「まあ、ほんとにこれは——。」

照子夫人は、ぢつとそれを眺めるやうにして、

「一體どこからこんなものを持つて来たんだらう？——あきれたものだねえ。」

「昨日は一日こゝに閉ち籠つて、一日中この繪と睨めつくらをしていらしつたわ！ ほ、ほ。」

「まだ思ひきれずにゐるのかねえ。」

啓三郎の母は嘆息した。

「——だから、駄目よ。私、もう匙を投げたわ。」

「でも、さう／＼いつまでも續く事はありませんよ。——だが、本當にあの人も何て馬鹿な人だらう？」

「かうまでになると、本當に恐れいつちやふわね。」

宮子は毒々しく嘲笑した。

「捨てゝおしまひよ、こんなもの。」

「そんな事したら、どんなに憤られるか知れやしないわ。」

「惘れたもんだねえ。」

と、照子夫人は再び長太息をしたのであつた。

本田信三といふ名で買ひ求めて上野の展覽會場から引取つた萬千子の畫像は、かうして啓三郎の部屋に、せめてもの憂悶を慰むべく朝夕の伴侶となつた。啓三郎は家にある時は、部屋に籠つてその畫像と相對した。さうでない時は、

そのカンブスの上の姿を、うつし身のそれに尋ねあてようと、あてもなく街々をさまよひ歩くのであった。あの西大久保の千尋のもとを、もう一度訪ねて見たが、その時はもう千尋はどこかへ越したあとだった。そして、その後、絶えて千尋の姿を見掛けた。やがて夏が過ぎ、秋が来た。――あの不幸な結婚の一年目がもう直ぐに廻つて来る頃になった。勿論、それまでも何度となく、二度目の結婚問題が持出されたが、啓三郎はそんな事は耳にもかけなかつた。その母の躍起さも、宮子の手管も、たゞひたむきに思ひつめた啓三郎の心から、何の反映をも呼び起す事が出来なかつた。

「なに、さういつまでもは――」
と、母など思つてゐたが、しかし、啓三郎の戀慕は、時と共に却つて募つて行くばかりであつた。――どうかすると、夜遅くなつてから、酒氣を帯びて歸つて来る事もあつた。酒でもそのままなればやりきれない、酔の外に悶のやるかたもない――啓三郎もいつかさういふ人間の一人になつてみた。その激しい憂悶が彼の心を傷り、不衛生が彼の肉體を害した。そして、彼の生活は次第に頽れて行つた。彼の蒼ざめた顔には深い隈が出来、その眼はきらりと、物狂はしい光を帯びて輝いて来た。

二

蟻地獄に落ちた蟻の苦しみがそれだった。うつゝ責の責苦がそれだった。夜の夢と白日の幻とが交々啓三郎の疲れ弱つた神経をさいなんだ。眠れない夜を夜半の床から起きあがつてちつとその畫像に見入りながら、

「萬千子さん！」

と聲に出して呼んで見たりする啓三郎の様子は――そのいたましく憔悴した顔は、そのきらりときらめく眼付は戀の幽鬼ともいひたい凄愴味を帯びてゐた。物狂はしい情熱！ 事實、この状態がこのまゝ進行して行つたら、やが

て到達するところ、狂か、然らずば死であらうと思はれた。狂か、然らずば死！ そのいづれにせよ、啓三郎にとつて、斯くあるよりはどんなに幸福であるか知れないに違ひなかつた。

その日啓三郎は朝から床を離れずにゐた。風邪を引いてかなりの熱があつた。母の照子夫人は心配して醫師を招かうとしたが、啓三郎は堅くそれを拒んだ。彼は、例のうつら／＼とした夢と現との間の意識に、うつゝ責の責苦を、蟻地獄の苦を繰返してゐた。

――そこへ電話がかゝつて来た。

「誰からだ？」

啓三郎は、取次いで来た小間使に問ひ返した。

「名は仰有いませぬ。若旦那様には是非電話口までといふ事でございます。」

「男か、女か？」

「男の方でございます。大事な事だから是非直接にお話申し上げたいといふ事でございます。御病氣中だからと申しましたんですけれど――」

啓三郎はちよつと考へ惑ふやうにしたが、起きあがつて電話口に出た。

「小野寺様でございますか？ お久振りでございます。」

とりつくろつた若い男の聲であつた。

「誰だね？ 君は――」

「お忘れでございますか？ いつぞやお目にかゝりました山田でございます。」

あの城西ホテルの食堂で逢つた運轉手の山田菊次であつた事に啓三郎は漸く氣がついた。山田は、その後二三度金をねだりに来た事がある。良くない奴とは分つてゐたが、尋人の手引にもならうかと、啓三郎はその都度々々いくら

かの合力に應じてゐた。

「あ、君だつたのか？」

「いつぞやは、どうもありがたうございました。ところで、今日は大變吉いお報を、おきかせいたさうと思ひましてね。」

猫撫聲のあとには追従笑が續いた。

「いゝ報せだつて？」

啓三郎の聲はをどつた。

「——あのいつぞやの御婦人のありかゞ知れたのでございます。」

「なに？ ありかゞ知れた——。」

「いろ／＼苦心の末、たうとう探し出しましたんで——。」

「そ、それは君、本當か？」

啓三郎は急ぎ込んで、

「どこにゐるのです？」

「これから御案内申しあげようと思ひましてね、實は、御近所までお迎へに出かけてゐるのでございますが、御都合はいかゞでせう？ 御病氣でおやすみといふ事でしたが——。」

「直ぐ行く！ 直ぐ行きますよ。」

啓三郎は全身の勇躍を以て答へた。

「いらして下さいますか？ ぢや御門前まで自動車を持つてまゐつてもよろしうございますか——。」

「いや、こちらから出かけて行く。ど、どこに君はゐるんだね？」

「唯今、Y町の角ををりますんですが——。」

「ぢや、直ぐに行く。」

啓三郎は病床を蹴つて、外出の支度を初めた。

「ま、お前どこへお出かけたえ？」

「一寸、用事が出来ましたから——。」

啓三郎は母の言葉などは耳にもかけなかつた。

「だつて、お前、そんなに熱がある身體で、むやみに外へ出歩いたりして——。」

「いゝんですよ。もう何でもありません。」

三

啓三郎が、邸から二三町のY町の角まで出て行くと、そこに待つてゐた自動車の運轉手臺から飛び降りた山田が、
「よくお出掛け下さいました。さあ、どうぞ。」
びよこ／＼とお辭宜をしながらいつた。

「どこにゐるんだね？」

「これから直ぐに御案内致します。銀座の方なんです——。」

兎に角一緒に行けば分る——といふやうに、山田は、啓三郎を車内に押入れた。濁つた黄昏がちら／＼と黄色い灯影にちりばめられはじめた中を、自動車は警笛の音を立て、走り出した。

あの人のゐるところがわかつた！ あの人に逢へる！ 自動車の車輪の一回轉毎に、啓三郎の胸の鼓動は昂まつて行つた。自動車は街々を走りぬけて、銀座へ出た。そして銀座裏の入り組んだ横町の奥の、とあるカッフエの前でと

められた。

「こゝに——こゝに、あの人がゐるのかね？」

啓三郎は運轉手に訊いた。

「いゝえさうではございません、こゝでしばらくお待ちを願ひたいので——直ぐにお連れ申してまゐりますから——」
運轉手は、それ以上の問を避けるやうに、ドアの中に啓三郎を押し入れた。小柄な一人の女給仕が走り寄つて来た。
運轉手は、

「先刻話したいた方ですよ。二階へ御案内しといて呉れ給へ。」

と小聲で命じた。

女給仕はうなづいて、

「どうぞ、こちらへ——」

と、先に立つて、二組三組の客が仄暗く坐つてゐる廣間の横の細い廊下を奥の方へ導いた。廊下の突き當りが階段になつてゐて、階段を登ると鍵の手に又細い廊下があつた。そしてその突きあたりに、ドアがあつた。女給仕は、その特別室のドアを鍵で開けると、

「どうぞ。」

ともう一度、小腰をかどめた。

そこは入口に小間を控へた八疊ばかりの洋室で、紫ッぽい照明の、夢心地を誘ふ仄暗さの中に、卓や椅子や衝立や、贅澤な調度とそのきらびやかさを洗つてゐた。

「こちらでお待ち下さいませ。」

女給仕は、卓の前のソファへ啓三郎を導いて出て行くと、玻璃の盃に盛つた臘銀色の飲みものなどを運んで来てす

すめた。

「すぐ——すぐ来るんでせうね？」

啓三郎は一寸その盃に口をあて、かう性急に訊いた。

「は、すぐにいらつしやるさうでございます。」

女給仕は何もかも心得てゐるといふ風になづいて見せてから、につこりとした笑を残して出て行つた。その女給仕の長い袂を翻す姿さへ、何か海の底の人魚めくそれほど蠱惑的な室の氣分だつた。下の廣間の方で鳴つてゐるピアノの斷片が、時々遠く幽かに聞えて来るのも、一層その夢見心地を深くした。

——だが、待つ人の姿はなかくそこに現はれて來なかつた。啓三郎は次第にいらだちを感じはじめた。卓の上の盃はいつの間にか空になつてゐた。——ひどく酒精分の強い飲物だつた。啓三郎はげしい酔を感じた。酔に溶けて行かうとする意識を、そのいらだちで掻き立てながら、啓三郎はドアの方を凝視めつづけた。

ドアが開いて、そこへ大輪の花の揺ぐやうな美しい人の姿があらはれたのは、彼これ一時間も経つてからであつた。その女の姿が眼にはひつた刹那、啓三郎は思はず椅子から起きあがつて、

「や、萬千子さん！」

と叫んだ。

「ほ、ほ！ お待た様。」

大柄な女は華やかに笑ひながら歩み寄つた。二つの生きものゝやうに生々と輝く大きな眼、毒々しいまでに赤い唇——顔にも身體にもしたるばかりの媚を見せながらその妖艶な女は、むせるやうな香料のかをりと一緒に、襲ひかゝるやうにして啓三郎の隣に腰をおろした。

啓三郎は、まぶしげに眼をまたゝいた。と、同時に啓三郎は突つ立つて叫んだ。

「違ふ！ 違ふ！」
「ほ、ほ！ 何が違ふんですの？」
見知らぬ女は、壓倒的な媚態を以て笑ひかけた。

四

「違ふ！ 違ふんです。君は一體誰なんです。」
意外な女の出現に、すつかり狼狽した啓三郎は、おびえた眼で見上げながら身體を固くしていった。
「誰でもいいではございませんか？ お待ちの方が見えるまで、しばらくお相手をさせて下さいました。ほ、ほ！
まあ、そんな怖い顔なさないで——。」

女の笑顔は、牡丹の崩れるやうにあでやかだつた。濃い臙脂色の裾に草花模様を散らした夜會服の振の長い袖口からは、肉付のいゝねつとりとした白蛇のやうな腕が抜け出して、その白い指をくねくねと組み合せた両手の上に、縋の軟かな浮世繪めく顔が載せられてゐた。

「来るのですか？ 本當にあの人は来るのですか？」
「來ますわよ。來ますから、まあそんなにむつからしないで——だけど、あなたのやうな方がさうして戀焦がれてゐらつしやるお嬢様はどんなにお美しくつてゐらつしやるのでせうね？」

女はその時女給仕が運んで來た銀盆の上の、甘い洋酒を二つのコップに充たして、
「まあ、お酒でも召上れ！」
さういつて、自分もその一つを、絲きり齒のちらく／＼と見える赤い唇にもつて行きながら、
「でも、あなたのやうな方から、そんなに想はれるなんて、女冥利といふものですわね。私も、あの方にあやかりた

うございますわ。」
美しい眸がまつ手を蹴つて、ながし目がなまめかしく流れた。

「本當に——本當に來るのですか？」
「ほ、ほ！ 來ますわよ。こんなにして待つてゐらつしやるのに、來ないでゐられる女がありますか？——まあ、そのお酒召上れよ。そして、そんなこは顔ばかりならしないで、何かお話をして下さいました。お待ちになる間の退屈ざましに、私のやうな女でも、まあしばらくお相手をさせて下さいました。さあ、召上れよ。」
女はグラスを取りあげて啓三郎の口におしつけるやうにした。

「いや、もういけないんです。」
「あら、私がお相手ぢや、召上つていたゞけないんですの？」
女は媚を含んだ眼でぐつと見据ゑるやうにした。ぐい／＼と否應なしに相手を惹き付けずには措かない、殆ど暴力的な魅力をその眼はもつてゐた。啓三郎はそれを感じた。一種の戰慄が彼の身内を走つた。

「僕もう飲めないのです！」
「ね、これだけ召上れよ。これだけ召上つたら、私すぐにあの方をお呼び致しますわ。」
「あなたはあの人を知つてゐるんですか？」
「え、それ召上つたらすぐに電話をおかけして、お呼びいたしますわ。」
「本當ですか？」

「え、だから、召上れよ。」
啓三郎はその強烈な洋酒を一息にくつと乾した。
「ほ、ほ！ 何か毒でもお嘸みになるやうな顔付ね。でも、よく召上つて下さつてね。」

「早く！ 早く、あの人を呼んで下さい。」
「性急ね。今お呼び致しますわ。」
女は自分のグラスを乾してから、それを充たすと共に、啓三郎の今あけたばかりのグラスにも、もう一度波々といで、

「ついでに、もう一ついかど？」
「いや、もう駄目です。——僕もう酔つてゐるのです。」
「少しお酔ひなさいませ。お酔ひになつたら、私の顔があの方のお顔にお見えになるかも——ほ、ほ！ むしのい
事申し上げて御免下さいませ。」
女は再び妖艶な笑を浴せかけた。

五

「早く——早くあの人を呼んで下さい。」
啓三郎は繰返した。
「呼んであげますから、まあもう少し召上れよ。」
「いや、もういけない！ 僕はもう——。」
實際、啓三郎はもうひどく酔つてゐた。この部屋の中の夢見深い空気が、強烈な酒精、そしてその妖しい女の濃厚な媚態——啓三郎は、頭のしんがだんくしびれて行き、意識が次第に遠くなつて行くのを感じた。その上、身内の熱が酔とひとつになつて、何ともいへぬ全身のものがうさで、さうして椅子にかけてゐるのさへ大儀になつて来た。
「そんなにお酔ひになつたんですの？」

女は、再び花舞の崩れるやうに笑つた。
「あ、あなたは——。」
と、啓三郎は、視線の定まらない眼で、女の顔を見据ゑながら、もう一度、かう訊いて見ずにはゐられなかつた。
「一體あなたは誰なのですか？」
「誰だと思ひになりましたか？」
「分らんです。——本當にあなたはあの人の友達なんですか？ あの人はどうしてゐるのです？ 何處にゐるのです？」
啓三郎は喘ぐやうにいつた。
「さあ、どうしてゐらつしやるか知ら？」
「あなたは知らないんですか？」
「ほ、ほ！ 何をいつてゐらつしやるんですの？」
「あの人を、こゝへ連れて來るといつたのは嘘ですか？」
「あの人は？ あの人はどなたの事でございますの？」
「ぢや、嘘なんですか？」
「まあ、もう少し召上れよ。」
「いやだ！」
「まあ、怖い顔！」
「嘘だつたのですか？」
「まあ、何がござりますの。ほ、ほ！」

「僕は歸ります。」

啓三郎は立ちあがつた。椅子が倒れた。啓三郎はよろ／＼とよろめいた。

「あら、おあぶなうございますわ。」

と、女はよろめく啓三郎を支へるやうにして、

「まあ、おかけ遊ばせよ。私、あなたにお話致したい事がございますの。」

女は啓三郎を壁際の長椅子におしやるやうにした。そして、長椅子に倒れかゝるやうにした啓三郎に、ひしとすりよつて坐つた。

ひどい息切がした。啓三郎は、うなだれた顔を片手で押へて、ぢつと眼を閉ぢた。

女は、啓三郎の膝に手をかけて、その顔をのぞき込むやうにして、

「どうなさいまして？ お苦しいの？」

「歸る——僕は歸ります。」

啓三郎は再び立ちあがらうとした。

「いゝえ。歸さない。」

女は肩に手をかけて引据ゑるやうにした。

「歸して——歸してくれ給へ。」

啓三郎は哀願的にいつた。

「ほ、ほ！ どうしてもお逃げにならうツてのね。ひどい方！」

「あなたは、どうして僕をこんなところへ呼んだのですか？」

「どうしてとお訊きになりますの？」

女は、しんみりとした調子になつて、かういふと、嘆くやうに溜息をついたが、

「私、そんなにまで思はれてゐらつしやるその方が羨ましくございますわ。私、ほんのちよつとでもいゝから、その方のおしあはせのお裾分に預りたかつたのでございますわ。」

「何を——何をいつてゐるんです。」

啓三郎は腹立たしげにいつて、立ちあがらうとしたが、身體がいふ事をきかなかつた。怖ろしい魅惑が、いつの間にか彼の五體にしみわたつてきた。——彼は夢の裡に喘ぐおもひで、その眼の前にクローズ・アップされた女の妖艶な横顔をながめた。

——ぢつと見てゐるうち、その横顔の上に、見る／＼、別の面影が描き添へられて行つた。彼の心の中の幻が、まぎ／＼とそこに一つの實體を藉りてあらはれて來た。

「萬千子さん。」

彼は思はずかう叫んだ。

廻 迨

猪之助は兇行の夜直ちに收監された。豫審が済んで公判に移されたのは、夏に入つてからであつたが、九月末には裁判も確定し、懲々刑に就く事になつた。殺人の罪は重かつたが、その被害者の庄作が検事に對して語つた言葉や、猪之助自身の色に露はな悔悟やが、検事にも判事にもよき心證を與へた。刑は最も輕きによつて斷じられた。

正直のところ、石田辰夫に對しては、ひそかに嫉妬を磨いた事もある。しかし、庄作に害を加へようなどとは、猪之助の夢にも思はなかつたところである。それは全く時のはずみだつた。くわつとして前後も忘れて夢中でやつた事だつた。——謂はゞ一つの過失。精神的過失だつた。猪之助がどんなにその過失を悔いたか？ 彼は冷たい鐵窓の下に流涕して、

「許して呉れ！ 田代。」
と繰返した。

もし、それが許されたら、猪之助は自殺をでもしたかも知れない。いや、實際、自殺のおそれありとして、看守達の特別の注意の下に置かれたりした。が、彼をして、敢てその擧に出でしめなかつたのは、美代子の存在だつた。接見禁止が解かれると同時に美代子は面會に來た。許されるだけの機會を用ひて彼女は訪ねて來た。やうやく顔が見られるだけの小さい窓のあなたこなたで、限られた時間と、きびしい監視としばられて、交す簡単な會話ではあつたが、眼で、顔で補ひながら、美代子は多くの事を語つた。彼女は、猪之助に庄作の臨終の言葉を告げた。そして、庄作の言ひ遣した言葉に對して、あくまで忠實なるべき事を猪之助に誓つた。私が心得違ひをしてゐたのです。こんな

事になつたのも、みな私の心得違ひのせみです、と美代子はいつた。私は、いつまでもあなたを待つてゐます。深く刑に服し、早く刑期をへて出て來て下さい。それまでは必ず待つてゐますから、と美代子はいつた。——その言葉が猪之助を活かし、そして力つけた。

田代。濟まない！——長い刑期を前にしてとらはれの身になつて、却つてそこに生きることの希望を回復した猪之助は、熱涙を揮ひながら庄作の靈に向つて呼びかけた。

まことに庄作は、死を以て二人の戀を成就した。庄作の言葉は——死に臨んで、彼の言葉は、斷然美代子の心を決定した。美代子は、もう辰夫の美代子ではなかつた。今はもう一緒に棲むことも止めてゐた。二人は、たうとう別れてしまつた。

美代子の身邊にもまた事が多かつた。彼女の父は、夏の眞盛の頃に、急病で死んだ。彼女は身一つで殘された。猪之助へのさし入れたものや何かの費用のためもあつて、彼女は、比較的収入の多い職業を求めて、この頃ではもとの友達の出でゐるカツフエにつとめてゐた。勿論、住所も變つた。哀歡の思出の多い東五軒町の家は、父の死と共に引き拂つて、神田の方の、その友達の家同居してゐた。

猪之助は、愈々二三日のうちに、既決囚として千葉の方の刑務所に移されることになつてゐた。それで、今日美代子は、勤め先の方を繰合せて面會に來たのであつた。

「身體を大事にしてね。いゝえ、あつちになつても、毎月會ひに行きますわ。一月に一度は逢へるんでせう？」

「あゝ。俺よりもお前こそ——俺の方は些とも心配する事はないんだが、美イちゃんのこと俺は氣になるのだよ。一人ぼつちで大變だらうな。」

「いゝえ。大丈夫よ。」

美代子は強ひてほゝゑんで見せた。いつにかはらぬベセテイクな氣持だつたが、今日はとりわけ、胸が迫つて來

るのを、美代子はわざとさりげなく取繕つて、さうして、別れて出て来たのであつた。
美代子は、うなだれながら歩を小刻に刻んで、市ヶ谷の刑務所の門を出た。
もう、秋の日はくれかけてゐた。つめたい風が、涙のあとのしめッぽい彼女の頬を吹いた。
——ふと、彼女は、後の方にはたたくと鳴る足音を聞いた。その足音が妙に耳について来た。
彼女は、思はず振り返つて見た。

二

振り返つた美代子の眼に、黒い上衣を着たすらりと背丈の高い女の姿が映つた。女は歩を停めて、美代子の眼を見迎へた。かすかな微笑が女の口許をかすめた。女が意識して、美代子のあとをつけて来たのだといふことが、その表情で知られた。

「……………」

美代子は眼を睜つた。次の瞬間、

「あら！」

と聲を立てた。

「覚えてゐらつしやいまして？」

静かな微笑が、女の口許にひろがつて行つた。

「覚えてをりますわ。」

今はもうすべてが過ぎ去つた！ しかしあの不幸な戀に苦しんだ過去一年の間、絶えず激しい嫉妬の對象となつてゐたこの美しい戀仇の顔を、どうして忘れる事が出来たらう？ 美代子はその美しい人の顔——萬千子の顔に、わな

なく視線を投げつけながらいつた。

「お久振りでしたわね。」

「え。」

「今、どうしてゐらつしやいまして？」

親しげに問ひかける萬千子の言葉に、美代子はどう返事をしていゝかと迷つた。

「石田さん、お變りはございませんか？」

「え。」——多分。

「多分？」

と、萬千子は問ひ返した。妙な返事だと思つた。

「え。」私、よく知らないのですもの。」

「さう？ 御存じないんですの？」

萬千子の顔には驚の色が動いた。

手持無沙汰の沈黙の中に、二人は一寸顔を見合はせて立つてゐたが、

「あの、少し一緒に歩いて下さらない？」

萬千子がいつた。

「え。」

と美代子はうなづいて、

「あの、私、お嬢さまにいろいろお話したい事があるんですの。」
思ひきつたやうにいつた。

「ほ、ほ！ お嬢様なんて仰有ツちやいやよ。」

萬千子は笑つて、

「私もね、お訊きたい事があつて、それであそこからあなたの後をつけて來ましたの。——後をつけて來たりして御免なさいね。」

萬千子は美代子と肩を並べて歩き出しながらいつた。

「あそこから？」

「ええ。——あすこの待合室で、私、あなたをお見かけしたんですの。」

あの市ヶ谷刑務所の面會人の待合室で、萬千子は美代子を見たのであつた。

「まあ、さうでしたの？ あなたも、どなたかに御面會にあらつしやいましたの？」

美代子は驚いて問うた。

「ええ。——あなたは何？ あなたは、どなたに御面會？」

それが辰夫ではないかと萬千子は思つたのであつた。労働運動の闘士である辰夫が、何かの事件に引つかゝつてあそこへ收容されてゐる、それで美代子が面會に來たのに違ひない。萬千子はさう考へてゐた——で、答へ惑ふ美代子の答へに先んじて、

「石田さんちやございませんの？」

かう重ねて訊いた。

「いゝえ。さうぢやありません。」

「まあ、さうぢやないんですの？」

「ええ。——石田さんとは、私、もう別れてしまひましたの。」

「え？」

萬千子は激しい驚きに撃たれて、

「石田さんとは別れて——それ、本當ですか？」

「ええ。」

強くはつきりと美代子はうなづいた。

「まあ、どうしてですか？——どうしてそんな事になつたんですの？」

「間違つてゐたんですわ。」

「間違つてゐた？」

「ええ。——それで、私、いろいろお嬢様に申し上げたいと思つてゐましたの。」

三

「それはどういふ意味でございますの？」

「私、本當に悪かつたと思ひます。」

「あなたの仰有ること私には分らない。」

「あなたにお目にかゝつてお詫びしたいと思つてゐたんですわ。」

「まあ、何故でせう？」

美代子は、しばらく間を隔いてから、

「私、ゆつくりお話をしたいんですけど——。」

「ちやア、あの、私のところへいらして下さらない？——私シと、さう遠くないんですの。」

「ええ。お邪魔でなければ——」
 「構ひませんわ。ぢや、さうして下さいました。」
 それから二十分ばかりの後、二人は、余丁町の萬千子の家の二階の一間に相對した。余丁町の萬千子の家——それは、萬千子が、弟の千尋と二人で持った家であつた。萬千子は、そこで千尋と二人、姉弟水入らずの生活を初めたのであつたが——そして久振りで家庭的な楽しさと平和さとを、そこに見出したのであつたが、しかし、その楽しさも平和さも、さう長くは續かなかつた。城西ホテルの窓から飛び降りて、九死を以てあの一髪の危機を脱した時、彼女に救ひの手をのべてくれたのは、そこへ通り合はせた活動女優あがりのダンサーであつたが、何事にあれ、所詮働かずして生き得ぬ身の、萬千子は、それから、そのダンサーの手引きで、同じ職業に生活の道を求める事になつた。良家の令嬢からダンス・ホールの踊り子！ とりわけ萬千子のやうな誇りの高い女性が、半ば媚を賣るこの職業！ これは實に思ひきつた身の落し方といふべきであつた。だが、彼女の新しい友達の宮城數枝はかういつた。
 「どうせ、世の中の男性は狼か狐よ。あんたのやうな美しい人を、あのけだもの共がどうして見のがしておくもんですか？ 美しければ美しいほど、危ないのよ。生きにくいのよ。あんたのやうな人が、生きる道は一つきりないわ。それは逆にその美しさを利用して事だわ。ねえ、退いて守らうとしたつて守りきれぬものぢやないのよ。進んで相手を弄んでやるのよ。自分が弄ばれないためには、自分から進んで世の中の男共を弄んでやる——その外に道はないのよ。弄ばれるか、弄ぶか、二つに一つなんだわ。ねえ、あんたひとつ思ひきつて媚婦になるのよ、妖婦になるのよ。といつて、何も私みたいに身を持ち崩せつていふのぢやないの。あんた、「眞珠夫人」つて、誰讀んだ事がある？ ねえ、眞珠夫人の意氣で行くのよ。あくまでも處女を守りつづけながら、片つ端しから男共を弄んでやる——ほ、ほ、こんな痛快な事なかつたか？」
 「あら、私、そんな事——」

といつたが、萬千子は結局、その道をとるより外なかつた。さうだ！ すべての思ひが、美しさにあるならば、むしろ逆にその美しさを武器として生きる外はなかつた。萬千子は、その先輩の忠言に従はざるを得なかつた。千尋に會つた時、萬千子はその職業を語るのを恥ぢた。しかし、いつまでも隠しおはせる事が出来る筈はなかつた。
 「さうですか？ 驚いたなあ！」
 と、それが知られた時千尋は笑つたが、
 「仕方がないですよ。何をしたつて勞働に變りはないんですからね。まさか、姉さんにや女工にもなれないだらうからね。」
 さう慰めるやうに千尋はいつた。
 しかし千尋が、その職業を喜んでくれるわけはなかつた。——夜遅くなつてから歸つて来る姉を迎へる時、千尋の眼は神経的に輝き、千尋の額は不快さうに曇つてゐた。
 それが、萬千子には何より辛かつた。しかし、萬千子を悲しませたのは、そんな事ではなかつた。千尋が、繪筆を捨てしまつて、全く別の方面にその情熱を燃やし初めてゐることであつた。
 「だつて、あんな立派な繪が描けるんぢやないの？ どうしてやめてしまつたの？ 私の望は、千尋さんが、立派な畫家になつてくれることより外には無いのよ。そのためには、私、どんな犠牲でも拂ふつもりであるのよ。あんたの學資ぐらゐ、決して困らせやしないわ。」
 「いえ、僕はもう暢氣に繪なんか描いてゐられない氣がして來たんです。」
 千尋は、しかし、いつもかう繰返すのであつた。

千尋は、かうして、その新しく見出した方向に向つて少年らしい性急な歩を進めて行つた。彼は、ある左翼の思想團體に加盟して、その機關雜誌にも同人の名を連ねてゐた。軒昂たる意氣は常に矯激な言動に表現された。仲間集に行くといつて出て行つた夜たうとう歸らなかつたので、どうした事かと案じてゐると、あくる日の午後になつて蒼ざめた顔と血走つた眼とで歸つて來た。留置所に一夜を過ごしたといふのであつた。千尋の若い心を蕩揺し刺衝するものが何であるか？ は萬千子にも分つてゐた。それが、あの辰夫を自分からさらつて行つたと同じ時代の波である事は萬千子にも分つてゐた。分つてもゐれば、又、十分に肯定することも出来た。しかし、萬千子は、さうした弟を見る時衷心に感ずる寂寥感をどうすることも出来なかつた。或時、萬千子は、千尋の机の上に置いてあつた分厚な一冊の書物を、何気なく取り上げて見た。マルキシズムに關する翻譯書であつたが、そのタイトル・ページに、原著者と並べて刷り出されてゐる譯者の名を見ると、思はず眼を瞠つた。(石田辰夫譯)とあつた。

「むづかしい本を讀んでゐるのね？」

「ええ。僕のあたまにや少しむづかし過ぎるんですが、譯がいゝので、かなりよく判るんです。」

「(石田辰夫)ツて人が譯したのね？」

「ええ。」

「いつ出たの？ この御本。」

「最近です。」

「石田ツて人、えらいの？」

「ええ。なか／＼しつかりした人です。——しかし、實際運動家としちや近頃駄目です。前にや随分期待された人なんです——」

「あんた、知つてゐるの？」

自分の戀について全く何も知らない千尋である事は分つてゐたが、かう訊いた時、萬千子の聲はわな／＼した。

「いゝえ、知りません。——僕の友達にや知つてゐる者もあるやうですが——」

——石田辰夫！ とうに忘れてしまつた筈の、とうに記憶から拂拭した筈のその名詞が、いかに強い響を以て胸を

撃つ事ぞ！ 萬千子は、魂の底深く巣くうてゐる自分の「未練」に對して腹立たしさを感ぜざるを得なかつた。

今日、或演説會で、警官に反對し傷害を加へたといふかどで、三四人の仲間と共に一月ほど前から市ヶ谷に送られてゐる、千尋に面會に行つて、面會所で見かけた美代子の姿に心をひかれ、あとをつけたりしたのも、つまりは、その「未練」がさせた業だつた。しかも、美代子の口から漏れたのは、あまりに意外な言葉だつた——。

「さあ。」

と、萬千子はかたくなつて火鉢の向うに坐つてゐる美代子にやさしくいつた。

「蒲團をおおて下さいな。遠慮なさらないでね。」

「ありがたうございます。」

美代子は、ちつと膝に眼をおとして、しばらく考へ込むやうにしてゐたが、

「私、本當にあなたに濟まないと思つてゐるのですわ。——どうぞ、お許し下さいませね。」

うるんだやうな眼で、萬千子を見上げた。

「まあ、何故、そんな事を仰有るのでせうね？」

「あの人は——石田さんは、矢張り、あなたの事を思つてゐらつしやるんです。——それを——それを——」

と、美代子は、すこしども、やうにして、

「私が思ひ違ひをしてゐたんですの。私、本當に身の程知らずでした。」

「まあ、何を仰有るんでせうね。」
萬千子はつとめて平静を装ひながらいつたが、その胸はあらしの海のやうに騒ぎ初めた。
「私、本當に馬鹿だつたのです。私、あなたに悪かつたと思ひますの。」
「まあ、そんな事——どうして、そんな事仰有るんでせうね？」
「私、あなたの御邪魔をして、いゝ氣になつてゐたんですもの。本當に、どうぞ、お許し下さいませぬ。」

五

「許すの、許さないのつて——私、あなたの仰有る事がよく分りませんわ。どうぞ、事情をお話し下さいませぬ。石田さんとは、ぢや本當に、もう御一緒にゐらつしやらないの？」
「ええ。——あの方から何とか思はれてゐると思つたのが私の間違ひだつたんですの。——あの方が愛してゐらしたののは矢張りあなただつたんですの。それが分らなかつたばかりに——あなたにも本當に濟まなかつたと思ひます。私の方にも随分いろ／＼の事がありました。」
美代子はかう前置をして一切の事をそこに語り出した。口重な話下手な美代子の話は、その上胸に迫つて来る激情のためにしば／＼中斷されたり、しどろもどろになつたりした。それだけに、彼女の話しは一層感動的であつた。——美代子が猪之助について語つた時は、

「まあ——」

と、萬千子も思はず驚きの聲をあげた。

兄ともいふべき人は、非業に斃れた。幼馴染の戀人は、重罪人として獄に下されてゐる——それも皆自分の過失が原因だつた！ 語り來つて美代子の涙はほどばしつた。美代子は袖を顔におしあてゝしばらく聲を呑んだ。

だが、美代子はすぐに涙を収めた。そして、萬千子の顔をまともに見据ゑながらいふのであつた。

「石田さんは、あなたを探してゐらつしやるんですわ。あなたに逢ひたがつてゐらつしやるんですわ。石田さんのお住居は私知つてゐます。——お嬢様、あなたは石田さんのところへ、もう一度お戻りにならなければいけませんわ。」

「いゝえ。今更そんな事は——私だつて、今更そんな事は出来ませんわ。」

萬千子はかう静かにいつたが、その胸が新しい火で燃かれ初めた事を感じずにはゐられなかつた。新しい火——いや、それはまだ消えずにゐたありし日の情炎だつた。灰をかむつて、燠になつてゐたそれが、再びそこに燃えあがつて來るのを彼女はどうする事も出来なかつた。

「まあ、どうしてとせう？」

「でも、さうは行きませんわ。」

必死の自制を以て、萬千子は淋しく微笑んで見せた。

「だつて、石田さんはあなたの事をあんなに思つてゐらつしやるんですもの。」

「そんな事、何だか分りやアしませんわ。」

「いゝえ、それは——。」

と、美代子は一生懸命になつて、

「あの方が、私のやうな者を、何とか思つて下さつたのは、ほんの一時の氣紛なのですわ。ほんの表面だけの事なんですわ。心の底では矢張りあなたを愛してゐらしたのです。私、はつきりとそれが分つたのですわ。」

「あなたをばかりぢやありません。石田さんは私をだつて、本當に愛してゐらつしやらないのでせう。」

「いゝえ。そんな事はありません。」

「あなたをだつて、私をだつて——あの方は、誰をだつて本當に愛したりする事は、出来ない人なのかも知れません

わ。」

萬千子はそれを、美代子にいふよりも、むしろ自分自身に向つていつたのであつた。——心よ！ 何故さう騒ぐのだ？ 心臓よ！ 何をそんなに燃え立つのだ？ あの人は未だ自分を愛してゐるといふ。だが、果してさうなのか？ 一旦、自分を裏切つたあの人の愛が、果して信じ得るものか？
——あの人は愛のために人を愛する人ではない。思想のために人を愛する人なのだ。人よりむしろ思想を愛する人なのだ。

「そんな事はございませぬわ。」

と、美代子は熱心にいひつづけた。

「あの人は矢張りあなたを愛してゐらつしやいましたわ。始終、あなたの事を思ひ續けてゐらつしやいましたわ。あの時、あゝしてあなたを歸してしまつた事を、始終後悔してゐらつしやいましたわ。」

「後悔して？」

「えゝ。後悔してゐらつしやいましたわ。」

六

萬千子の感情は收拾し難く混亂した。彼女はちつとうなだれた。深い沈黙が座を領した。

「ねえ。」

と、美代子は、そのやゝしばらくの沈黙の後についてた。

「どうぞあの人に會つて上げて下さいませ。——あの人を許してあげて下さいませ。あの人は本當に後悔してゐるのですから。」

「……………」

「私も後悔してゐるんです。私、ほんとに馬鹿な女でしたわ。あの人を許して——そして、私を許して下さいませ。」

「あら、私、あなたには、許すも許さないもないのよ。」

「でも、悪い女だと思つてゐらつしつたんでせう？」

「いゝえ。——そんな事ありませんわ。」

「まあ、さうでせうか？ 私、あべこべにあなたをお恨したりして——何ていけない女だつたんでせう。」

「私を恨んで——？」

萬千子の口許には淋しい微笑がのぼつた。

「えゝ。どうせ、私のやうな者は、育ちのいゝお嬢様にはかなはないんだと思つて、口惜しがつてみた事もありました。」

美代子も淋しく微笑した。

「さうぢやないのよ。あの方はね、私がブルジョア娘だからツて、それで私から離れて行つておしまひになつたのよ。」

「そんな風な事を、よく私にも仰いましたけど——でも、それは口先ばかりの事だつたんですわ。あの人は矢張り、始終あなたの事を思つてゐらつしつたんですわ。」

「さうでせうか知ら？」

「さうですわ。」

美代子は強くいつて、萬千子の顔を見上げた。

四つの眼が、涙の底からひたと見合はされた。萬千子は、同じ悲と同じ嘆との交流をそこに感じた。それは女性としての共通の悲、共通の嘆だつた。その共通の悲、共通の嘆のなかに二つの魂の完全な融和が感じられた。

相抱いて泣きたいやうな激情の發作が、萬千子の胸に衝きあげて來た。

「だけど、あなたはおしあはせね。」

萬千子は、辛うじてその發作を抑へながらいつた。

「石田さんなんかどうでも、さういふ方がおありになるんですもの。」

一つの愛にははぐれても、もう一つの愛をしつかりと握み得てゐる美代子を、萬千子は羨まずにはゐられなかつた。

「でも——私、私のためにそんな事になつたかと思ふと、苦しくてたまらないのですわ。」

美代子は、暗い獄窓の下にある猪之助を思ふのだつた。そしてまた今はもう一基の墓標の主となつてしまつた庄作の事を思ふのだつた。

「本當にあなたも大變ね。でも、矢張り、あなたはおしあはせよ。」

「さうでせうか？」

「ええ。おしあはせよ。で、その方何年したら出ていらつしやれるの？」

「八年。——八年ですの。」

「八年？ 随分長いのねえ。」

「ええ。でも、仕方がありませんわ。」

「八年でも十年でも——いつまでも待つてゐらつしやるのよ。希望さへあれば百年だつて待てますわ。」

萬千子は、姉めいた調子でいつた。

「ええ。そのつもりでをりますの。」

「うらやましいわねえ。」

萬千子はもう一度淋しく笑つて、

「それで今どうしてゐらつしやるの？」

美代子は、カツフェにつとめてゐるのだと正直に語つた。

「さう？ 私、人形町の方で働いてゐるんですの。」

「何をなすつてゐらつしやるんですの？」

「私も、あなたと同じやうな事をしてゐるのよ。ほ、ほ！ 私だつて矢張り働いてゐるんですもの。もうブルジョア

娘なんかぢやないのよ。」

萬千子はさういつて笑つた。

女の世界

萬千子は、美代子の歸るのをそこまで送つて出た。是非、辰夫に會つてくれるやうにと美代子は歩きながら繰返した。

「私、すぐに石田さんに知らせあげますわ。そしたら、石田さんきつとあなたに會ひに飛んで來ますわ。」

「いけないわ。そんな事をなすつちやいけないわ。」

萬千子はあわてよとめた。

「あら、何故でせう？ だつて石田さん、あんなにあなたを探して——會ひたがつてゐらつしやるのに。」

「そんな事何だか分りやしないのよ。」

「私、知らしてあげますわ。」

「いゝえ。いけないわ。」

「どうして、いけないんですの？」

「いけないの！ 本當にいけないのよ。」

萬千子は強くいつた。ありやうは、こつちから飛んで行つて會ひたいくらゐなのだ！ それだけに、萬千子は却つて會つてはならない氣がするのだつた。何を今更！ 私、矢張り一人で生きて行くのだ。

停留所まで送つて行つてそこで別れた。萬千子は、その可憐な娘に對して深い愛を感じた。別れる時、彼女は美代子の手をしつかり握つた。そして心から、美代子の幸福を祈つた。

美代子と別れて、家の方へ踵をめぐらしたが、萬千子の心は未だ激しく動揺してゐた。

萬千子は宮田數枝を訪ねようと思ひ立つた。彼女の危難の時に彼女に救ひの手をのばしてくれ、それからの生活にも何かと導きもし、後見もしてくれるあの親切な友達に、彼女はもう三四日會はなかつた。人形町のダンス・ホールで、毎晩顔を合はせ、歸りにも一緒に歸るのだつたが、どうしたのか、この三四日數枝はダンス・ホールに姿をあらはさなかつた。一昨日ちよつと訪ねた時不在だつたが、今日はあるかも知れない。妖婦——とは自分でもいつてゐる。

いろいろの經歷をもつてゐるらしい、ひどいあばずれ女には違ひないが——そして、現在でも、その美貌と才氣とに任せて、随分放縱な暗い生活をしてゐるらしいが、さうした棄鉢な、荒み切つた氣持の中にも、底に通ふ一味のやさしみがあつて、萬千子には、いつもよき姉として臨んでくれた。こんな時、數枝に會つたら、何かの良い暗示でも得られさうな氣がしたので、萬千子は、歩いてもう遠くない、西大久保の數枝の家を訪ねた。

數枝は、老婢を一人使つて、小さいが門構のさッぱりとした家に暮してゐた。玄關に立つておとなふと、老婢が出て來た。「お歸りになりましたよ。はい、ゐらつしやいますよ。さあ、どうぞ。」

老婢はにこ／＼としていつた。

「いらつしやい。」

硝子戸をたてた日あたりの縁の、毛皮を敷いた藤椅子に伊達巻一つの大柄な身體を投げかけて、細巻のシガーをく

ゆらしてゐた數枝は、ものうげな笑顔で萬千子を迎へた。

「お歸りになつたのね？」

「たつた今、歸つたところよ。」

「どうなすつたの？」

「T——ホテルにしけこんでゐたのよ。」

「T——ホテル？」

「ええ。すてきな鴨をくはへ込んでね。ほ、ほ！」

「まあ！」

「あんたなら、さしづめ、窓から飛び降りるところだけどね。」

「まあ、何いつてらつしやるの？」

「引ッ張り込むのと、飛び降りるのとは、大した違ひだわねえ。ほ、ほ？」

數枝は、白い咽喉をふるはして笑つた。

「私、どうなすつたのかと思つたわ。」

「——まあ、おかけなさいな。」

數枝は自分の前にもう一つの椅子を顎でさして、

「それはさうと、弟さんの方どう？」

「今日も一寸會つて來たんですけど——。」

「まだ出られさうもないの？」

二

「折角逢へた弟さんが、こんな事になつて——本當に困るわねえ。」

數枝は、萬千子の意中を察していつた。

「ええ。」

「ええ。何しろまだ子供なんですから——思ひ込むとむきになつてしまふんですわ。」

「私にはあの人、苦手なのよ。あの人には、私なんか途方もなく馬鹿氣た人間に見えるらしいのね。あの人私を見る眼を御覽なさい。どんなに輕蔑しても輕蔑し足りないッて眼をしてさ。——いゝえ、あの方は口に出してもつけつ

けといつてゐたわ、ブルジョア共のおもちやになつて、それが何が面白いんだつて。それでね、あの方は、私を、大

事な姉さんを墮落させようとする悪い女だと思つてゐるのよ。」

數枝は笑ひながらいつた。

「まあ！——でも、私がどんなにあなたに御厄介になつたかつて事は、千尋だつて知つてゐる筈ですわ。」

「いゝえ、あの方は、私があなを墮落させたんだとばかり思つてゐるんですわ！——そして、私を憎んでゐるのよ。」

「まあ！——とんでもない事ですわ。——あの子には何も分らないんですわ。」

「私、だから説明してあげたのよ。千尋さんは、私を、ブルジョアのおもちやになつてゐるんだと思つてゐるけど、さ

うぢやない、反對に此方からブルジョアのお馬鹿さんたちをおもちやにしてやつてゐるんだつて事をね。千尋さんた

ちの運動が正面攻撃なら、私たちのは、横の方からの——裏の方からの、矢張りこれも一つの戰なんだつて事をね。

私、千尋さんたちのいふ事よく分るわ！——むづかしい理窟は兎も角として、こんなろくでもない世の中を、このまゝ

にしてはおけないぐらゐ私にだつてよく分るわ。ブルジョアに對する憎しみなら、私だつてこの胸に一杯なんだわ。

だから、私思ひきつて、千尋さんたちの仲間に飛び込んで行かうと思ふ事があるわ！——だけど、かう、自墮落に身を

持崩しちまつちやア、もうそんな事も出來ないし——私は矢張り私のやり方で、かたきうちをしてやつてゐるつもり

なのよ。」

數枝の頬は、次第に熱して行つた。數枝は、ちよつと間を隔てから又つとけた。

「世間ぢや私の事を妖婦だとか何とかいつてゐるわねえ。けちな妖婦もあつたものね。私の願は、本當の妖婦になる

ことなのよ。毒蜂ぐらゐぢやつまらない、毒蛇になりたいのよ。毒蛇になつて、ブルジョアの男どもを、片ツ端しか
ら噛んで噛んで噛み殺してやりたいのよ。」

「まあ！」

と、萬千子は眼を睜るやうにした。

「ほ、ほ、ほ！ 私がこんな事いつて、あんた驚いたの？」

「別に驚きはしませんけど——」

「でも、口だけよ。口でいつて見るだけよ。私も矢張り世間並の、弱い意地のない女なのよ。」

數枝は嘆くやうにいつた。——父は、知られた巨商であつたが、彼女は、その父の老年期において小間使の腹に生
ませた娘であつた。父の歿後、間もなく母に死別して、父の邸に引きとられ、義兄の庇護に生ひ立つたが、同じ父の
子である多くの同胞達から除けものあつかひにされて、いやといふほど日蔭者のわびしさ果敢なさを味はされた。
最初の戀は女學校を卒業した年、相手の從兄の醫學士だつたが、その戀人は、海外留學を口實として彼女を振棄て、
去つた。彼女は義兄の家を出た。彼女の美しさが彼女を苦しめた。多くの男から男へと轉々するうち、身も心も荒み
つくして、やがて名うての男たらしとなつた。今はKダンス・ホールの女王として華やかな灯影に嬌艶の媚をほしい
まゝにしてゐるが、前には活動女優として、主演のフィルムも二三本はある——大體こんなのが宮田數枝の經歷であ
つたが、萬千子は、さうした人も許しわれも許す妖婦の數枝に、案外しんみりとした涙つばい一面のあるのを知つて
ゐた。

三

「私の願は本當の妖婦になることなの。世の中の男といふ男を片ツ端から弄んでやることなの。男といふ男のうち

でも、とりわけ憎いのは、嘘つきで、輕薄で、人間のどんな貴い心をも金さへ出せば買へると思つてゐるブルジョア
の男共だわ。私、さういふ男共を徹底的に呪つてやりたいの。それが私の面白くもない世の中にかうして生きてゐる
たつた一つの興味なの。生甲斐なの。ほ、ほ！ こんな事いふと少しお芝居めくわねえ。失戀した女——男に裏切ら
れた女ツてものは、大抵こんな事をいふものでせう。何もかも紋切型よ。」

と、數枝は自ら嘲るやうに笑つた。

「でも、誰の口眞似をしてゐるんでもないの。私、本當にさう思つてるのよ。」

「私だつて、あんたのお心持が分らないことはありませんわ。」

「さう？ あんたにも分る？」

「え、分らない事はありませんわ。」

私だつて、男に裏切られた女の一人なのですもの——と、萬千子はいはうとして口をつぐんだ。心にそまぬ結婚か
ら逃げて来たただけは告げたが、萬千子は、自分の過去については、殆ど數枝に語つてはゐなかつた。

「私が十九の時だつたわ。考へてみると、もうあれからいつの間にか十年近くたつたんだわ！ でも、私、あの時の
事まだ昨日のやうな氣がするわ。從兄にあたるその男は、その時二十五で、大學を出たばかりだつたのよ。別に、い
い男ツてんでもなかつたけど、日蔭者扱ひにされてゐた淋しい私に、いろく親切にしてくれたもんだから、私、す
つかり感激しちやつたのよ。この世の中でその男一人だけが頼になる人、さう思ひ込んですつかりその男に——ほ
ほ！ (身をも心をも捧げつくして) ツてわけだつたのよ。勿論、結婚の約束もしたのさ。ところがどうでせう？ 明
日にも正式の申込を、私の親代りの義兄の方へしてくれようつて時になつて、急に外國へ行く事になつたといふのよ。
大學を卒業すると、或る大きな病院へ勤めてゐたんだが、その病院の方から、是非にと頼まれたんで、どうしても二
年ばかりドイツとかへ行つて研究して來なけりやならないんだつていふのよ。別に秀才といふんでもないのに、變だ

と思つたら、矢張りそれが術だつたんだわね。つまり、わたしから逃げるための策略だつたのよ。——二年すれば歸つて来る、それまで待つておるで。さういはれて私も仕方なしに納得して、そのうちに愈出かけるといふ日が來たんで、泣きの涙で横濱まで見送りに行つたのよ。」

——數枝は、問はず語りに語りつゞけた。大體の事は、折節の、斷片的な述懐で聞き知つてはゐるが、こんな風に語り出されたのは今日が初めてであつた。今日の數枝は、何かひどく感傷的であつた。彼女の言葉には、しんみりと聴く者の胸の底にしみ入るやうな調子があつた。

——大勢の見送り人の中には、私の異腹の姉たちや、従妹たちなども交つてゐたんで、私、涙なんかこぼしてその人達に見咎められちやいけないと、一生懸命に我慢してゐたのよ。船の内まで送つて行つて、そこで別れようとした時、その男がそつと私に手紙を渡して、あとで読んでくれといふの。話し残したことを、こまかく書いてくれた手紙だと思つて、私、嬉しかつたわ。ところが、家に歸つて、それを讀んで見ると、どうでせう？ それも、つまり縁切の手紙なのよ。」

「まあ！」

「ほ、ほ！ いゝ面の皮といふのはあゝいふのをいふんでせう？——自分をすてゝ、棄てるために逃げて行く人を、泣きの涙で見送つたんだわね。いろ／＼の事情があつて、どうしてもお前と結婚するわけには行かないから諦めてくれ！ 僕の歸りを待つてゐるには及ばない、待つてゐてくれちやいけない、——さう、待つてゐてくれちやいけないと、はつきりと書いてあつたのよ。」

「まあ、随分ねえ。」

「私、もう氣が狂つたやうになつて、秘密も恥も忘れてしまつて聲をあげて泣き出したのよ。——ほ、ほ！ 何てみじめな女だつたでせう？」

數枝は、かういつて嘲るやうに笑つた。

四

「さうして私が泣いてゐるとね、従妹がそこへ來て、まあ何泣いてゐるの？ ツて訊くのよ、私もう隠すだけの元氣もなかつたもんだから、ふだんからあまり仲の好い従妹ぢやアなかつただけど、何もかもいつてしまつたの。すると、その従妹がいろ／＼親切に慰めてくれて、私がどこまでもあなたの味方になつてあげるからその男に復讐をしてやれといふのよ。——兎に角一緒になつて憤慨してくれて、それはそれは優しく私をいたはつてくれたの。ところがね、その口ですぐ私のみじめな戀愛事件を、面白半分に吹聴してまはつて、たうとう私を家にゐたゝまらなくしてまつたのよ。それもいゝけど——。」

と、數枝はそこでまた唇を引ゆがめるやうにして、自らを嘲るやうに笑つて、

「その男が二年足らずで歸つて來ると、早速その男と結婚したのが誰だと思つて？ その従妹だつたのよ。」

「まあ！」

「何でもね、その男が外國にゐるうちに、結婚の話が纏まつてしまつたらしいの。いゝえ、若しかしたら、その男が外國へ行くまへに、もう話が進まつてゐたのかも知れないのよ。」

「まあ！」

「ほゝ、ほゝ！ だけどもみんなありふれた——ありふれ過ぎた話だわねえ。世間にさらにある紋切型の女の悲劇だわねえ。——面白くもない！ 私、どうしてまたこんなつまらない話をはじめたんでせう？」

「それで、その男の方と、その後お逢ひになりませんか？」

「二度ばかり逢つたわ。二度目に逢つたのはつい此の間なの。」

「どうなすつて？」

「奥さんがヒステリイでね、すっかり弱つてるツていつてました。それでね、今ぢや濟まないと思つてゐる。あんな事は、今でも心の棘になつてゐる。矢張りあなたと結婚すりやよかつたんだ。しみじみ後悔してゐるなあって。」

數枝は吐き出すやうにいつた。

「後悔してゐるツて？」

「え。」

「それは嘘ぢやないでせう？ その方、本當に後悔してゐらつしやるわ。」

萬千子は力を籠めていつた。萬千子は、今日、美代子から聞いた言葉を思ひ出した。辰夫が後悔してゐるといふ言葉。

「私、いつてやつたわ。本當に後悔してゐらつしやるなら、ぢや、いかど？ もう一度やり直しませうかつて、ほ、

ほ！ さうしたら——。」

「その方向といつて？」

「本當にあんたがその氣なら、家庭なんか破壊しても構はないツて。」

「まあ！」

「それから私いつてやつたわ。いゝえ、そんなにまでなさる必要はございません。お妾さんで結構です！ 御都合で臨時の御用にも——ほ、ほ！」

「まあ！」

「私が御入用なら十圓もつてゐらつしやい、いつでもお役に立ちますから——ツてのは、あれはたしかカチウシヤの臺詞だつたわねえ。カチウシヤなんてもう古臭いわねえ。」

「矢張り、許す氣にはおなれになれなかつたの？」

「許すも許さないも——今更眞面目に話をする氣になれないぢやアないの？——でもねえ。」

と數枝はちよつと聲を沈ませて、

「あとになつてから何だか涙が出て困つたわ。最初の男ツてものは、矢張り何處かなつかしい氣がするものだわねえ。でも、そんなしをらしい氣持が少しでも残つてゐるうちは、矢張り男に馬鹿にされなきやならないわ。こんな事ぢや、私の妖婦修業もあやしいものよ。私なんか、どうあがいても、矢張り根が弱蟲の意氣地なしなんだから——考へてみると駄目だわねえ。考へてみると、男を弄んでやつたつもりで、つまりは矢張り男に弄ばれてゐるんだわねえ。」

嘆くやうに、又、深く自ら嘲るやうに、數枝はいふのであつた。

五

數枝は聲をあげて笑つた。しかし、その眼には涙があつた。今日の數枝は慥かにいつもとは違つてゐた。彼女はひどく感傷的であつた。意地強く装うた妖婦氣どりの嬌飾の下から、多恨多感の彼女の生地があらはれてゐた。あまりに女性らしい女性である彼女の、赤裸々な女性の魂——萬千子は、そこにそれを見た。

萬千子はいつた。

「あなたは矢張りやさしい方なのよ。口ではどんな事を仰有つても——又、どんな事をなさらうとも、本當のあなたはやさしい純情な方なのだわ。——私にはよくそれが分りますわ。」

「ほ、ほ！ たうとう内かぶとを見すかされちやつたのね。」

「いゝえ。私、初めからよく分つてゐましたわ。宮田さん、あなたは本當にいゝ方よ。」

萬千子は感動的にいつた。

「—だから駄目なのよ。純情とか優しさとか、そんなものを綺麗に捨てしまはなければ矢張り男性に張り合ふ事は出来ないのよ。考へてごらんさい。優しさとか、純情とか、そんなものは皆男性のために都合がいゝだけのものぢやなくて？ 男性が女性にそれを求めるのは、つまり、だましいゝやうに、弄びいゝやうにといふ男性の都合からなんだわ。奴隷には無知と服従を、女性には純情と優しさを—なんだわ。そんなものを思ひきつて棄てしまはなきや、所詮、女性はいつまでたつても男性の奴隷よ。」

「さうでせうか？」
「千尋さんなんかのいふ事は私にだつて分るわ。でも、私たち女性としちや、ブルジョアとプロレタリアとの問題よりも、男性と女性との問題の方が痛切だわ。精神とか感情とかについていへば、女性は男性に對していつも被搾取階級なんだわ。被搾取階級—ほ、ほ！ 千尋さんの口眞似よ。物質的には兎に角、感情とか精神とかの上からは、女はみんなプロレタリア、男性はみんなブルジョアで、さうして資本家なのよ。ね、さうぢやアない？」

「同感よ。私も—。」
「同感？ ほ、ほ！」
と數枝は笑つて、

「でも、勿論いくらかの例外はあるにはあるわねえ。」

さう少し考へ込むやうにしたが、
「でも、そんな例外なんか問題にしてゐちや駄目だわねえ。」

何か謎めく調子でいつた。
「例外ツて、何ですの？」

「—私、あんな男を見た事がない。」

數枝は、すこし間を隔ててから突然斯ういつた。それは、萬千子に答へるといふよりも、胸にあまつて、思はず獨語にいつたといふ風だつた。

「あんな男？」

「—でも、何だか分りやしないのよ。ほ、ほ！」

「何ですの？」

「私の妖婦も本當にあやしいものよ。私仰有る通り、矢張り（やさしい純情な）女なんだわね。やさしい、純情な、そして、だらしない意氣地無しな—。」

數枝の自嘲的な微笑の中にはひどく物かなしい表情が浮かんでゐた。—數枝は、しばらく沈黙の後に、更に斯うしみくとした調子でいふのであつた。

「私、あの男に逢つてから、何だか急にこの世の中ツてもものが、人間ツてもものが悲しくなつて來たのよ。」

「あの男ツて、誰なんですか？ どういふ人なんですか？」

萬千子が訊いた時、そして數枝がそれに對して何かいはうとした時、老婢がそこへはひつて來て來客を傳へた。

「平井？」

さう問ひ返すと、數枝は急に忌々しげな表情になつて、

「うるさいわねえ。」

六

平井と呼ばれたのは、三十二三か四五位の、ひよろ／＼と瘦せた頹廢的な感じのする男だつた。雑誌記者、シナリ

オライターなどの経歴があり、今は淺草の方の小歌劇の一座に關係したりして別になす事もなくごろ／＼してゐる與太者で、數枝が映畫女優時代に知り合つた人間であつた。薄ッぺらな外套をすりと脱ぎ捨てると、まがひ大島の對に、それでもセルの袴の古びたのをきちりとはいはれてゐた。

「お客さんだね？」

萬千子の方へすばやく動く眼をやりながら、「何人？」と、その眼で問ふやうにした。

「私のお友達よ。でも、あんたなんか紹介してあげられる方ぢやないのよ。」

數枝は、びしやり叩き付けるやうにいつた。

「何いつてるんだ。」

平井は、片眼だけすぼめるやうにして、にやりと笑つて、その長火鉢の傍へ意脚につぐんで、M・C・Cかなどをおきの中に突つ込みながら、

「その後一體どうしたね？」

なれ／＼しく問うた。

「どうしたつて、何の事さ？」

「何の事さ？ はないだらう。僕ア首を長くして結果如何にと待ち構へてゐるんだよ。段取がついたら一刻も早くお邸乗込みと行たいもんだな。」

やゝ憚るやうに、横目でちら／＼と萬千子の方を見やりながら、そんな事をいつた。

「なか／＼、そんな段取には行きさうもないね。」

「どうしてだね？」

「折角書いて貰つた狂言だけどね、今度はさう筋書通りにや行きさうもないよ。」

數枝は、ひどく莫連な調子になつて、空嘯くやうにいつた。

「何故だい？ そりやア——。」

「いやになつたのだよ。」

「いやになつた？」

男の眼は險しく光つた。

「それにね、私の手にやア少し餘るのさ。」

「手に餘るツて？ あのまるで馬鹿見てえな、どうでもまるめ次第にまるまりさうな男が、君の凄腕に餘るんだつて？」

君もこの頃少しやきが廻つたね。」

「すつかりやきが廻つたのよ。」

「本當にまだものにならないのかい？」

「ならないのよ。」

「ホテルへまで引張り込んで——それでもものにならねえなんて。」

「ほ、ほ、やきが廻つた證據よ。」

「とほけちやいけなげ。」

と、男は鋭く數枝のつんとした横顔を凝視るやうにしながら、

「まさか、ミイラ取がミイラになつたツてわけぢやあるまいね？」

「案外、そんな事かも知れないわ。」

「おい、おい！」

と、男は怒氣を含んで、

「冗談ぢやアないぜ、今更、そんな事をいひ出して。——一體——。」

「一體、何なの？」

「俺達を——俺達の方をどうしてくれるんだ。」

「あの運轉手にやお小遣をやつといたわ。ほんのちよつぱりやつたら、尻尾を振つて喜んで歸つたわよ。ほ、ほ。」

數枝は嘲るやうに笑つて、

「あんたもいくらか欲しいんでせう？　ちよつとぐらゐなら私が貰つて上げませうよ。何もそんなに面倒臭いお芝居をしなくたつて、事は済むわよ。」

「ぢやア、君はすつかり馴れ合つちまつたんだな。いけねえ、いけねえ！　君ア又惚れちやつたんだ。悪い癖だよ。」

「惚れやしないけど、しみじみ氣の毒になつたのさ。世の中にや、あんな男性もあるもんだつて事を、私、初めて知つたんだよ。」

數枝の言葉は、又、打嘆くやうな、獨語染た調子の中へ沈んで行つた。

七

「へッ！　のろけてゐるんだな。」

平井といふ男は忌々しさうにつぶやいた。

「のろけでもいへるやうだといふけどね。見事に振られてしまつたのさ。」

「振られたつて——？」

「さうさ。身代りのお役にや立ちさうもないんだよ。」

「……とか、何とかいつて——。」

平井は、數枝の顔をうさんくさうに凝視ながら、

「そんな事をいつて、俺達を出し抜かうてんぢやないのか？　え？　根こそげたらし込んで、首尾よく嫁御寮に納まらうとでもいふ寸法なんぢやないのか？」

「ほ、ほ！　嫁御寮はよかつたわね。」

と數枝は嘲るやうに笑つて、

「もし、そんな事になつたらね、さぞ、お前さんに口留料をいたふられる事だらうね？　何しろ、つもる悪事のかずかずだからね。」

「本當にさういふわけぢやないのか？」

「さうだといふけどね、生憎さうは問屋がおろさないのさ。——私も、あんな男にあつたのは、初めてだよ。もうすつかり思ひ詰めてゐて、擬でも動きやしないんだよ。」

數枝は、また、獨語めいた詠嘆的な調子になつて行きながら、

「戀つて、あんなものか知ら？　命に換へても——といふのはあれだわね。一目逢へりや死んでもいゝ。さういつてぼろ／＼と涙をこぼすんだよ。その逃げたお嫁さんてのが、どんな人か知らないけど、あのくらの思はれりや女も本望だわね。私なんか、誰でもいゝ、あの半分でもいゝから、私を思つてくれる男があつたら、いつだつてその男のために死んでやるわ！」

「へえ？」

平井は、憫れたやうな顔をして、

「いやにまた感心しちやつたもんだな。」

「聽いてるうちにだん／＼氣の毒になつちやつたのさ。可哀さうになつちやつたのさ。」

「それで貫泣きをしちゃつたてえわけか？　へッ！」

と、平井は吐き出すやうに、

「君にも、そんなしをらしい氣持が、ちつたア残つてゐたのかい？」

「それが我ながら不思議なのさ。」

「ふだんの口ほどにもないんだな。」

「まつたくね、おはづかしい話さ。」

「何が何だか——何をいつてるのか一向分らないが——。」

と、平井は、なほも、相手の言葉を信じ兼ねるらしく、穿鑿的な眼で、數枝の顔を見上げるのであつた。

「私、その女の人がうらやましくなつたよ。あのくらの思はれりや本當に死んでもいゝんだけど——。」

又、獨語めく調子になつた。

「いやに弱音は吐くね。」

「弱音ぢやアない。本當なのさ。數枝さんの妖婦も、たうとう尻尾を出しちゃつたんだよ。」

數枝は、再び自ら嘲るやうに笑つた。

「だが、ホテルへくはへ込みまでして——。」

平井は、何かいひかけるのを數枝は激しく叩きつぶすやうにして、

「うるさいね。お前さん、もうお歸りよ。」

「何だつて？」

「お歸りつたら——お小遣ならこの次にあげるよ。」

急にヒステリックに、猛り立つた數枝の様子を、いつもの事と承知してゐると見え、男はその上あらがはうともせ

ず、素直に立ちあがつて、

「へッ！　大變な劍幕だな。兎に角三日のうち又來るとしよう。」

捨臺詞を残して歸つて行つた。

「いやな奴！」

格戸がしまるのも待たないで數枝はかう男の背中へ吐きつけるやうにいつてから、その蒼ざめた顔に、すこして

れたやうな微笑を浮べて、

「どうしたの？　驚いたの？」

と、萬千子にいつた。

八

萬千子は、先刻からの、數枝とその男との會話を、或る好奇心を以て、ちつと聽いてゐた。新しい友達の暗黒面に對する多少の怖を含んだ好奇心を以て——。だが聽いてゐるうちに、次第にその會話の中に、異様に彼女の胸に響くものが感じられはじめた。

——數枝は、どんな手管を以ても誘惑し難い一人の男について語つた。たゞ一筋に一人の女を戀ひわたり思ひつづけてゐる一人の男について語つた。その男は死を以て求めてゐるといふのだ。一人の女を——(逃げた妻)を。

「まあ、どうしたのよ。」

と、數枝は、萬千子の顔に笑ひかけて、

「いろんな事を聞いたんで、私ッて女が怖くなつたとしてもいふの？」

「いゝえ。さうぢやありません。」

「ぢやア、惘れてしまったの？」

「いゝえ。さうぢやア——」

「隠しても駄目！ 何てあさましい事をする女だらうと、きつとあなたは惘れてゐるのよ。」

「さうぢやアないんですの。」

と、萬千子は打ち消して、

「ねえ、今のお話の人、どういふ人なんですの？」

「そんな事訊いて何になさるの？」

「別に何にするつてわけぢやないけど——」

「どうせ、あなたにはもう知られちやつたんだから——」

と前置きして、數枝は、その紳士について語つた。あの無頼漢の平井を相棒に、運轉手におびきださせて、蕩し込んで金にしようとしたその紳士について。

「麴町の方の大きな邸の息子さんですつて。結婚したばかりの戀女房に逃げられて、その逃げたお嫁さんが、どうにも思ひ切れないで夢中になつて探し歩いてゐるんですつて。そこへつけ込んで、前から事情を知つてゐる運轉手が、その探してゐる人に會はしてやるといつておびき出したつてわけなんだけどね。」

「麴町の？」

と、萬千子のせき込んだ問が數枝の言葉を中斷した。

「麴町のどこなんですの？」

「さあ、たしか三番町とかいつてたわ。」

「麴町の三番町？」

萬千子の聲は思はずわなゝいた。

「それで——名前は何ていふんですの？」

「小野寺といふお金持——おやぢさんは、何とか銀行の頭取で、大變なお金持だつて事なの。」

「小野寺！ 矢張り——矢張りさうだつたのね。」

「あらあなたその人知つてるの？」

「あの人、そんなに——そんなに一生懸命に思ひつめてゐるのか知ら？」

萬千子の双眼には、一ぱい涙が溜つてゐた。

「あら、あなた！」

數枝は驚いたやうに、萬千子の顔を見返した。

「さういや、あなた、結婚から逃げたんだつていつてたわね——私、今ですつかり忘れてたわ。」

數枝はまじろぎもせず、しばらくの間萬千子の顔を凝視してゐたが、

「分つたわ。あなただつたの？ あなたが、その（逃げたお嫁さん）だつたのね？」

萬千子は答へなかつた。が、袂を顔に身を顛はして伏し洗んだ。——それが、答以上の答だつた。

「まあ、さうだつたのね？ さういや、あの人、（萬千子さん！）と口に出して呼んだ事もあるやうな氣がするわ。まあ、今までそれに氣がつかなかつたなんて、私、何んてぼんやりだつたでせう。」

數枝が思はず椅子から立ちあがつた。そして、萬千子の肩に手をかけて、むしろヒステリックな叫を以ていつた。

「さあ、行つて逢つてお上げなさい！ 直ぐに行つて逢つて下さい！ あんなに思はれて、それでまだ逃げてゐるよう

ツてのは慘酷だわ！ あんまり——あんまり、あの人のが可哀さうだわ！」

數枝は、萬千子の肩に手を掛けてゆすぶり動かすやうにした。萬千子はゆすぶられるまゝにゆすぶられながら、ちつと眼を閉ぢてゐた。閉ぢた眼の臉を内側から衝きあげて、後から後からと涙が溢れた。

「ね、行つて逢つておあげなさいよ！ あゝして置いたら、あの人、死んでしまふわよ！ ねえ、萬千子さん。」

「……………」

萬千子は、然し答へなかつた。
「どんなに氣に入らない男にしろ、あゝまで思つてるものを、罪だわ！ 可哀さうだわ！ 可哀さう過ぎるわ！」

數枝の眼からも涙がはふり落ちた。

「だつて、逢つたつて——逢つたつて——。」

「私が呼び出すわ。私が呼び出してあげるわ。ホテルへ行つて電話をかければ、あの人、直ぐに来てくれるわ。」

「どう？ あんた、呼んで下さる？」

萬千子はきつと數枝の顔を見据ゑた。

「えゝ。呼んであげますとも。直ぐにでも——これから直ぐにでも——。」

數枝はせき込んでいつた。

「まあ、待つて下さいよ。少し待つて——。」

萬千子はあわてゝとめた。

「いけないの？」

「いけないつてわけぢやありませんけど。」

「ぢや、どうしてなの？」

「だつて、そんなに仰有つたつて、私だつてもつと考へてみなさや——。」

「何を考へるのよ。」

「まあ、もう少し考へさせて下さいな。」

萬千子は、哀願するやうにいつた。——萬千子は、今日逢つた美代子が、何を自分に語つたかを思ひ出した。辰夫！

あの人もまた自分を求めてゐるといふではないか？ あの人もまた、激しい悔と惱との中に、自分を求めてゐるといふのではないか？

「何を考へるのよ！ ねえ、考へてきまる問題ぢやアないぢやアないの？」

と、數枝はいらだゝしく、

「いゝえ、あなたが逢はないつたつて、私、逢はせずには置かないわ！ 私、こゝへ連れて來るわ！」

實際、連れても來兼ねない様子で、數枝はいつた。

「まあ、待つて頂戴よ。」

萬千子は苦しく喘ぎながら、取纏るやうにしていつた。

「私——私、誰にも逢ひたくないのよ。逢ひたく——ないのよ。」

「逢ひたくないの？ どうしても、ぢや逢はないつての？」

數枝は氣色ばんだ。

「だつて、私——私だつて苦しいのよ。ねえ、私だつて——。」

「まあ、あなたはそんなに冷淡な薄情な人なの？」

「何といはれても仕方がないの。私、もう誰にも逢はない。」

「ぢやア、あの人を——あの可哀さうな人を、あんたは見殺しにするつもりなの？ あんたは、それで何とも思はないの？」

萬千子は、せぐり来る涙を唇にかみしめた。

「萬千子さん！ あんたは怖しい人だわ！ 本當に怖しい人だわ！ どんな事情があるのか知らないけど、あんなにまで思はれて——それでも、そんなに平氣になつて——」

「平氣ですつて？」

と、萬千子は、恨めしげに涙の底から數枝を見上げた。

「さうぢやアないの。さうでなけりや——」

「宮田さん！」

と、萬千子は數枝の言葉に押しかぶせるやうにしていつた。

「逢はせて頂戴！ 私、逢ひますわ。逢はせて頂きますわ。」

「ぢや、逢ふのね。」

と數枝の言葉もはずんだ。

「ええ。逢ふわ！ 逢ひたいわ！ 逢はせて頂戴！」

まぼろし

——細い長い廊下が續いてゐる。一人の女が先に立つて案内する。一人の女、それはエブロン姿の女給仕のやうでもあるが、女ではなく男で、ホテルの給仕のやうでもある。案内者は、やがて一つの扉の前に立つ。扉の鍵孔に鍵を突っ込んでカチリとまはして、
(こちらでございます。)

と慇懃にいふ。

はひつて行く。妙に薄暗い部屋である。薄暗い中に、灰白い顔が浮んで、その顔が微笑してゐる。

(萬千子さん！)

さう呼びながら、思はず両手をのばす。両手をのばしてひしとかき抱く。——微笑した顔が振仰ぐ。

(萬千子さん！)

が、次の瞬間、それが萬千子でない外の女である事に氣がつく。

(違ふ！ 違ふ！)

力一ぱい、突き離さうとする。

(ほ、ほ！ 何が違ふんですの？)

女は白い腕を首にまきつける。近々と顔をさしよせる。大きな眼と、眞赤な唇と——牡丹の花のやうな華やかな笑が崩れかゝる。あの女だ！

(まあ、もう少し召上れよ。)

女の手には、盃がある。その盃を無理に自分の唇に押當てる。

(いやだ！ いやだ！)

(ほ、ほ！ たうとう召上つたわね。さあ、私の顔を御覽なさいませ。)

女の顔は、お、いつの間にか萬千子になつてゐる。

(萬千子さん！)

再び、さう叫びながら抱き寄せる。抱きよせた刹那、又、それがあの女の顔になつてしまふ。

(違ふ！ 違ふ！)

突き離す。突き離して見ると、矢張萬千子である。

(萬千子さん！)

と呼びながら、もう一度抱き寄せて見る。矢張違ふ！ が、それを突き離すとまた――。

(あ、萬千子さん！)

同じ順序でそれが果も無く繰返される。五度も七度も、十度も二十度も――。

夢だ！ 俺は今夢を見てゐるのだ――さう一方では分つてゐながら、そしてこんな馬鹿げた夢から早く覺めなければならぬと思ひながら、矢張、次第に加はつて来る焦燥の中で、苦しくその夢を、いや夢ともうつともない幻想を繰返してゐる――。

さういふ啓三郎も枕許で看護つてゐる者の眼には、たゞ、昏々と深い眠に沈んでゐるとしか見えなかつた。

枕許には、母と宮子と看護婦とがゐた。それ／＼の眼で、ぢつと熱の高い病人の水嚢の下に蒼ざめた額や、苦しげな息づかひにあへぐ口許やをうちまもりながら言葉もなくそこに坐つてゐた。

急性肺炎だつた。そして、この病院――駿河臺のN病院の特等室に運ばれて来たのは、昨夜の午後であつた。熱は三十九度幾分になつてゐた。それでなくては、身體がひどく衰弱してゐるところへ、この高熱だから、餘程注意しなければ、醫師も輕からぬ病狀を宣告した。

どこからであつたか、それは母たちには分らなかつたが、最初の電話に呼び出されて出かけて行つた日は、夜おそくなつてから酒氣を帯びて歸つて来た。が、そのあくる日の、二度目の電話に呼び出されて出て行くと、その夜は歸らなかつた。曾てない事なので、みんなひどく心配した。次の日も歸らなかつた。心あたりのあらゆるところへ問ひ合せたりして、漸く大騒ぎにならうとしてゐた三日目の午前、蒼ざめた顔をしてふらりと歸つて来ると、家の者には一言も口を利かず、そのまゝ、部屋に籠つて寢床の上にごつたりと身體を投げつけると、そのまゝもう病人だつた。母夫人はじめ驚きあわて、早速入院の手續をしたが、この病院へ運ばれて来た事をさへ、運ばれて来てから初めて氣がついたほど、それほど高熱の病人だつた。

二

息をつめるやうにして、啓三郎の寝顔を打ちまもつてゐた母の照子夫人は、ふと、啓三郎の唇から漏れる不明瞭な單語に、耳をさし寄せるやうにした。

「萬千子さん！――萬千子さん！」

さう聞きとれた。

まあ！――といふ顔付を宮子の方へ向けると、嘲の笑を一ぱいに含んだ、大きく見ひらかれた宮子の眼が待ち構へてゐた。

「萬千子さん！ 萬千子さん！」

啓三郎の聲は、次第に高まつて行つた。蒲團の下で身悶をした――。

「啓三郎！ 啓三郎！」

と、母は屈みかゝつて呼んだ。啓三郎は、眼を開いた。

「どうしたんだえ？ 啓三郎。」

「あ！」

母の顔を認めたらしく、啓三郎はぼけた視線を一點に集めるやうにしたが、直ぐ又眼を閉じた。――彼は再び、その夢ともうつともない幻影の世界へと引き入れられて行つた。

「伯母様。」

小聲で宮子がいつた。

（何？）と、母夫人は眼で問ひ返したが、宮子は何もいはなかつた。宮子の顔には、露骨に嘲を帯びた微笑がたゞよつてゐた。

その時、もう一人の看護婦が、そこへはひつて来た。

「あの、お邸からお電話でございます。」

看護婦がつげた。

「お電話？」

「は。お女中さんらしいお聲でございました。奥様でもお嬢様でも、一寸電話口まで、出ていたゞきたいと仰有います。」

「何だらうね？」

照子夫人は心配さうに首を傾けたが、

「宮子さん、聴いておくれ。」

宮子が出て行つた。

しばらくして宮子は戻つて来た。

「伯母様。ちよいと――。」

宮子は控の間の方へ照子夫人を呼び出して、

「妙な電話がかゝつて来たんですつて。」

「妙な電話？」

「ええ。――啓さんにかゝつて来たんですつて。」

「啓三郎に？」

「それでね、時やが、若旦那様は御病氣で入院なさいましたと返事をしたんですつて。」

「一體それは誰からのさ？」

「それが、誰だか分らないんですつて。名をいはないんですつて。名をいはないで、若い女の聲なんですつて。」

「若い――女の？」

「ええ。それでね、啓さんが病氣で入院したと返事をする、どこの病院かツて訊くんですつて。それで、時やが、こゝだつて事教へてやつてもいゝか問ひ合せて来たんですつて。」

宮子は、さう話すうちに、妙な皮肉らしい微笑を浮べ續けてゐた。

「それで、お前、どう返事したの？」

「いはない方がいゝ――さういつてやりましたわ。だつて、どなた様ですつて何度訊いても名をいはないつてんですもの。そんな、名をいはない者になんか、教へてやる必要はないぢやありませんか？」

「それはさうですとも。」

と、照子夫人もうなづいたが、

「だけど、一體、誰だらうね？」

不安さうにいつた。

「伯母様。」

すこし間を置いてから、宮子がいつた。

「啓さんには、きつと、何か悪い女がついてゐるのよ。」

「え？」

「何か悪い女にひつかまつてゐるんだと私思ふわ。だつて、變ですもの。一晩も二晩も家をあけたりして。」

「さうだね。」

「その女からの呼び出しだと私思ふわ。」

さう宮子はいつた。

三

物感しげな照子夫人の顔を、一寸の間黙つて凝視してゐたが、
「伯母様。」

と宮子は呼びかけて、

「啓さん、しきりに讒語をいつてらつしやるわねえ。」

「——熱が高いものだからね。」

「あの女に會つてるんぢやアないんでせうか？」

「あの女？」

「萬千子。」

「そんな事はないだらう？——で、お前、今のその電話、あの女からだともお思ひなのかえ？」

「私、何だかそんな氣がするのよ。氣がするだけの事だけ。」

「だつて、お前、會つてるものなら——。」

「伯母様。もし、あの女だつたら、伯母様、どうなすつて？」

「どうするつて？」

「會はせてお上げになる？」

「それは——。」

照子夫人は苦しげに口籠つたが、

「でも、そんな事はない筈だよ。あゝして逃げて行つたものを——お前。」

「さうとは限らないわ。あの女も、この頃ぢやア、随分したゝか者になつてゐるツて事よ。」

（あの女）——さういふいひ方にも、極度の輕蔑が籠つてゐた。

「お前、知つてるのかえ？ どうしてゐるんだらうねえ。」

「ダンス・ホールへ出てゐるんですツて。ダンサーになつてゐるんですツて。」

「ダンサー？」

照子夫人は驚の眼を瞠つた。
「えゝ。——思ひ切つたもんだわね。」

宮子の口許には冷笑が浮んだ。

「ダンサーなんて、お前、堅い商賣ぢやないんだらう？」

「もちろんよ。ダンサーなんて、まあ大抵淫賣見たいなものだわ。」

「まあ！ いやだねえ。」

照子夫人は眉を押しひそめた。

「あの女、とてもすごいんですつて。——私二三日前、女学校時分のお友達に逢つたんですの。結城さんて人なんがけど、あの女とはとても親友だつた人ですの。その人に逢つて、あの女の噂をいろいろ聞いて、私、もうびつくりしちゃつたわ。」

「どんな噂なんだえ？」

「結城さんて人の戀人をとつちやつたんですつて。大事の大事の戀人をね、一寸の間に、すつかり誘惑しちゃつたんですつて。それもいゝけど、又、すぐに捨てちやつたんですつて。捨てられたその男の人、今ちやもう自棄になつて手のつけやうのない不良になつちまつたんですつて。」

「まあ、そんな——そんな女だつたのかねえ。」

と、照子夫人は嘆息して、

「怖い女だねえ。あの女のお蔭で、啓三郎も滅茶苦茶にされちまつたんだよ。」

「それにねえ。」

と、宮子は更にいつた。彼女の舌は、まだ戦ぎ足りなかつた。

「あの女の弟ね。十七八の、弟が一人あつたでせう。その弟もとても不良なんですつて。何か悪い事をして、今、監獄に入れられてるつて事ですの。」

地獄耳の宮子は、いつの間にかそんな事まで知つてゐた。

「まあ、監獄へ？」

照子夫人は惘れかへつて口も利けぬといふ表情をした。

——二人が、そんな話を囁き合つてゐる間、啓三郎は昏々と眠りつゞけてゐた。

そして、高熱に浮ぶ夢の中で、うつゝよりも濃い幻影を、昏まされた意識の底に、はつきりと眼ざめた魂の眼で眺めつゞけてゐた。

——彼はごうくと音を立てゝ走る汽車の中にあつた。萬千子と肩を並べて坐つてゐた。萬千子は、つんとすました横顔を見せて、何をいひかけても返事をしない。

「萬千子さん！」

幾度目かの呼びかけに、萬千子はたうとうこつちを向いた。そして、かつて見せた事のない親愛の表情で、自分に笑ひかけた。彼は喜に躍る心で呼んだ。

「萬千子さん！——萬千子さん！」

死を越えて

—

「しつかりしなきや駄目よ。だらしなく泣いてたりなんかしちや——」
數枝は、萬千子の肩に手をかけて、その顔を覗き込みながらいつた。——二人を乗せた自動車は、霞立つた秋の夜を、全速力で走りつゝあつた。

「あら、泣いちやあないわ。でも——」

と、萬千子は涙に光る眼で數枝を見上げた、

「本當に、逢はしてくれませんか？」

「逢はしてくれぬ。くれないもないわ。逢はなきやならないのよ。」

「でも、私、何だか——」

「今更、氣運なんかしちや駄目よ。本當にそんな場合ぢやないんだから。大變悪いんださうだから——一刻を争ふつて時なんだから——」

「そんなに——そんなにわるいんでせうか？」

「四十度近い熱がもう五日も續いてゐるんださうよ。そして、あなたの名を讒語で呼び續けてゐるんだつて——」

「まあ！ 宮田さん、私、どうしませう！」

萬千子は思はず數枝に取り纏るやうにした。
「どうもかうもないのよ。早く——早く行つて會つてあげるのよ。」

數枝はむしろ叱咤するやうにいつた。

小野寺の邸に電話をかける時、啓三郎は病氣で入院したといふ。どこの病院かと訊くと、そちらのお名前を仰有つて下さらなければ申し上げられませんといふ。幾度電話をかけても同じ返事であつた。數枝はたうとう自分で小野寺邸まで出掛けて行つたが、それはより悪い結果を來した。が、入院中といふのが嘘でなく、しかも思ひの外の大患だといふ事がそれで分り、よし、病院へ行つても、面會謝絶だといふ事であつた。面會謝絶——しかし、こちらは普通の面會人ではないのだ。數枝は一切を手紙に認め、それを啓三郎の母に届けて呉れるやうにと、再び訪ねて留守の者に託した。その返事が、先刻、病院の照子夫人から來た。直ぐに來て呉れといふのだつた。
自動車は、柳町から、右折して市ヶ谷の方へ出ようとしてゐた。が、その曲り角にもう少しの處で、ぱたりと停まつてしまつた。

「どうしたの？」

數枝が叫んだ。

「すみません。ちよつと——」

と運轉手が飛び降りた。

「あら、パンクなの？」

「いえ。パンクぢやございません。直ぐ直ります。」

「急ぐつてのに、仕方がないのねえ。」

數枝はじれくといつた。

「すみません。なに、一寸ですから——」

運轉手は、車體の後部の方へ廻つて行つた。

「いやだわねえ。本當に——。」
氣が急ぐばかりではなかつた。たとひ一寸の故障にせよ、この場合何か凶兆のやうに思はれて、不安は一層募るばかりであつた。

その停留所に折から一臺の電車が来て停まつた。五六人の乗客が降りた。その中の一人が、ふと、立往生してゐる自動車の窓の中の淡い灯の影に浮んだ横顔に眼を止めた。眼を止めると、はッとして立ちすくんだ。黒い中折を肩深に、黒い外套を着た長身の男——それは石田辰夫であつた。

辰夫は一週間ばかり宿をあけて今朝歸つた。留守中に、美代子が何度も訪ねて來たと聞いて不思議に思つてゐるところへ、美代子は先刻またやつて來た。美代子は、萬千子に逢つた事を語り、萬千子のゐる處を辰夫に教へた。

「でも、そんな事教はつても、今更仕方がないな。」

と、辰夫が、胸騒を隠してさりげなく微笑して見せると、美代子は弓脛の眉を、びんと一筋に張るやうにして鋭くいつた。

「石田さん！ なぜもつと正直にならないの？」

「正直に？」

「さうよ。あなたは不正直でなきや、卑怯よ！」

辰夫は美代子の言葉の前にたんと然として恥ねばならなかつた。

二

かうして辰夫は、美代子に教へられた萬千子の家を訪ねたのだつた。

——彼は心から昨の非を悔いてゐた。彼は戀を思想に従はせようとした。もう一つの情熱の前に、戀の情熱を犠牲

にする事も、さうむづかしいとは思はなかつた。新しいイデオロギイの把握のためには、舊い戀は捨てらるべきである。かくて彼は萬千子を斥けた。萬千子を斥けて美代子についた。彼は、カール・マルクスの思想と共に、そのプロレタリア娘の美代子を掻き抱いた。

だが、美代子は彼の愛の虚偽を知るや、彼の腕からすべり脱けて行つた。そして、彼は思想を凌ぎイズムを凌いで、すでに葬り去つたつもりで舊き戀が、根強い成長を續けてゐることを、そこに發見した。——さうだ。これは正に一つの發見といふべきであつた。

しかも、思へ！ 萬千子もまた、未だ自分を忘れずにゐる。——想ひつゞけてゐるといふではないか？

辰夫は、あらゆる思想も、イズムも、その一つの戀に較べれば皆付焼刃でしかない事を感じた。社會改造、勞働運動——それ等の言葉も、今は空虚なものにしか響かなかつた。身をその陣營に、その壯んな喊聲の裡に置きながら、辰夫は、捨て來たブルジョア娘の面影を、一人ひそかに戀ひ求めてゐた。

さうだ。啓三郎がさうであるやうに、又かつて萬千子がさうであつたやうに、辰夫もまた、一個の悲しき彷徨者だつた。辰夫もまた、夢遊病者の足取で、街にまぼろしを追ふ彷徨者だつた。

いろ／＼の噂は聞いた。職業婦人になつてゐるとか、人の妾になつてゐるとか、暗に媚をひさぐ、卑しい女たちの群にはひつてゐるとか、それ等の噂は皆彼の胸を引裂くやうなものばかりであつた。が、彼は思つた。みんな自分の責任だ。よし、彼女がどんな墮落のどん底におちてゐようとも——いや、若しさうであるならば、それゆゑにこそ、一層彼女を愛しなければならぬのだと。

そこへ美代子が、彼女の住所を教へてくれたのだつた。辰夫は、直ぐに訪ねた。が、その家は戸がしめきつてあつて、何人もゐなかつた。近所で訊いて見ると、もう少し前に出掛けたといふのであつた。

それで、不本意ながら、一先づ引返して、辨天町の宿に歸る可く、そこで電車を降りた今、辰夫ははしなくも、車

上の萬千子を見つけたのであつた。

辰夫は、われを忘れてつか／＼と進み寄つた。その、車窓に透けて見える横顔に火箭のやうな視線をそそぎながら、五歩、三歩。――しかしまだ萬千子は氣がつかない。辰夫は、車窓にすれ／＼になるまで歩み寄つた。そして、「萬千子さん！」

と呼びかけた言葉、突然鳴り出した自動車の警笛が掻き消した。そして、自動車が、ガソリンのほひをばつと浴びせかけて走り出してしまつた。

辰夫は、思はず二三歩そのあとを追ひかけるやうにした。が、そこへ走つて來たもう一臺の自動車が彼の前を遮つた。萬千子をのせた自動車は、外のとまぎれて、どれがどれだか分らなくなつてしまつた。

ほんやりと立つてゐる辰夫の後から、

「おい、石田君。」

と呼びかける聲がした。見ると、辰夫の屬してゐる無産××黨の幹部で、争議部長をしてゐる大川だつた。大川のあとには職工風の二三人がゐた。

「や。」

と、辰夫は狼狽の色を隠しあへなかつた。

「どうしたんだ？」

丸々と肥つた白哲の童顔に、鬚のそりあとを青々と目立たせた大川は、口に一寸皮肉な表情を浮べながらいつた。「今、君のところへ行つたんだ。寝てばかりゐるぢやないか？ 今度は君にも少し働いてもらはなかつちやア――」

大川はきびしい眼で辰夫を見た。品川の方の或る大きな電氣機械製作會社に、かなり大規模な争議が起りつゝある

のであつた。

三

啓三郎の病勢は、刻一刻とすゝみつゝあつた。見舞客は後から／＼と詰めかけて來たが、皆面會謝絶だつた。啓三郎の父の、小野寺謙三氏も、さつきからむづかしい顔をして、枕許の椅子にかけてゐた。謙三氏は、もう六十

を二つ三つ越してゐたが、がつしりとした身體には、壯齡期をそのまゝの精力が張り満ちてゐた。大銀行の主宰者としての外、いくつもの會社に關係して實業界にその鐵腕をうたはれてゐる彼は、廣い額、角張つた頤、見るからに精悍な風采をしてゐた。が今かうして一人の息子を瀕死の床に眺めてはさすがに鐵石の心腸もうたゝ痛に堪へぬといふ風に見えた。

「駄目かな？」

謙三は傍にゐる照子夫人をかへりみてから、小聲でいつた。

「持ち直してくれるとよろしうございますが、今が峠らしいでございます。」

照子夫人は潤んだ眼で、夫の眼を見迎へた。一人子に置いて行かれようとする親と親との、互に相憐れむ氣持が隣

間二つの眼から二つの眼へ流れ交はうた。

「注射を致しますのを、ひどくいやがるのでございます。何しろ、自分からよくならうといふだけの元氣がございま

せんで――」

照子夫人はいつた。

「妙な諭言をいふさうぢやアないか？」

謙三は、苦笑に似た表情で、病人の顔と妻の顔とを交る／＼見た。

「宮子が申しましたんでございますか？」

「うむ。宮子から聞いた。——困つたやつだ！」

謙三は嘆息した。

「本當に、何といふ事でございますか。」

照子夫人も共に嘆息したが、

「しかし、考へて見ると、可哀さうな氣も致すのでございます。それほど思ひつめてをりましたものならば、何とか外に致し方もあつたと思ふのでございますが——。」

「いや、愚なやつだ！」

謙三は、低く抑へた聲で吐き出すやうにいつた。

「たかゞ一人の女のために——それも、自分を捨て、逃げて行つた不貞の女のために、魂を奪はれた果が、かうして生命までなくするのだ。」

「本當に、こんなになりましたのも、みんなあの女のためでございます。」

「たかゞ一婦人のために——なさけないやつだ！」

謙三は忌々しげに呟いた。

不肖の子とは初めから分つてゐた。啓三郎は、あまりにも父に似ぬ子であつた。生れるときから身體が弱々しく、七つの時に、ふとした過失で高い處から落ちて、片脚と共に頭を傷つけて以來、頭能の力もにぶつて、學校での成績もよくなかつた。どうにか、私立大學の卒業證書はもらへたが、それも富豪小野寺氏の金で買ったも同然で、社會に立つて物の役に立つ人間でない事は、親の目に一番はつきりと分つてゐた。謙三は、だから、この總領息子をうとんずるともなくうとんじてゐた。そして、啓三郎は駄目だ！だが健介の方は——と、のぞみを囁してゐた。だが

自分の事業と野心との繼承者として期待してゐたその次男が中學卒業間際に、小田原の海で溺死してからは、いやでも啓三郎を小野寺家の後繼とする外はなくなつた。

謙三は、これを小野寺家の最大な不幸と感じた。だが、そこは流石に血を分けた親の愛情だつた。大學を出ても、別段なすことも無く、のらくらと暮してゐる啓三郎を、寧ろ目障りなものに思ひながらも、出来るだけそのわがまをかなへてやらうとした。物質的の多大の犠牲を覺悟して、榎村氏の令嬢を、その妻にと申し受けたのもさうした親の慈悲なのだつた。

だが、その結婚の、實に奇怪なかたちにおいての破綻。それから、啓三郎の、實に腑甲斐無さの限りを見せた情痴の姿。——謙三にとつてこのくらゐ、なさけなく、忌々しく、苦々しい事はないのであつた。

「馬鹿者め！ たはけ者め！ 恥といふものを知らんか？ 男性の恥を。」

四

小野寺謙三氏にいはせれば、大體戀だの愛だのといふ問題に憂き身をやつすくらゐくだらないことはないのだ。男一匹が、戀だの愛だの、その擧句が病氣になつて、謔言に女の名を呼ぶなどは、言語道斷、何といふ醜態だらう？

男性には男性の事業があるのだ。男性の住むべきは、功名の世界、野心の世界でなければならぬ。

「俺は、腕一本でこゝまでたゞきあげたのだ！」と、小野寺氏は折に觸れては傲語するのだが、その通り、貧賤から身を起し、艱苦を肩して今日を築きあげた小野寺氏は、徹頭徹尾、努力の人であり、同時に力の信者だつた。權力だ！ 權力が黄金を生み、黄金がすべてを解決するのだ。女だつてさうだ。その髪の長い美しい動物は、黄金の前になら、いつだつて服従し拜跪するのだ。——あの榎村の娘がさうでなかつたといふのか？ それならば外にもつと上

等な女にしろ、買ふつもりなら、いくらも買へる筈ではないか？

啓三郎が、さう逞しい働き手でないまでも、せめて一人前の男性らしい男性で、自分の片腕とは行かないまでも、せめて身近の協力者であつて呉れたらと、いつも小野寺氏は思つたものだ。今や財界は空前の不況で、手廣くひろげてゐる各方面の事業の、どれ一つとして順調に行つてゐるものもない時、小野寺氏の英邁と練達とを以てしても、懺たる苦心に夜の眼も合はぬ事すらある。それなのに、一人息子の啓三郎は、父の苦心をよそにかうした下らない戀愛三昧に、その身をさへ滅さうとしつゝあるのだ。

「あはれな奴だ！」

と思ふ一方に、

「馬鹿な奴だ！ 腑甲斐のない奴だ！」

と思ふくもあり、

「親不孝な奴だ！」

と、腹立たしくもある。——いや、この場合、小野寺氏の心に最も強く動いてゐるのは、その腹立たしさだつた。あまりにも不肖な子に對してのふすぼるやうな憤だつた。

小野寺氏は、太い毛深い腕を胸高に組んで、

「うむむ。」

と、呻くやうに、もう一度嘆息した。

「あなた。」

と、照子夫人がさゝやいた。

「何だ？」

「私、少しお話がございませうのですが、あちらへいらしていただけませんでせうか？」
照子夫人は遠慮ツぽくいつた。

「何だ？」

小野寺氏は不機嫌さうにつぶやきながら、夫人のあとについて次の控へ室へはひつて行つた。

「あの——。」

と夫人は、小野寺氏の耳許に唇をさしよせるやうにして、やゝしばらくの間ぼそくと囁きつづけた。

「ふうむ。」

と、一通り聴き終ると、小野寺氏は太い眉をびりりと動かして、

「ぢや、啓三郎は、あの女と會つてゐたのだな？」

「さうぢやアないかと思はれるのでございます。病氣になります前に、一度ならずどこからか呼び出しがかゝつて出てまゐつたのでございますが、どうも、あの女からぢやアないかと宮子などは申してをります。あの女の友達だつて申します女の手紙にはさうではないらしく書いてございますが——。」

「うむ。それでこゝへ來さして呉れといふのだな？」

「はい、是非見舞はして呉れと申しますので。どういふつもりで申すのか知れませんが、啓三郎があゝして讒言に名を呼んだりまで致してをりますので。」

「いや、それは構はんだらうがね——。」

「何分、世間の口も煩さうございますし、一應あなたに御相談申上げてからと思ひましたんでございますけど。」

「啓三郎に呼び出しをかけたらしいといふのは、つまり金でも欲しくなつたのかな？」

「さうかも知れないと思ふのでございます。ダンサーとかになつて、すっかり身を持崩してゐるんださうでございま

す。

「ふむ。」

と、小野寺氏は一寸考へ込むやうにしたが、

「金がほしいといふなら、金をやつてもいい。啓三郎が、丈夫になつたら、もう一度、改めてあの女を買ひとつてやつてもいいさ。今度は、ちやア、あの女自身で賣り込みに来たといふわけだな。は、は。」

と、聲を殺して小野寺氏は笑つた。

五

「まあ！」

照子夫人は苦々しげに夫の顔を見て、

「いえ。啓三郎は、多分もう駄目でございます。これも、みんなあの女のためでございます。さんく焦らして置いて——本當に、何といふひどい女なのでございませう？」

「いや、彼奴が馬鹿なのだ。」

小野寺氏は吐き出すやうにいつたが、兵児帯の間から時計を出して見て、

「俺は、これから出掛けにやならん。」

「まあ、どちらへでございます。」

「俺は、今、身體が二つあつても足りないほど忙しいのだ。」

「でも、啓三郎は今夜あたりが峠だといふことでございます。」

忙しいのは分つてゐるが、一人の息子を、瀕死の病床に見捨て、出て行かうとする夫の氣強さが、夫人には恨めし

かつた。

「品川の工場で、職工共がごたつき初めたんだ。七時から重役會議があるのだ。是非顔出しせにやならんのだ。」

涙ッぽい妻の顔を、冷やかに見返しながら、小野寺氏はせかくといつた。

「まあ、さうでございませうか？」

夫人は弱々しく見上げて、

「ですが、お留守の間に、啓三郎が若しや——」

いひかけた妻の言葉に、小野寺氏は激しく首を振つて見せた。

「馬鹿者が、死なうと生きようと、そんな事にや構つてをられん！」

——いつてしまつてから、少し慘酷過ぎる言葉だと思つた。が、

「まあ！」

と、睨つた妻の眼が、涙の底からなじつてゐるのを見ると、一層反抗的な氣持になり、小野寺氏は荒々しく繰返した。

「そんな事にや構つてをられん！——大分、おくれた。俺は出掛けるぞ。」

流石に、一寸病室へ戻つて啓三郎の寝顔をのぞいて見たが、ついとドアを出ると、小野寺氏は、そのまま後をもみず、長い廊下を玄關の方へ歩いて行つた。

小野寺氏は待たせてあつた自動車へ、大きな身體を運び入れた。そして、クッションの上にふんぞり返ると、太い葉巻を啣へた。自動車は丸ノ内の倶楽部へ向つて走り出した。

小野寺氏は、氣持を落ちつけるために、ゆつくりと葉巻の煙を吐いた。そして、小野寺氏は、強ひてその考を、これから倶楽部で開かれる筈の、重役會議の方へ向けた。十日程前から

品川の工場の、五百人近い職工との間に持ち上つてゐる争議——この不景氣の最中に、職工側でも多大の犠牲を覚悟の上に、敢て火蓋を切つたらしいだけに、今度の争議には、一種異常な深刻性が帯びてゐる。無産××黨の闘士たちも、こぞつて應援してゐるといふのだから、なか／＼手剛く當つて来るだらう。小野寺氏は、その眼の前に、眞黒な波となつて湧き立つ職工共の大群を見た。幾千百の血ばしつた眼、幾千百の蒼ざめた顔、そして、口々に叫び立て、喚き立てるところの、怒濤のやうな聲々を、小野寺氏はその耳朶に感じた。が、小野寺氏はそれ等の幻影に對して、その幅廣の肩をゆすりあげ、葉巻を啣へたへの字なりの口尻に、傲慢な微笑を湛へた。

小野寺氏は二年ばかり前、もう一つの工場のストライキを、いかに痛快に叩きつぶしたかを思ひ返したのであつた。そして、一種、陣に臨む將軍に似た傲と驕とを、その胸に感じた。われながら驚かれるほどの旺盛な闘志と征服慾とが、その肥満した身體に火となつて燃え上るのを感じた。

しかし、自動車が濠洲の道に出た頃は、小野寺氏の眼は別の幻影を見てゐた。あの啓三郎の憔悴し果てた、すでに死相を漂はした顔を見てゐた。

彼は、それを振拂ふために強く頭を振つた。が、その幻影は振拂つても、胸の底に口を開いた或空虚感をどうする事も出来なかつた。

「あいつは死ぬ。あいつの外に俺の子供はないのだ。あいつが死んだら、俺は——俺は、何のために——」
彼は再び強く頭を振つた。そして、そんな無用な考を振拂つて、もう一度、その旺盛な闘志と征服慾とを呼び起さうとするのであつた。

六

小野寺氏の自動車は病院の門を走り出すと間もなく、萬千子達の自動車も、その門の前で停められた。數枝が先に降りた。つゞいて萬千子がよろめくやうにドアから出た。黒いコート、黒いシヨール、頬の色が蒼白く洗んで、うるんだ眼を、思ひ極めた一點にちつと凝らしながらも、なほ、心の亂れを統べあへぬといふ様子に見えた。

「しつかりするのよ。」
數枝は、萬千子の肩へ手をかけるやうにして、

「私、ぢやアこゝから歸るから——」
「ありがたう。」

と、萬千子はうなづいた。

萬千子は、數枝の眼に見送られながら門をはひつた。

受付へ行つて案内を請ひ、事務員に導かれて、長い廊下を歩いて行きながら、萬千子は、一步毎に興じて来る胸騒ぎをおさへ兼ねた。萬感一時に集まるとでもいふより外いひやうのない氣持だつた。

かうしてあの人に會ひに行く。あんな風にして振捨てた男に會ひに行く。
(恥知らず！)

とさ／＼やく聲を彼女は耳許に聞いた。彼女の歩ははたとつかへた。

だが、あの人は死にかけてゐる。死の床から自分を呼んでゐるといふではないか？ さう思ふとはたとつかへた歩が、又、火の付くやうな焦燥にかり立てられて来る。

數枝に啓三郎の事を聴かされた時、萬千子はひどく感動した。がその時は未だ、その感動に、全身を委ねきれぬ何もものかゞそこにあつた。しかし、會はうとして會へなかつたこの四五日の間に、刻々に募つて来た思慕の情が、彼女自身にもかほどまでとは思ひ掛けなかつたほどの激しさで、やるせなく彼女の胸に興じて来たのであつた。——實際

さうして急ぎ足で廊下を歩いて行く萬千子の心は、長い間求め尋ねてゐた戀人に、やうやく巡りあふ事が出来た者のそれにも似た心であつた。

廊下の中途まで歩いて来た時、萬千子はむかうから歩いて来た宮子とばつたり逢つた。

「あら！」

小さく叫んで宮子は立ちどまつた。萬千子も立ちどまつた。四つの眼が瞬間ぶつかつた。

「いらしつたのね。」

宮子はさういつて口許だけで笑つた。ぢつと凝視した眼には、冷たい嘲りに似た表情があつた。

萬千子は、思はずぱつと赤くなり、一禮して、そのまゝ眼を足許に釘付けにしてしまつた。

「よく、いらしつて下さいました。」

と、宮子はわざとらしい慇懃さでいつた。

「さあ、お待兼ねですから、どうぞ。」

萬千子は何といつて返事をしていゝか分らなかつた。萬千子は黙つたまゝ、宮子の後について歩いて行つた。

「あの——ひどくお悪いんでございますの？」

病室の前に来て立ちどまつた時、萬千子は辛うじてかう訊いた。

「えゝ。いけないんですの。」

宮子は硬い表情のまゝで、かう答へたが、

「ちよつと、待つていらしつて下さいな。」

さういふと、自分だけが先にはひつて、萬千子の鼻先でばたんとドアを締めきつた。内からドアがあげられたのは、やゝしばらく経つてからだつた。

「さあ、どうぞ。」

「は。」

ドアの間隙から明るい室内の一部が眼に映ると、萬千子は今更に重い躊躇を感じた。

「おはいんなさいました。」

萬千子は一步踏み入れた。看護婦が萬千子の横をすりぬけるやうにして出て行つた。

病室の内には、枕許に立つてゐる照子夫人の外には何人もゐなかつた。枕許に立つてゐる照子夫人は、眼をあげて萬千子を見た。上から見くだすやうな、けはしい、きびしい眼付だつた。

その眼付がもう一度萬千子を躊躇させた。

「さあ、どうぞ。」

後へ廻つた宮子が一寸萬千子の背に手をかけるやうにした。押しやる、といふよりもむしろ突きやるといふやうな荒々しさを、邪慳さを、萬千子は宮子のその手に感じた。

七

萬千子は、よろめく足を踏みしめるやうにして、入口から三四歩の處に立ちどまつた。そして、夫人の方へ一禮すると、そのまゝ身體を石にして立ちすくんだ。

夫人は、そのきびしい、けはしい眼付で、しばらくの間萬千子の姿を見上げ見下すやうにしてゐるが、

「どうぞ、こちらへ。」
にこりとみせず、靜かに冷やかにいつた。萬千子は、思ひ定めて進んで行つた。
「こんな愚な者を子供に持つた親の心をお察し願ひます。」

夫人はいつた。

「すみません。」

萬千子は口の中であいつた。

「いえ。私の方こそ——でも、よくいらして下さいました。」

照子夫人は假面のやうに硬ばつた顔に、たゞ眼だけをきらめかしていつた。

「伯母様！」

宮子は夫人のそばに進み寄つて、

「私達、居ない方がいゝのよ。あつちへ行つてゐませうよ。」

夫人のたもとへ手をかけて、萬千子を尻目にかけながらいつた。

「さうだね。」

「あなた。」

と、宮子は萬千子に呼びかけて、

「早くそのお顔を見せて上げて下さいました。でも、もうむづかしい病人なんだから、あまりいろんな事いっておい

ぢめなさらないでね。さあ、伯母様、私達、一寸あつちへ行つてませう。」

夫人は、病人の顔と萬千子の顔とを見くらべるやうにして、心もとなげな表情をしたが、宮子に引つ張られて次の

間へ出て行つた。

萬千子は静かに歩み寄つた。

重忠とは聞いてゐたが、これほどまでとは思はなかつた。その病人の様子を一目見たばかりで、萬千子は胸が潰れる思がした。

萬千子は、そこに、蒼ざめやつれて、すつかり相變りをしてしまつた啓三郎の顔を見た。きざみ深く骨立つた隈々に鉛色の陰影を這はせて、苦しげに喘いでゐる啓三郎の顔を見た。彼女はぢつとその顔を見た。この人が自分に對してどんなに優しく、どんなに忠實であつたか？ さまじくの記憶が一時に彼女に蘇つて來た。世にも稀なこの人の愛の前にどんなに不遜な、どんなに不貞な自分であつたか？ 自責の念がひしくと彼女の心臓を締めつけて來た。彼女は両手で顔を押しへた。同時に、しんを抜かれたやうに崩折れて、べたりと床に膝を突くと、寢臺の縁に顔をすりつけて、胸を破つてほどばしる慟哭の聲を、からうじてハンケチの端にかみしめた。

啓三郎は、眼を開いた。——ぼんやりとした眼で、きよとくとあたりをかき探るやうにした。泥沼のやうな眠の底から、苦しい喘と共に眼覺めた彼の意識は、しかし、未だ半ば夢の中のものだつた。

「あ——あ——。」

低くかすれた喉音が、わななく唇から漏れた。

萬千子は顔をあげた。そして、その仰向けの啓三郎の顔の上に、ぴたりと自分の顔をさしよせるやうにして、

「私ですよ。お分りになりましたか？」

高くほどばしらうとする聲音を低く抑へていつた。

「あ、萬千子さん！」

「お分りになりましたか？」

「萬千子さん！」

もう一度繰返して、啓三郎はぢつと、萬千子の顔を見た。未だ、夢のつゞきをでも見るやうな、弱々しい眼付だつた。

「萬千子さん！」

と、更にもう一度繰返したが、その言葉も論言めいた調子でうはずつてゐた。

「萬千子でございませう。——お分りになりましたか？」

啓三郎の眼は、落ちくぼんだためくぼ一ぱいに見ひらかれた。啓三郎は渾身の力を、その眼に集めて、ちつと萬千子の顔を凝視した。

その息づまるやうな凝視が、二十秒ばかりの間つゞけられた。

八

啓三郎は、ちつと萬千子の顔を凝視した。その眸の底から、霧を破つて輝き出す日の光のやうに、いき／＼とした色が動きはじめた。——夢でもなくまぼろしでもなく、そこにゐるのが正しく現身の萬千子であることを認めた時、啓三郎の病みやつれた顔には、衝き動かされたやうな驚につゞいてぱつと、激しい悦の表情が躍つた。

「萬千子さん！」

三度、かう呼んだ時、その聲はもう譚言の調子ではなかつた。

「僕は——僕は——」

低くかすれてはゐるが、たしかに意識を取戻した者の調子で啓三郎はいつた。

「あなたに——會ひたかつたんです。探してゐたんです。」

「済みません。済みません。」

萬千子はハンケチで顔の半を掩ひながら、わな／＼聲で繰返した。

「顔を——顔を見せて下さい。」

啓三郎は叫ぶやうにいつた。そして、毛布の下から手を出して、ハンケチを萬千子の顔からむしりとらうとした。

「お許し下さいませ。本當に私が悪かつたんでございます。」

「悪——悪かつた？」

微笑に似たものが、啓三郎の口許をかすめた。

「ええ。本當に私悪かつたんでございます。何とお詫申し上げていゝか分らないのでございます。お許し下さいませ。お許し——」

萬千子は、滿眼の涙を以て啓三郎を打ちまもりながら、せまり来る嗚咽と共に語尾をかみ殺した。

「それで——それで。」

啓三郎は、喜悅に眸を躍らしながら、

「あなたは——僕に會ひに来て呉れたんですね。僕は——感謝します。うれしいです！——僕はもうあなたに會へな

いかと——思つてゐたのです。」

苦しい息の中で、啓三郎の言葉はとぎれ／＼だつた。が、ちつと萬千子の顔を見あげた啓三郎の眼は、まじろぎも

しなかつた。その全心を、全靈を打ちこめた深く凝視——それは母にすぎない幼児の眼だつた。神の示現を仰ぐ狂

信者の眼でもあつた。愛慕と憧憬との限を籠めた深く凝視だつた。

「うれしいです。——僕は、うれしいのです。」

啓三郎は、もう一度繰返したが身悶えするやうに、毛布の下四肢を動かしはじめた。そして、顔や胸に當てゝあ

つた氷霰を振落さうとあせつた。——啓三郎は起き上らうとするのであつた。

「あら！」

と、萬千子はあわてゝとめた。

「そんなになすつちやいけませんわ。ちつと寝てゐらつしやらなくちや——」

「何でもない——何でもないので。」

「いゝえ、大變、おわるいんですわ。いけません、いけません。」

と、萬千子は兩手を啓三郎の肩にかけ、優しくそこへ寝かしつけるやうにして、

「静かにしてゐらつしやれば、すぐよくおなりになりますわ。」

「否、否——。」

啓三郎は、一寸眼を閉ぢ、息切を押し鎮めながらいつた。

「あなたに——あなたに會へさへすりや、僕ア——死んでも構はないんです。」

「まあ、そんな事——。」

「僕は——あなたの事を心配してゐたのです。あなたが——あなたがどうしてゐらつしやるかと思つて——心配してゐたのです。」

啓三郎は、萬千子を見上げながらいつた。

「まあ——。」

といつたとき、萬千子はいふべき言葉を知らなかつた。あのやうにまで慘酷に振捨てたこの自分を——と思ふと、萬千子は、何といつていゝか分らなかつた。

さうだ。啓三郎の言葉は神の言葉だつた。人間の言葉では答へる事の出来ない神の言葉だつた。

九

「あなたは——あなたは、泣いてゐるんですね？」

啓三郎はいつた。いひながら、しきりに片手を動かした。萬千子の手を求めてゐるのであつた。

萬千子は、その骨張つた手をしつかりと握りしめた。いはうとしていひ得ぬ千言萬語を、その握りしめのうちにこめるやうにして。

「ありがたう！——ありがたう！」

いひながら握り返した啓三郎の手には、瀕死の病人とも思はれぬ強い力があつた。燈火の消えなんとして一時の明るさを増す丁度その時期でもあつたらう。同時にまた、死を以て戀したその人に會ふ事の出来た、一生一期の喜が異常の緊張を彼の意識に齎したのであつた。啓三郎の様子はこの二三日、たゞ昏々と眠りつゞけ、讒言をいひつゞけてゐた病人とは思はれなかつた。

「——だが、どうして——。」

と、啓三郎はいつた。

「どうして、こゝへ来てくれたのです？」

「お詫にまゐりましたの。許していただくかと思つてまゐりましたの。——許して下さいませ。私、本當に悪かつたのでございます。」

萬千子は繰返した。

「許すも許さないも——僕は、うれしいのです。思ひがけなかつたんです。あなたが来て——来て下さらうとは——あゝ、僕は矢張り、夢を見てゐるんじゃないんでせうか？——僕は、あなたの——あなたの夢ばかり、見てゐたのです。」

と啓三郎は喘ぎくゞつてけた。

「どうぞ、僕のそばに、そこに——そこにゐて下さい。」

啓三郎は、萬千子の手を一層強く握りしめた。

萬千子はうなづいて見せた。

「死ぬのだ。——多分、もう僕は駄目なんです。だから、それまで——それまで——」

「いゝえ。そんな事仰有らないで、早くよくなつて下さいまし。私は、いつまでもおそばに置いて戴きます。」

「いつまでも？ ぢや、僕がよくなつたら、もう一度——もう一度——」

「え。」

ほどぼしる涙の中で、萬千子は強くうなづいた。

「あなたさへ、許して下さいましたなら——」

「本當——萬千子さん、それは本當ですか？」

「どうぞ、早くよくなりになつて下さいませ。」

「ありがたう！ よくなります！ 病氣なんか何でもないのですよ。あなたがさういつて下さりやア——僕もきつとよくなりますよ。」

啓三郎の顔には、明るい喜の色が萬遍なくひろがって行つた。

啓三郎は、萬千子の手から自分の手を離した。そして、片方の手を毛布の下から出した。二つの手が、わなゝきながら、胸の上のところでもつれ合つた。萬千子は最初、それが何のためか分らなかつた。が、左手の無名指にはめられてある指環を抜きとらうとしてゐるのである事がやがて分つた。

左手の無名指には、同じ指環が、二つ重ねて嵌められてゐた。——啓三郎はその一つを、わなゝく指先で、辛うじて抜きとると、それを萬千子の方にさし出すのであつた。

「これは——あなたのです。あなたのです！」

萬千子は指環を受け取つた。見ると、それは、彼女が彼から贈られた結婚指環だつた。あの城西ホテルの入口で

運轉手に渡してしまつたその指環であつた。

どうして、この指環が、この人の手に戻つてゐたのだらう？

萬千子には不思議でたまらなかつた。——だが、萬千子はその疑問を口にする事が出来なかつた。

流石に、ひどく疲れたと見えて啓三郎は、ちつと眼をとぢた。促迫した短い呼吸が紫色の唇をふるはした。——

しかし、その口許には満ち足りたやうな微笑がたゞよつてゐた。樂しげな陶酔的な恍惚をそのまゝに、啓三郎の意識は、再び混沌の底に沈んで行きつゝあるのであつた。

「僕はうれいす！ 萬千子さん！」

眼を閉ぢたまゝ、もう一度繰返した啓三郎の言葉は、再び、あの諭言めいた力ない調子になつてゐた。

十

激しい心身の衰は、流石にそれ以上の緊張を支へ兼ねた。啓三郎の意識は、再び現實の敷居から迂りぬけて行つた。しかしその魂に波打つ喜は、混沌たる眼の底までも續いてゐた。

啓三郎は微妙な樂の音を、その夢の中で聴いてゐた。明るい樂しげな華やかな、そして莊嚴な樂の音は、あのN會館の結婚披露の宴でかなでられた結婚進行曲だつた。

そのまぼろしの樂の音の、波となり渦となつてゆらぎ渦巻くが中に全身をたゞよはせながら、高く、高く、大空高く翔けり行く自分を啓三郎は感じた。片手には、しつかりと、花嫁を抱いてゐる。花嫁の長い振袖が翻つてその美しい模様の色彩がさながらになびいて虹を投げると、赤い紙きれ白い紙きれがひんぷんとして、落花のやうに、その虹の輪から二人の肩に頬に散りかゝつて来る——と、東京驛から出かける時、汽車の窓から見送つた人達の顔がそこに浮んで来る。

(萬歳！)
(萬歳！)

さういふ叫びが聞えて来る。

汽車に乗つてゐるのか知ら？——いや、さうぢやアない。無限の空間——明るい光とたのしい樂の音とに充ち満ちた無限の空間をふはりくぐと雲を踏んでのぼつて行くのだ。

(あふない！)

と、思はず手に力を入れる。萬千子が、両手の間から這り落ちようとしたので。

(ほ、ほ！ 大丈夫よ。)

と、萬千子は艶然として笑つてゐる。

(しつかりと——しつかりとつかまつてゐらつしやい。)

(大丈夫よ。)

萬千子は、さういひながら、両手でしつかりと抱きつくやうにする。

——たうとう、この人は自分のものになつたのだ。完全に自分のものになつたのだ。

(萬千子さん！)

(何ですの？)

(僕、うれしいですよ。)

(さう？)

(僕はあなたを探してゐたのです。——どんなに探してゐたか知れないですよ。)
(すみませんでしたわね。)

さういひながら、萬千子は首に手を巻きつける。そして、唇を額にさし寄せる。

啓三郎が夢の中で、その額に萬千子の唇を感じた時、萬千子の唇は、實際に、啓三郎の唇の上にあつた。

萬千子の涙にぬれた頬が、啓三郎の額に、すれぐれに近寄せられた。——そして、結婚して妻と呼ばれる身になりながら、かつて一度も許した事のない唇を、萬千子は心からの愛と謝罪の念とを以て、その瀕死の病人の熱はんだ

額に押し當てたのであつた。

「萬千子さん！」

啓三郎は喘いだ。喘の中さういふ聲が聞えた。

萬千子は、唇を離して顔をひいた。啓三郎は眼をあいた。萬千子はすこし赤くなつた。

「矢張り、そこにゐて——くれたんですね？」

啓三郎は、ちつと、萬千子の顔を見あげながら、

「僕は、今夢を——夢を見ましたよ。」

「どんな夢ごらんになりました？」

「とても——楽しい——楽しい夢でした。」

「まあ。」

「僕は幸福——幸福ですよ。」

啓三郎は両手をさし伸ばした。そして、低くかゞみかゞつた萬千子の肩にその両手をかけて、

「僕は、死んでも——死んでも——幸福です。あなたは——矢張り、僕の處へ来て——来てくれたんですね。」

その時、ごとりと音がした。

振返つて見ると、控室との間のドアがすこし開いて、その間から宮子の眼がちつとのぞき込んでゐた。

屈辱

萬千子がよろめくやうに病院の門を出たのは、その夜も、もう更けてからであつた。

——啓三郎は死んだ。
彼は、片手で萬千子の手を握りしめたまゝ、満ち足りた者の喜を口許の微笑に浮かべたまゝ死んで行つた。彼の死顔は安らかであつた。そして聲のない言葉で欺ういつてゐるやうに見えた。

「僕は幸福です。——僕は幸福です。」

啓三郎は、天上の結婚を夢みながら幸福に死んで行つた。

が、萬千子の場合は限りもなくみじめだつた。萬千子は、その亡骸を前にして悲しむ事を許されなかつた。

「あなたは、ぢやア、これでお引取を願ひます。」

照子夫人は冷然としていつた。臨終と聞いて駈けつけて来る親戚の人達などの中で、萬千子の存在は、實際妙なものであつた。それらの人達の、「一體、これはどうしたといふことだ？」とでもいふやうな穿鑿的な冷笑的な眼は、萬千子としても堪へ難いものだつた。照子夫人の言葉を待つまでもなく、萬千子は、その病室から迂り脱けた。

萬千子が廊下を入口の方へ出て行かうとする時だつた。

「もし、もし。」

と、後から宮子が呼び止めた。萬千子が病室を出て行く姿を横目で見ながら、照子夫人に何かこそとさゝやいてゐた宮子は、萬千子のあとを急ぎ足で追ひかけて來たのであつた。

萬千子は振り返つた。

「御苦勞様でしたわね。」

宮子は冷笑的にいつた。萬千子は、黙つて、ちよつと頭を下げて、そのまゝ歩み去らうとすると、

「あら、ちよつと待つて下さいな。」

（何御用？）と、萬千子は眼で問ひ返した。

「ちよつと、いゝ暮だつたわね。あなたは立派な悲劇役者だわ。」

「何を仰いますの？」

「なか／＼お芝居がお上手だと申しあげたのよ。」

「まあ！」

と、萬千子は唇をかんで、

「何か御用なら、仰有つて下さいまし。」

「ちよつと、お話ししたい事があるのよ。でも、こゝぢやお話出来ませんわ。」

「どんなお話なのでございます。」

「——あの、あなたのお宅どちら？ 私あとでお伺ひしますわ。」

「こゝでは、いけませんの？」

と、萬千子はいつたが、萬千子は、もう一時もこの身體に痛いやうな空氣に堪へられなかつた。この上、宮子の訪問を受けたる事は堪難かつたが、咄嗟の場合、住所を教へて、宮子から逃げるより外なかつた。

萬千子は、今夜も濃くこめた霞の中を、よろめくやうに歩いた。——二三町ばかり歩いてから、タクシーを呼びとめて、その中へ身體を投げ入れた。

自動車走り出すと軽い眼まひがした。彼女は眼を閉ちて胸を抱いた。彼女の眼からもう涙は流れてゐなかつた。彼女は、殆ど喪心してゐた。

「余丁町——私、余丁町ツていはなかつたか知ら？」

「いや、西大久保と仰有いましたよ。」

運転手は苦笑した。——そして、ズツと行き過ぎてしまつた自動車を、そこからまた引返させた。

大分廻り道をしたタクシが余丁町の家、横町の角にとめられるとすぐに、もう一臺の自動車がそこにとめられた。萬千子が、留守を頼んで置いた隣に挨拶して、戸をあけて中にはひつて、入口の部屋の電氣をひねつたばかりの時に、

「御免下さい。」

といふ聲がした。

「あら！」

「は、ほ！ あとを追つかけてまゐりましたのよ。」

二

「いえ。こゝで宜しいんです。ちよつとお話すれば済む事なんですから。」

宮子は、土間に立つたまゝでいつた。

「後になつてからと思ひましたけど、すぐに行つて呉れと伯母が性急に申すから、それで私お伺ひしましたんですの。」

冷たい 嘲を含んだ宮子の眼が——。

「何の御用でございませう？」

「それがね、ちよつと申し上げにくい事なんですのよ。」

宮子は笑止らしく笑つて、

「先刻、あなた、啓さんから——病人から、お受取になつたものがございますませう？」

「受取つたもの？」

と、萬千子は問ひ返したが、

「あ、あの——この指環でございませうか？」

眼を、左手の無名指にやりながらいつた。不思議にも、いつの間にか啓三郎の手に渡つてゐて、そしてもう一度自分の手に戻つて来た結婚指環——これを返せといふのであらうか？

「でも、これは私が頂いたのでございます。」

「もとく、あなたに差上げたものには違ひございせんけど、あなたは一度それをお返しになつたのでせう。多分あなたが、あの人を捨てゝお逃げになつた時、あなたがあの人にお返しになつたんだと思ひますわ。一度お返しになつたものを、又、お受取になるなんて——いえ、仕方なしにそんなものをお受取になつて、却つて御迷惑でせうと思ひますの。私の方と致しまして——と、さう伯母が申すのでございます。そんなものあなたに持つてゐられちや大變迷惑だから、是非返していただきたいと。ほ、ほ！ 露骨にこんな事申し上げてお腹立かも知れませんけどね。」

「でも、折角あゝして下さつたんでございますもの。あの方の記念として、私、お預りしときたいのでございます。」

萬千子は哀願するやうにいつた。

「だつて、そんなもの、あなたとつてお邪魔でせう？」

宮子は冷たく笑つて、

「それにね、こんな事申し上げちゃ本當に失禮でございますけど、名譽を重んじてばかりゐらつしやれない御婦人の手に、さうした物をお渡しして置きたくないやうな事を伯母は申してをりますの。何かの機會に、それを悪用されるやうな事でもあつてはなごう、何しろ、あの通り昔者でございますから——ほ、ほ！ 本當に失禮でございますわね。まさか、そんな事ッて、私申しましたんですけど。」

思ひきつた言葉だつた。——實に、思ひきつた侮辱だつた。萬千子は、眼をその指環の上に落して、血の出る程唇を噛んだ。

「もつとも、お望でございましたら、相當のお金で、買ひとつてもいと申してをるのでございます。」

「まあ！ 何と仰有るのです。」

萬千子は、きつと睨むやうにしていつた。

「たゞで返して戴けなかつたら、お金で買ひとつてもいと申すのでございます。」

と、宮子はつけ／＼とした調子でいつた。

「まあ、手切金とでもいふところなんでせうか？ 兎に角、啓さんとの——あの人の事は、もうこれぎりにして頂くやうに、と伯母はいふんでございます。勿論、あの人はあゝして亡くなつてしまひましたけど、亡くなつたあとでも、随分いひがりの材料はございませうからね。」

「まあ！」

激しい屈辱が萬千子の全身をわな／＼かした——自分を恥かしめるために、わざとそんな事をいふのであらうか？ それとも本當に自分をそんな女だと思つてゐるのであらうか？ いづれにしても、それ等のあまりに慘酷な言葉には痛烈な復讐がこめられてゐた。

——どんな女と思はれても、辯解する事の出来ない自分なのではないか？ どんな慘酷な言葉をも所詮は、甘受するより外ない自分なのだ。

物いへぬ啞の悶を以て、千本の針を吹きつけるやうな宮子の言葉の前に、萬千子は、その蒼ざめた頬を伏せた。

三

萬千子は、その指から指環を抜きとつた。

「——お返し致します。」

と、口の中でいつた。

「返して下さるのね。どうも、ありがたう。」

宮子は手を伸ばして、指環を受け取ると、わざとらしく一禮して、

「その代りに、何か御要求がありましたらば——。」

いひかけた宮子の言葉を、靜かに抑へるやうに、萬千子はいつた。

「どうぞ、この上侮辱をなさらないで下さい。お返ししたら、それでいゝんでございませう。」

「あら、侮辱だなんて、そんなつもりはないんですのよ。たゞ——。」

「いゝえ、もう澤山でございます。お歸り下さいませ。」

萬千子はまともに相手の顔を見据ゑながらきつぱりといつた。

「まあ、お怒りになつちやいやですわ。私別に悪意があつて申上げたんぢやアないんですから——。でも、本當に失禮致しましたわね。ほ、ほ！ 本當にお怒りになつちやいやよ。」

くなくと身體をくねらしながら宮子はいつた。